
平成幻想奇談掌編録

春風夜風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平成幻想奇談掌編録

【ZU-1】

N
8
6
5
3
J

【作者名】

春風夜風

【あらすじ】

•
•
•
•
•
•
•
•
•
•

作者は「原作らしさ」や「東方らしさ」という言葉は大嫌いです。当作品にはそういうものを求めないようお願いします。舞台は原作とは似て非なる全く別の幻想郷です。

はっぴーばれんたいんでー（前書き）

バレンタイン、間に合わなかった……。

はい。新連載です。相変わらず奇妙な東方観です。一応、一話完結5000字以内を目指しています。またこの作品は、同作者の『東方な日々。』ともリンクしています。なので、そちらを未読の方にはやや分かりづらい設定などがあるかもしれません。

はっぴーばれんたいんでー

2月14日。晴れ、時々曇り。

冬の寒さも折り返し地点を過ぎただろう今日この頃。博麗神社で巫女をしている私、博麗霊夢は、本日も朝から蕎麦屋でバイトに勤しんでいた。実を言うと最近は巫女としての仕事も増えたのだが、しかし安定した収入が得られるこの仕事は、すでに無くてはならないものになっている。

今日は何故か、朝から沢山の客で賑わっており、商店街の方が騒がしい。聞いた話によると、本日限りでしか食べられない希少な食材が出ているそうだ。その食材が何なのかまでは知らないが、お陰でウチの店にも客足が流れ、まだ昼前だというのに店内は満席状態になっていた。

景気の良い話はまだある。今日は何かの記念日なのか、皆、高いメニューを注文してくれた。初めての顔も馴染みの顔も、まるで財布の紐をどこかに落としてきたかの様に今日はやけに太っ腹だ。更に何故か皆フレンドリーで、期待に満ちた表情で話しかけてくるので、しかし蕎麦屋の看板娘たる私も満更悪い気はしない。店長も終始ご機嫌である。これはひょっとすると、今日は特別ボーナスが出るかも知れない。

などと浮かれていると、

「霊夢ちゃん。今日は、ホラ。誰にあげるんだい？」

そんな事を一人のお客に聞かれてしまった。慌てて声の主の顔を見る。よく見る顔だ。確か呉服屋の主人か何かだったと思う。毎日昼時になると、この蕎麦屋に顔を出してくれる。そしてその件について店長曰わく、『ありゃあ、間違はなくファンだよ』とのこと。何のファンかは聞いてないが、蕎麦のメニューか何かだろう。有り難いことである。

とにかく話しかけられたので応えることにする。

「……何の話でしょうか？」

「おっつ。さすが博麗の乙女。ガードが堅い！」

ガードが堅ければ蕎麦屋でバイトなどしていない。益々意味が分からなくなつた。何やら楽しそうというか、嬉しそうな表情も気になる。だが、そうこうしている内に他のお客から注文がかつたので、それ以上は聞けず終いになる。激しい違和感を覚えたが、まあ、何か勘違いでもしているんだろう。

何故かその日は、後にも何人かに同じ様な事を聞かれました。ブームなのだろうか。しかし、どのお客も、それ以上聞き返すと納得したようにはぐらかすので要領を得ない。挙げ句、バイト上がりに店長にも同じ事を聞かれてしまい、益々奇妙だ。

もしかすると新手的宗教が流行っているのかも知れない、と考える。しかし、だとすると神社で奉仕する巫女が、異教に流されるようでは格好が付かない。より一層、自らを強く持つ必要があるだろう。

私は決意を新たに、そそくさと自分の信じる博麗神社に帰る事にした。

そして愛しの我が家に帰ってみると、

「——おう霊夢。邪魔してるぜ」

がくつと肩が落ちる。自身が一番安心出来るはずの神社に帰って直ぐ見たのは、私が一番見たくない顔だった。白黒の装束を身に纏い、自称普通の魔法使いを名乗る奴は、悪魔を崇拜する異教の徒である。神域を乱しに來た悪党である。つまりコソ泥である。また私にとっておき（緊急時用夜食）を失敬しに來たに決まっている。

妖怪だろうが悪魔だろうが、救いを求める者には救いを与えるのが博麗の神道であるが、コソ泥には救いは無い。さっさと追い出すのが吉であろう。

「……と言つ訳で、今すぐ即刻即座に迅速に帰りなさい」

「もう少しくらい話を聞いてほしいんだぜ」

「何しに来たのよ」

私は不機嫌そのものな態度で聞く。これが絡むと大抵口くさな事にならない。魔女は不吉の象徴なのだ。

すると、そんな私の心の内など全く意に介さない白黒は、ちよつと待てよなどと言いながら帽子の中を探り始める。なぜ帽子の中に物を入れるんだ。だが私は、そんな所から出てくる物などに興味はないし、言っても無駄なので黙っておく。帽子を四次元ポケットが如く使う奴は、その内、帽子の神様に崇められればいい。

そうして奴は、私に向かって何かを放った。

「ほらよ、なんだぜ」

私はそれをキャッチする。甘いにおいがする。奴が寄越したのはチョコだった。えらく安っぽい。しかし、なら私も渡す物がある。

「……奇遇ね。私も、ほら」

そう言っただけ私も同じように白黒にチョコを放る。バイト帰りに買ってきた物だ。売れ残っていたから安かった。

「今年も、なのか」

「今年も、なのね」

溜め息混じりにごちる。一体、私達はどれくらいの間こんな事を繰り返せばいいのか。一体、私達はいつになれば友チョコから卒業出来るのか。

そう思いながら私は貰ったチョコをかじる。苦い。とても渋い味がした。

「来年は、いけると思うんだ」

「じゃあ、一応お祈りしておく？ 45円出さないさ」

——ちゃりん。お賽銭は空しい音を立てながら落ちた。それを合図にするかのように二人は同時に息を吸う。

「「来年こそはいい人が出来ますようにっ！！」」

そして、その声は綺麗にハモったのだった。

……
そりゃあ、私だってバレンタインくらい知ってるっつーの。

はっぴーばれんたいんでー（後書き）

……はい。でもこの作品の立ち位置は明確に出来た気がする（笑）

メイドの顔も三度まで（前書き）

連載のはじめは勢いが大事。という訳で二話目。咲夜さんと魔理沙のちよっとした小話です。

メイドの顔も二度まで

霧の湖、紅魔湖。その向こうには、紅魔館という大きなお屋敷があります。それはそれは立派なお屋敷です。赤と白を基調とした派手な色合いながらも落ち着いた雰囲気を保つ、大変センスのいい素晴らしいお屋敷です。

そこには沢山のヒトが住んでいました。妖怪、人間、魔女、妖精、メイド長に何やかんや。色んなヒトがそこには住んでいます。実はそのお屋敷には吸血鬼も住んでいたりするのですが、でも今回のお話には関係ないので端折りましょう。

そして、そんな紅魔館の一室。そこで、偶然遊びに来ていた一人の魔法使いと、そのお屋敷で働く一人のメイドさんが、向かい合って何やら話し込んでいました。二人とも深刻な表情です。何の話をしているのでしょうか。少し覗いてみましょう。

「……ねえ、魔理沙さんや。これで何度目になるんだろっね？」

「ははは……何度目だっけ？」

「……三度目、なんだよね。まあ、そういう問題じゃないんだけど……」
「……か見てよこれ。窓割れちゃってるよね？ 何で割れてるかは……」
「……もちろん分かってるよね？」

「……あ、ある程度には」

「ある程度っていうか全部なただけだね。でさあ、これって直さないといけないと思うんだよね。ほら、ウチって来客も多いし。このまま放置って訳にはいかないでしょ」

「……そう、ですよね」

「じゃあ、直すんだけど、でも直すとなると、それなりの費用が掛かる訳よ、やっぱり。つーか、いくら何でもそれくらいの事は知っ

てるよね？ 自称普通の魔法使いの霧雨魔理沙ちゃんでも」

「……は、はい。存じております」

「だよ。ね。となるとさ。我が紅魔館は、窓を割られる度に本来出さなくてもいい無駄な出費を強いられてるって事になるんだよね。これについては一体どう思ってるのかな。ねえ、その白黒魔法使いさん？」

「……大変、申し訳なく思っています」

「思ってるだけじゃ駄目なんだよね。そんなのいくら思っているけど、こっちには全然伝わらないんだから。そこは行動を以て誠意を示すのが常識つてもんじゃないのかな。……ああ、言つとくけど、何も頭下げろってんじゃないよ？ 下げた貴女の頭になんか一銭の価値も無いんだから。でも、じゃあどうすればいいのかな。ねえ、どうなのよ。そこら辺」

「……はっ。何かをしなければと思っております」

「……っ！ かさ。ぶっちゃけ何をすればいいかって分かってるよね。分かっててやらないだけだよ。でもそういう態度つてどうなんだろうね。ウチは別にいいんだよ？ 出るところ出てハッキリさせても」

「いえっ！ それだけはご勘弁をっ！」

「それはこれからの貴女次第なんだよね。まあ、でもウチにも体裁つてのがあるから、事を荒げて大事にしたくないってのも確かなのよ。だから魔理沙ちゃんには、是非、大人の対応つてやつを見せてもらいたいんだけど。どう？」

「……」

「黙ってたらかんないよね。ほら、何か言ってみなさいよ。ねえ、ほら、どうなの？」

「……うっ……そんな、何もそこまで言わなくてもいいじゃんか！ ……ああ、悪かったよ！ 私が悪かった！ ゴメンなさい、もうしません！ だから、許してくれよおお！」

「……ったく、次は無いわよ？ 今日のもう帰んなさい」

「ゴメンよおお！」

……皆様も紅魔館に御用の際は、当館メイド長の逆鱗にだけは触れぬよう、十分気を付けてお越し下さいませ。

メイドの顔も三度まで（後書き）

多分魔理沙は、正座くらいさせられていたと思います。

行列の出来るラーメン屋（前書き）

三話目ですっ！

しかし、そろそろ書き溜めていたモノも尽きかけていたり……。

行列の出来るラーメン屋

そう言えば、よくテレビで芸能人が美味しい、美味しい、と言って何かを宣伝することがある。その中で彼らないし彼女らは、実に美味しそうにそれらを食べている。それは成程、確かに購買意欲を掻き立てられるだろう。

だがしかし、だからと言って彼らが本当に心の底からそれらを美味いと思っているかは甚だ疑問である。心の中では正直微妙だなあと思っている可能性も十分にあるのだ。手放しに彼らの意見に賛同するのは如何なものか。彼らも所詮は人間である。言葉通りに絶賛して良いものかどうかは別問題だろう。

だが、だからと言って彼らが別の場面で、『実はあんまり美味しくなかったんだよね』などと呟いてしまうとこれもまた問題である。何故なら彼らは宣伝の為に、延いては美味しいと言う為だけに雇われた労働者である。そんな暴言を吐くものなら雇い主からすぐさまクレームが入るだろう。契約違反と言われるかもしれない。彼らもプロであるなら断じてそのような事は言ってはならない。仕事として引き受けてしまった以上、不味いなどと口が裂けても言うてはいけない。胸の内は自分の墓の底まで持つていくぐらいの覚悟を持つべきだろう。

そして、だからこそ全ての判断は我々に委ねられていると言うのだ。例えテレビで宣伝していたからと言って、それが本当に美味しいかどうかは実際に食べてみるまでは決して分からない。例え店の前に行列があつたからと言ってそれが絶対に美味しいとは限らないのだ。

……済まない。もう一度言わせて貰おうか。『例え店の前に行列があつたからと言って、それが美味しいとは限らない』、のだ。さて、前置きが長くなったがつまりこういう事だ。

それは私こと博麗霊夢が、昼食を取ろうと人里をうろつくと徘徊していた時の事だ。本日は若干寒い。何か温かいものを食べたい。そう思っていた時の事だ。それは私の目に入ってきた。

『本日開店！ 極ラーメン道！』

……ラーメン屋だった。その微妙なネーミングセンスは一先ず置いておいて、その店の前の人だかりが気になった。この寒い日和にわざわざ一杯のラーメンを食べに、多くの人々が長い行列を作っているのだ。御苦労さんである。しかし、気になった。それは、そこにあるラーメンは、わざわざ列をなして順番を待ってまで食べる価値があるのか、という疑問だ。もちろん並びたくは無い。だが――、そのラーメンは食べてみたい。

迷った挙句選んだのは言うまでもなく後者の方だった。気の迷いでも言おうか。待ち時間は寒かった。手足はかじかんだ。そして一時間並んで待った結果が、

「……あんまり美味しくない」

これである。なんか麺は固いしスープも濃すぎる。あまりにもモツサリと入れられたモヤシも、そこはかとなく脱力感を煽る。結論を言うと、一時間も待っただけの価値は無いと断言出来た。残念とか言いようなない結果である。何故こんな物の為に私は良い子良い子と寒空の下で並んでいたのか。がっかりである。

しかし――、同時に私は不安になる。果してこれは、『ラーメン』にがっかりなのか。それとも、このラーメンを美味しいと思えない『私』にがっかりなのか。確かに美味しくは無い。だが、外にはあれだけの行列が出来ているのだ。美味しくないなんて事はあり得るのだろうか。

私は益々不安になる。不安のあまり周りを観察してみる。すると、皆、別段美味しそうに食べているようには見えない。だが、それほど不味そうといった風でも無い。どうにもよく分からない顔をしていた。

ふと、気になって窓に映る自分の顔を眺めてみる。すると、どう

やら私も彼らと同じような顔をしていた。

……人は、多かれ少なかれ演技をしている。私も、もちろん読者たる貴方だってそうだ。例え美味しくなくとも美味しいと言い、例え不味いと思ってもそうでないような態度をとる。或いは仕事の為か。或いは自分自身への不安ゆえか。どちらにしろ、そういった演技も生きていくうえで必要なのだろう。好きか嫌いか、それだけで済ませられないのは、人間という、集団社会の中でしか生きられない者の弱さ故なのだろう。そんな弱さが歯痒くもあり、また可愛らしくもある。

だから私は静かにこう呟いた。

「……もう一回。もう一回だけチャンスをおあげるわ」
果してそのチャンスは店に与えたのか、それとも自分に与えたのか。

まあ、どちらにしろ、今度並んでいなかったら、もう一度だけ食べてみようと思っただった。

行列の出来るラーメン屋（後書き）

ちなみに作者は、塩ラーメンに苦手意識を抱いていたりいなかったり。

暖めてから食べて下さい(前書き)

四話目です。遂に、アッサリ系魔法使いのアノ人が登場かも。

暖めてから食べて下さい

そう言えば、帰りに漫画を買っていたはずだ。

ベッドの上で仰向けになりながら、ぼんやりとそんな事を思い出した。魔法アカデミーでの仕事を終えた帰り道に、たまたま立ち寄った深夜営業の本屋で買った漫画だ。私と同じく魔法使いをやっている魔理沙が、しきりに勧めていた漫画でもある。表紙にはでかく『魔法人形大作戦』と書かれてあり、話ついでに買ってみた。成程、それは確かに個人的には気になるが、しかし研究の参考としては使えない気がする。

どうしようかなと思って起き上がりかけたが、やはり体は重い。言いようなない疲労感。全身にまとわりつく気だるさ。明日にしようと思うまで大して時間は掛からなかった。

……どうせ今更読んでも話が頭に入らないだろう。とにかく今日はもう疲れた。さっさと寝る事にしよう。

そう決めて、部屋の明かりを消すことにした。少しだけ時計を見る。現在午前二時。明日の朝も早い。私はそのまま意識を手放した。

次の日の夜。私は今日も一人で歩く。やはり、身体の疲労と気だるさは隠せない。私の研究の為にアカデミーの設備を利用出来るのはいいが、それと引き換えだった講師の仕事は、私には向いていない気がする。

そんな事を、私はまた思った。こうして毎晩家に帰る道なので、いつも考えてしまう。いけないな、と自分に言い聞かせるが、やはり気は重く、足取りも重い。だが、それでも夜は無慈悲に更けていく。

家までの道のりには坂がある。借家として使っている木造ボロアパートの真正面。それなりに傾斜の急な坂だ。私は帰り道にこの坂

を登る度に、この家に越してきたのは失敗だったなと思う。アカデミーでの講師の仕事を引き受け、場所が近いからと今まで住んでいた家を引き払って数年。新しい住処となったボロアパートには未だ慣れない。

……何だか、嫌だ嫌だと言っただけの嫌な気分。しかし、嫌なものは嫌なのだから仕方が無い。でも、こうして愚痴っただけの自分も、どうしようもなく嫌だった。

そうして結局、何を考えていたのか忘れた頃に、いつも通り部屋の前に着いている自分が居る。不思議だ。慣れていない筈なのに、身体の方だけはこの道に慣れきっているようだ。

部屋の明かりをつけてベッドに身を投げる。すると、途端にお腹から情けない音が出た。切なくなるような音と同時に空腹感が襲う。

ああ、駄目。お腹すいたわ。しかし、ウチに買い置きなんてものは無い。私は一人暮らしで、帰ってすぐに料理をする気にはなれない。なので、いつもは帰りに食べてくるか、簡単なインスタントものを買って済ませている。だが、すっかりしていたため今日はそれも無い。失敗したと思いつつも、やはりまた外に出るのは億劫なので、今日はもう寝て誤魔化す事にする。

またお腹は鳴る。それを忘れようとして関係ない事にばかり頭を巡らせる。今日の事。昨日の事。その大半はどうでもいい事だ。

そう言えば今日も漫画読んでないや、そんな事を思い出していた時だ。私は今更ながらに部屋の異変に気付いた。

「……あれ？ 部屋、綺麗になってる……」

私は掃除をしない。もちろんオフの日にはするけど、それでも積極的に掃除しようとは思わない。部屋の中は、ある程度ごちゃごちゃしていた方が落ち着くし、大事な研究資料もあるから不用意に動かさない。そうやって何のかんのと理由を付けて、本格的に部屋の掃除をした事は無かった。

だから、こんなに小奇麗になっているのは入居以来はじめてだっ

た。そして、この無遠慮とも言えるな片づけ方に、私は覚えがあった。

「来るなら、先に言いなさいよね」

思い出す懐かしい感覚。いつもそうだった。勝手に部屋の中のものに触るなって言ってるのに。気が付けば勝手に片付けて勝手に帰っていく。つくづくお節介だと思う。そしてそのお節介さんは、掃除だけでは物足りなかったらしく、テーブルの上にはこんなものも置かれていた。

『——温めてから食べてください。ママより』

その小さな紙切れには、確かにそう書かれてあった。

「……ばか」

呟きながらテーブルの方を改めて見る。そのメモの横には田舎くさい料理の数々が置いてあった。お皿に山盛り。こんなに食べられないって言うてるのに。昔私が好きだった料理が、これでもかと載せてある。ラップに包まれたそれは既に冷たくなっていたが、それは間違いなく母の手料理だった。

……本当に。タイミングが良いと言うか悪いと言うか。まるで全部見越していたかのような手際の良さだ。

「あーあ。もう、参ったなあ。これじゃ弱音吐けないじゃん、私」
まったく、なんて事をしてくれるんだ。私はもう疲れたのに。もう全部投げ出したかったのに。こんなことされたら私は、私は――、

結局、それは温めずに食べた。温めてしまったら温もりが逃げてしまいそう。私はそれをそのまま食べた。もう完全に冷え切ったそれは、もちろん全然美味しくなかったけど。私は淡々と、それを全部食べた。温かいはずは無い。でもそれは当然、……とても温かった。

私はまた明日も、朝早くに家を出て、夜遅くに帰って来るのだろう。それは変わらない。もちろん辛い訳ではないし、投げ出し

たい気持ちが無い訳でもない。でも、それでも私は、明日の朝もこの玄関から飛び出して、仕事に向かうのだろう。ほんの少し憂鬱になりながら。それはやはり仕方のない事なんだろう。

私には夢がある。どうしてもやり遂げたい事がある。だから、その夢を叶えるために私は一步を踏み出した。覚悟を決めて新しい世界に飛び出した。しかし、その代償として得た生活は少し息苦しいものだった。少し思っていたものとは違うものだった。

でも、私はきつと頑張れる。明日もきつと頑張れる。十分元気を貰った。栄養も十分だ。だからきつと頑張れる。私はきつと頑張れる。

そう思い、今日はまた眠ることにした。漫画は結局読んでない。しかし、それでもいいんだろう。私にはまだ時間は沢山あるのだから。少しずつ前進していけばいいだろう。時には立ち止まってもいい。振り返ってもいい。また歩き出せばそれでいい。きつとそれでいいんだ。

翌朝、私は奇妙な現象に遭遇した。何故かはわからない。頬に涙の跡があったのだ。でも、泣いた覚えは無いからきつと気のせいなのだろう。そういう事にしておこう。

ただ、この胸にある温かさだけは、……どうやら本物らしかった。

暖めてから食べて下さい（後書き）

——その一言が温かった。

モチーフとなったのはBUMP OF CHICKENさんの至高の名曲『ベル』です。何だかんだ言っても、バンブではこの曲が一番好きなんですよねえ。

灯りを点けましょ、ぼんぼりに（前書き）

なんとか間に合いました。ギリギリセーフです。

やっぱり雛祭りが来ると春になった気がします。

灯りを点けましょ、ぼんぼりに

そりゃあ、我が博麗神社にだって雛人形くらいはある。雛祭りの日には、飾り付けもちゃんとしている。しかも五段だ。三人官女はもちろん、五人囃子に右大臣左大臣も完備。拵えも立派な物で、さぞ良品であることは素人目にも明らかだ。他人に自慢したくなるような雛である。

ただし——、私のものではない。いや、私のものなのだが、元は別宅のものだったりする。そもそも私の雛は、私自身の手によって既に葬られているのだ。

こんな昔話がある。その時私は5歳。元氣盛んで近所でも有名なお転婆娘だったそう。男の子と喧嘩しても負けた事はない。常勝無敗、天下無敵、向かうところ敵なしの勇ましいお嬢さんだったそう。

私としては、そんな不名誉な過去は話半分で聞いてもらいたいのだが、そうもいかない事件があった。それが、雛人形頭部消失事件である。正直、あまり人に話したくは無いのだが、そろそろ懺悔の時だろう。事件内容は以下の通りだ。

私はその時、つまり雛祭り当日。今は亡き両親（嘘である）と共に、居間に飾ってある雛人形を眺めなら、雛あられや菱餅を食べていた。ちびちびと甘酒を飲みながら（白酒は子供は駄目なんですって）、母から雛人形にまつわる婚期遅延説なる怪談を聞いて震えていた。実にのんびりまったりとした時を過ごしていた。

しかし私は5歳。いい加減飽きてくる。そろそろ外に出掛けたい。ちらりと雛壇を見る。目の前にはお雛様。——ああ、良い事を思いついたわ。そうして私は、飾ってある雛を手にとって神社を飛び出したのだ。

……それはさぞ楽しかったのだろう。さぞ夢中だったのだろう。

何をしていたのかはまるで覚えていないが、楽しかったという事だけは、はっきり記憶している。まるで夢の様な一日。私は気分上々有頂天外で家路に着いた。そして、帰って気付けば雛の頭部が無かったのだ。

……悲劇である。断じて喜劇では無い。忌わしき過去の悲劇である。そして、そんな悲劇により、我が家の雛人形は年中無休でお雛様が不在なのである。雛の御首は、楽しかったはずの記憶と共に闇に葬られてしまったのである。婚期が遅れるのではと内心冷や冷やものである。

しかし、数年前、この新しい雛飾りが我が家にやって来た。それが先に言ったゴージャス雛だ。もう雛遊びは卒業したぜと言い張るものの、雛が前にあれば飾りたくなるのが乙女心。何のかんと言いながら、毎年飾っている。そして、それは今年も例外ではなかった。

「よう、霊夢。邪魔するぜ」

そう言っただけ現れたのは例の白黒。縁側で寛いでいた私の答えを待つ間もなく、我が物顔で部屋に侵入している。因みに言っておくが、ここは奴の家では無い。呆れつつ、仕方が無いので私も応える。

「お呼びでないわ」

「……律儀に冷たいのな」

「雛壇は奥よ。見たら、ついでに食料持ってこっちに来なさい」

私がそう言つと、わかったぜ、と言いながら白黒は部屋の奥に消えていく。

……どうせ来るのだろう。そんな気はしていた。雛あられや、今は飲めるようになった白酒も、奴の分も一応用意している。去年も来た。ならば今年も来るだろう。それくらいホームズで無くても推理出来る。

奴の目当ては豪華な雛飾りだ。奴の所には雛人形など無いから、時期になると見たくなるのだろう。なら、私は自分一人で楽しむ気

は無い。雛人形に憧れを持つのは誰だって同じ。それに今日は女の子のお祭りだ。それくらい許してやってもいいだろう。せつかくの雛飾りも、見せる相手がいないでは張り合いが無い。

「今日はやけに暖かいぜ。まだ箒で飛ばば寒いけど、そろそろ冬も終わりつて感じかな」

「そうね。良い季節になるわ」

春は良い。春は食べ物美味しい。縁側で昼寝など最高だ。あられをボリボリと食べながら、そんな事を思う。隣に並ぶ白黒も菱餅をくちやくちや言わせている。

他愛もない話は続く。

「そついや聞いたんだけど、あの雛って元々霊夢のじゃないんだって?」

「そつよ。貰いもの。というか神社としては祀っているつてのが正しいかな? あれは、雛祭りを前に娘を亡くした両親が、どうにか供養してくれないかってウチに預けたもののなの。年を取ってからの子供だったから、二人目は無理だろうって」

「……結構ヘビーなんだな」

「結構いわく付きよ。多分、去年より髪が伸びてるわ」

「……マジ?」

さらりと言ってみる。いい反応だ。

「嘘。そうならないようにウチで預かってるんだから。そんな訳ないでしょ」

一応、巫女だ。大事な物の管理くらいきちんとやる。というか去年も同じ話をした気がする。確かその前もだ。そして、恐らく来年も同じ話をするのだろう。

奴は言う。

「なあ、霊夢。来年も見に来ていいかな?」

それは、そつぽ向きながら、とても魔女っぽくない言葉だった。

「魔理沙が女の子なら、断る理由は無いわ。見たいのならいつでも」だから、私も同じようにそつぽ向きながら、それだけ言った。

——今日は桃の節句、雛祭り。女の子の成長を祝う日。

私が、お転婆だったあの日から、どれだけ成長したかは分からないけど、……成程この白黒に雛を見せびらかしてやるくらい余裕は出来たらしい。

神社の境内に、南から北に向かう温かな風が吹いた。もうじき雪の下に埋まっていた新芽も芽吹き、色とりどりの花々が鮮やかに咲き誇る。そうして今年も、穏やかな春がやって来る。

灯りを点けましょ、ぼんぼりに（後書き）

女の子は雛祭りの日には乙女になっていいと、法律で決まっている
そうです。

河童の川流れ（前書き）

たまにはシリアスでも、いかがしら。

河童の川流れ

その橋が流されたのは一月前の事だ。突然、鉄砲水に襲われたらしい。川幅も狭い小さな川だ。橋とてそれほど丈夫には作られていない。その橋は、あつという間に崩壊し、土砂と共に流れていった。話はそれだけで終わらない。

その時、丁度橋を渡っていた子供がいたのだ。寺子屋帰りの子供が五人。まさか崩れるとは思わず、談笑しながら橋を渡っていた。そして、突然崩壊した橋と共に、濁流へと飲まれていった。

彼らの死体を発見したのは、下流の湖で漁をしている漁師だった。漁の為に仕掛けていた網に、子供の亡骸が引っ掛かっていたらしい。さらに、湖での搜索を開始した搜索隊は、その日の内に新たに二人の死体を発見した。また、その翌日には残り二人の死体も発見され、結局、全員死亡という結果となった。それは事故発生から丁度三日後の事。こうして、まだ十にも満たない子供たちの命が、一瞬にして消えていった。

全員死亡の訃報を受けた寺子屋の教師、上白沢慧音は、すぐに川の整備工事を行うよう市政に陳情を行った。元々事故の多かった川でもある。今回の惨事を教訓とし、改善策を講じるべきだと強く主張した。さらに周辺住民からも同様の声が多く寄せられ、市は、すぐさま川の整備に着手する事を決定した。こうして、川の整備工事は急ピッチで進められた。

事故の原因は、川の上流にある自然のため池だった。事故前日からあつた雨がその池に溜まり、それが遂に許容量を超えて溢れ出したのだ。二度と同じ事故を起こさない為に、今度の橋にはこれに耐え得るだけの強度を持たせねばならなかった。そして、その難しい工事計画の担当には、なんと慧音が自ら名乗りを上げた。

それから慧音は、毎日のようにその工事に立ち会った。何か問題

が起きれば積極的に意見を出し、例え増水しても耐えられるようにと、川幅を今より広くとるよう計画の変更もした。他の誰よりも真剣に工事に取り組み、他の誰よりも痛切に橋の完成を望んでいた。その姿はまるで、何かに取り憑かれているかの様だったと言う。

……事故の日、流された子供たちを寺子屋から送り出したのは、そこで教師をしていた慧音だった。

それから間もなく、川に新たな橋が架かった。以前のような木で作られた橋ではなく、石造りの丈夫な橋だ。慧音の計画通り、周辺の川幅は広くなって流れが緩やかになった。もうそこにあるのは、子供の命を奪った悲しき川などではない。人が流されたことなど想像も出来ないほど安全な、誰もが安心して渡れる川だったのだ。

「——ようやく完成したみたいだな」

私は、出来たばかりの橋をどこか寂しげに眺めていた女に話しかける。少し陰のある後ろ姿。その女こそ、橋の完成を誰よりも待ちわびていた、慧音だった。

「……？ おお、魔理沙か。どうだ、立派なものだろう？」

「ああ。あのくたびれた橋と比べたら大した進化だぜ」

「ふっ、そうだな。正しくそうだ。……だがこれで、あんな事故は二度と起らないさ」

そう言って慧音は目を細め、再び目の前の橋をただ眺め続ける。

その、神妙な面持ちの慧音が、何を思っていたのかは、私にも何となく分かった。

「あんまり気負うなよ。慧音のせいじゃないだろう？」

「仕方ない、そういう性分だ。だが確かに、竣工式でこんな顔をされたら、神様も不服かもしれんな」

「……？ なんだって？」

「もう終わったよ。なかなか立派な式だったぞ」

慧音はそう言って顎で人だかりの方を示す。そこには工事の関係

者らしき人たちと、赤と白が目を引く独特の装束に身を包んだ若い巫女がいた。

「……って、霊夢じゃないか」

「そう、今回の式典は霊夢が仕切っている。あれはあれで、ちゃんと巫女をしているって事だよ。少しは様になって来たんじゃないかな？」

成程。言われてみれば、どことなく動きがキビキビしていて、その顔も自信ありげだ。

「へっ、随分大人になりやがったぜ」

「そうだな。まあ、とりあえず挨拶でもしてやれ。霊夢の奴も緊張しっぱなしで疲れただろう」

そう言って慧音は再び橋の方に顔を向ける。やはり色々と思うところがあるのだろう。私はそんな慧音を残し、言われた通り霊夢の元に向かう事にした。

「おーっす。格好良かったじゃないか、霊夢」

「……不吉、不吉だわ。せつかくの祭典のに。不吉な白黒が居るわ」「宗教差別は良くないぜ。まあ、本当言つとさつき来たばかりで、霊夢の活躍は見えないんだけどな。……で、どうだった？」

そう言つと霊夢は、もじもじしながら下を向いて目を逸らす。そして、ぼそつと小声で答えた。

「まあまあ、かな……？」

えらく控えめな答えだ。霊夢らしくもない。何か悪いものでも食べたのか。少し怪訝に思いながらも、ふと視界の端に小さな祠が建っているのに気付く。まだ建ててから日が浅いのか、傷も汚れも無く新しい。

「——神様になったのよ、あの子たち」

私の視線に気付いたのか、霊夢が言う。それは遠くを見る様な眼だった。

「どういう事だ？」

「あの子たち、まだ小さかったでしょう？ その無念から闇に落ち

てしまわない様に、祠を建てて御心をお静めするの。そして、この川の守り神として私たちを見守って下さるようになってね。まあ、当人達の本意では無かったでしょうけど……」

そう言つて霊夢は、眉をひそめて難しい顔になる。何か言いたそうで、でも言葉が見つからないといった顔だ。

でも、そうか。考えてみればまだ小さい子供だ。やりたい事もあっただろう。やり残してきた事もあっただろう。未練は、沢山あっただろう。

「……悔しかつただろうな、やっぱり」

「魔理沙。机の上にお酒が置いてあるわ。それをお供えしてあげて。まだ、お酒の味も知らなかったと思うから」

霊夢は、そこにある即席のテーブルを指して言った。成程、これは上等な酒だ。確かに、こんな旨い酒の味を知らずに逝くのは不幸だろう。

「ああ。そうしておくよ」

………そいつらに、たらふく酒を飲ませてやった後、私はその場を去ることにした。

「——ああ、魔女さんですね。近くで見るのは初めてです」

霊夢と別れた後、何をするでもなく、ぼんやりと川を見ていた私は、その声の主に振り返る。そこには緑色の体に鳥のようなクチバシ、さらに水掻きと頭の上には皿のある一人の妖怪。それはどこからどう見ても河童だった。

「私も、こんなに分かりやすい河童は初めて見たぜ？」

「いやはや、これは失礼致しました。人と話す事は滅多に無いので私はこの川に住んでいました見ての通り河童のヒデキチというものです」

そう言つて河童は、握手をしたいのか、片手を差し出す。当然、ぬめっている。

「私は普通の魔法使いの霧雨魔理沙だ。よろしくなんだぜ」

河童の手をスルーして軽く自己紹介をする。というか、幻想郷にもこんな分かりやすい河童がいるんだな。

「アンタ、私の知っている河童とは違うけど。別系統か何か？」

「山の河童の事ですね？ いえ。同列です。ただ、私は力が弱いので上手く人には化けられないのです」

ふむ。そういうものなのか。あまり興味をそられない答えだった。というか、何たってこの河童は、こんなところでフラフラしているのだろう。河童は水辺の生き物じゃなかっただろうか。

「なあアンタ、力が弱いのなら川の近くにいた方がいいんじゃないか」

私は問う。そろそろ河童との会話に飽きていたのもある。

「いえ、私はもう、あの川を出るのです。これから別の住処を探そうと思っています」

「……引越しか。何でまた」

そんな私の問いに、しかし河童は一瞬言葉を詰まらせる。言いにくい事でもあったのだろうか。そして、何かを決意したような顔になった河童は、

「——工事、ですよ」

短く、そう言った。

「川の環境が変わったのです。その変化に付いていけない者は、川から消えていくしかありません」

河童は、先程までの柔和な表情を消し、急に無表情になる。今、

この河童が何を思っているのか、私には判然としない。

「この川には、ここにしか生えない苔があります。大変珍しく、栄養価も高い苔です、私はそれを食べて生きていました。その苔でしか生きる事が出来ません。しかし、それも今回の工事で全滅してしまいました」

河童は言う。あくまで無表情で無感情を装って。怒っているのか、嘆いているのか。或いは呆れているのかもしれない。

「私はもうこの川では住めません。これから上流の方にあるという池に行こうと思っています。そこになら、まだその苔があると聞きました。でも、そこが私を受け入れてくれるとは限りません。そこにある恵みにだって限りがあるのですから」

それだけ言うと、河童は口をつぐむ。言いたい事は言ったのか、それ以上は何も言おうとはしなかった。しばらく沈黙が続く。

「……すみません。つい長々と話してしまいました。貴女には関係のない話でしたよね。でも、聞いて欲しかったんです。誰かに話を聞いて欲しかったんです。有難うございます。これで、ようやくこの場所から発つ事が出来ます」

——それでは。河童はそう言つて去つて行く。どこか疲れきつたような背中を、まるで私に見せ付ける様にしながら。ひどく重い足取りの河童は、確かに何かに疲れていたのだろう。

恐らく、もう二度と会う事もない。話を聞くこともない。でも、私はきつと、この目に焼き付いてしまったその光景を、暫く忘れられそうにない。

……あの河童は、直に死ぬのだろう。恨みの言葉でも呟きながら、たった一人で死ぬのだろう。既に河童の未来は決まっている。河童の死は決定されていた。そりやそうだ。だって、何故なら、河童の言う上流の池は……、もう、無いのだ。危険だからと潰されてしまった。

池を求めて辿り着いた時、しかし既に池は無いと知ったら、その時の悲しみはどれ程なのだろう。どれ程の絶望に襲われるのだろう。それでも私は、河童に事実を教えてやる事は出来ない。私には、私の口から絶望を告げてやるだけの勇氣など、とても無かった。

「……」

何が正しかったのか。誰が間違いだったのか。どうすれば一番良かったのか。私に、何が出来たのか。

分からなかった。何も分からなかった。

でも、ただ一つだけ願う。ただ一つだけ祈る。『もう二度と、こ

の川で子供が死ぬ事がないように』と。それだけを願う。それだけを祈った。

「——ちっ、嫌な役回りだぜ……」

川を流れる緩やかな風が吹いた。そしてその風は、私の言葉を飲み込んで、何処へと流れていった。

河童の川流れ（後書き）

モチーフと云うか、インスピレーションを受けたのはRADWIN
PSさんで『おしゃかしやま』です。

って、言うんだあゝ……………なんちって。

猫の恩返し（前書き）

春っぽい話を書きたかったんです。

猫の恩返し

その猫がこの博霊神社に住み着き始めたのは、1ヶ月前のことだ。私がバイトから帰って来てみると、猫は既にそこに居た。ヤツは私のお気に入りプレイスである社務所の縁側に寝っころがり、我が物顔で情眠を貪っている。季節は春。木漏れ日が差し込む静かなる神社でのお昼寝は、さぞご機嫌であろう。

『叩き起こしたい』

それが私の正直な感想だった。何故、猫如きに私のお気に入り奪われねばならぬのか。そのままブン投げてやりたい気分だった。だが猫相手にそれは少し大人げない気もする。動物虐待は今や社会問題だ。犬様猫様人間様。その上下の序列はかなり危うい。猫とてあまり蔑ろにする訳にもいかないだろう。

仕方がないので、その猫を暫く観察してみる。実にふてぶてしい顔だ。しかし、一体何という猫なんだろうか。そう思って顔をよく見ようとしてみると、なんとその太い首には皮製の首輪が付いていた。しかもご丁寧の名前まで書いてある。“神楽”という名前らしい。何と云うか、名前さえも実にふてぶてしいものだ。それは確かに、神社に居座る猫の名前としては申し分無いのかもしれないが、しかし、つまりはこの猫には飼い主が居るということだ。猫は自分で自分に名前は付けないし、そもそも首輪なんて窮屈な物に手を出そうとは思えないだろう。どこかの飼い猫が散歩がてらにふらふらと神社に迷い込んでしまった、という具合か。

……仕方ない。ならば引き取りに来るまでの間だけでも世話をしとやるか。私は渋々その猫を部屋に入れてやることを許諾した。あまりにぞんざいな扱いをしていると、いざ引き取りにいられた時に少々バツが悪い。神社の巫女たる者、自らが奉仕する神社に汚名を付ける訳にもいかないだろう。

だからそう。最初はそんな打算的な気持ちだけだったのだ。

「ただいま神楽。今帰ったよ。」

縁側で寝転んでいる神楽に向かって声をかける。返事はない。だが、いつの間にか私は、帰る度に声を掛けるのが癖になっていた。

ドサツと、居間に買い物袋を置いて神楽の元に向かう。足取りは軽い。廊下をギシギシと愉快に鳴らしながら歩く。

神楽はいつもの場所に陣取って欠伸をしていた。相変わらずふてぶてしい顔だ。だが、その顔を見ると何故か安心する私が出た。自然と笑みが零れる。

そして私はそのまま神楽の隣に座る。上にある澄み切った空を仰いでみると、縁側から見える山々からは春の良い香りがした。まだ明るい午後のお日様は、そんな私たちを優しく照らす。

そつと、私は神楽に手を伸ばした。その狭い額を撫でてやる。すると神楽は、細くした眼をより一層細め、ごろごろと喉を鳴らした。私はそれを見て再び笑みをこぼす。何か温かいものを確かに感じていた。

「神楽。今日は店長から鰹節貰ってきたからな。晩になったら食べような」

そう言って神楽を持ち上げる。ふてぶてしい顔がこっちを見ている。それが溜まらなく可愛く思えた。顔が綻び、ニヤニヤと締りのない表情になっているのが自分でも分かった。私は完全に神楽の虜になっていたのだ。

神楽の飼い主は未だ現れない。バイト先の蕎麦屋で飼い主について聞いてみてはいるが、今のところ有力な情報は無い。もしかしたら、このまま見つからないかもしれない。だが私は、それでも良いように思えた。このまま飼い主が現なくてもいいと、そんな風に思っていた。それ程までに神楽を愛おしく感じていた。

…… ホント、寝てばかりで全然役に立たないのに。すっかり私

は、神樂を家族の一員として見てしまっていた。

「——でさあ、ヒドいんだよ？ 私、全然間違ってないのに。アレ、絶対に店長のミスだよ。神樂もそう思うよね？」

「——神樂。今日ね、地鎮祭やってきたんだよ。まあ、ちよつと素直に喜べないところもあつただけだよ。でも、私も随分巫女らしくなってきたと思わない？」

「——でね、魔理沙の馬鹿がさ。笑いダケにに当たっちゃってさ。ホント馬鹿だよー」

「——もうっ、絶対許せない！ 聞いてよ、神樂。実は今日……」

「——でね、神樂。私ね、ホントはさ……」

……楽しかった。神樂との日々が。神樂は何も答えてくれないけど、そこに神樂が居て、私が神樂の側にいて、それだけで十分だった。それで十分私は幸せだった。神樂とこのままずと一緒に居られたら、どんなに良いだろうか。最近の私はそんな事ばかりをよく考えるようになっていた。神樂の飼い主なんか絶対に現れませんようにと、そんな風にさえ思っていた。

神樂が居なくなったのは、そんな時の事だった。

「神樂……？ どこ？」

探すも神樂の姿はどこにも見あたらず、夕暮れ迫る神社の境内には、私の間抜けな声だけが響いた。自らが作り出す影は段々と濃くなっていく。急に不安で胸が一杯になった。きゅっつと切なくなるような、そんな寂しさが募る。嫌だ。こんなの嫌だ。なんと私は、神樂が居なくなること恐怖していたのだ。

普段の私は、他人に自分の弱いところなんて絶対に見せたくなかった。そんな事、考えただけで鳥肌が立つ。私は全然平気だよ。こんなの何てことないよ。そう言っただけで虚勢を張っていた。何てことな

い訳ないのに。私は意地っ張りだったのだ。

でもいつからか、そんな私を神楽との日々が変えてしまった。神楽と一緒に居る時は、何か言葉では言い表せないような充実感で満たされた。神楽は何も言わない。ただ私の言葉を聞いてくれる。だからかもしれない。私は神楽にだけは自分をさらけ出す様になっていたのだ。

……分かってる。いつかこんな日が来ることは分かってた。神楽は元々誰かの飼い猫だ。本当のご主人様が居る。私のところの神社なんて、ちよつと浮気ついでに寄っただけなんだろう。私の馬鹿っぷりが珍しくて、つい長居してしまっただけなんだろう。それを私が勝手に盛り上がってしまっただけ。ただそれだけ。そんな事は初めから分かっていた。こんな日がいつか絶対に来るって、そんな事は最初から分かっていた。

そうだ。神楽は元のご主人様の元に帰ったんだ。私のお気に入りも取り返す事が出来たんだ。全部、元通りになったんだ。だから、これは喜ばないといけないんだ。そう自分に言い聞かせた。何度も何度も繰り返し言い聞かせた。

「……神楽」

雲ひとつ無い夕焼け空に神楽の顔が浮かんで見える。こんな時でさえふてぶてしい顔だ。でも私は、その幻想を振り切って社務所に戻ることにした。

「……嘘」

だからその時は驚いた。見間違いかと思って何度も目を擦ってみた。夢かと思って頬を抓ってみた。そこにあったのは、いつものふてぶてしい顔。私が見たかった顔。神楽は夕日に染まる縁側に一人で座っていた。

「もうっ！ どこに行ってたのよ！ 心配したんだからね！」

言いながら近付く。心配かけさせた事に対する苛立ちと、同時に気が抜ける様に全身の脱力を感じる。今すぐ神楽を思いっきり抱き

しめてやりたかった。

でも、あと数歩で神楽に手が届くという段になって、私は神楽の尻尾に異変を認めた。

「神楽……、それどうしたの？」

神楽はいつもと変わらない。私のお気に入りを我が物顔で陣取っている。でも、その尻尾には私の見た事が無い物があつた。それは可愛らしいリボン。ブラブラとだらけ切つた神楽の尻尾には、そのリボンが括りつけてあつた。私はそんなものを付けた覚えは無い。だからつまり――、

「見つかつたんだ？」

「にやあ」

初めて私の問いに神楽が答えた。私は、初めて聞いた神楽の猫っぽい声に、神楽が猫であつたことを今更ながらに思い出す。

「良かったじゃん。おめかしまでしてもらつて。似合つてるよ」

「にやあ」

私はあくまで淡々と言う。でも胸の中では、何か熱いモノがぐるぐるっと駆け廻る。嫌だという気持ちと。良かったと安心する気持ちと。でも、せめて最後は笑顔で送り出してやろうと思つた。

「じゃあ、もう行くんだね。駄目だよ？ もう迷子になったら。今度はブン投げて叩き起こすからね」

「にやあ」

一声鳴いて、神楽は立ち上がる。何と言つたかは分からない。でも、確かに神楽は微笑んでいたような気がした。

「うん。元気だね」

私は何とか微笑み返す事が出来たように思う。それは酷く不格好ではあつたことは自覚しているけど。でも、それでも神楽は、縁側からぴよんと降り立ち、そのまま歩いていった。可愛らしいリボンが尻尾の動きに合わせて揺れている。私はそれを眺める。そのままずっと眺め続ける。神楽が見えなくなつた後も、ずっとずっと眺めていた。

だから、それに気付くには時間が掛かってしまった。

「……？ 何だろう、これ」

神楽がいつも寝転がっていたその場所に、何かが置いてあった。

それは神楽が大好きだったもの。バイト先のお店から貰ったものを、私が神楽によくあげていたもの。

「ぶつ。ばーか」

神楽が置いていったもの。それは鯉節だった。いつも神楽が寝ていたその場所に、自分の代わりとでも言うかの様にそれは置いてあった。

「…… まったく、どこからくすねてきたのやら。本当のご主人様には、神楽をしつかり躑躑して貰わねばならないだろう。」

「ありがとう神楽。…… もう、私は大丈夫だよ」

だから私は、その真っ赤な空に神楽の顔を重ねて見た。やっぱりふてぶてしい。でもそれは、最高に可愛らしかったのだ

猫の恩返し（後書き）

春は出会いと別れのシーズンです。いつの間にか隣の席のあの人は異動になって、全然知らない誰かが普通に座っていたりするのです。

因みに猫に鰹節を与えてはいけません。猫は喜ぶけど、病気になる可能性があるので。ダメじゃん、霊夢。

帽子の中はファンタスティック（前書き）

自分で言うのも何だけど、いつも通りの春風夜風だと思います。

帽子の中はファンタスティック

別に今まで気にならなかった訳ではない。その異変については以前より気にかけていたし、不可解だとも思っていた。何もしなかったのは、ただ単に面倒だったからだ。

実に不思議なものだ。何がと言うと、白黒の被るこの帽子の事だ。この帽子、見た感じそれほど大きい物では無い。いや、帽子としては無駄にデカイとんがりハットなのだけど、しかし規格外と言う訳でも無い。だと言うのに、奴はこの中から帽子の体積以上のモノを取り出している。とてもそんなスペースがあるとは思えない。

気たるさ漂う昼下がり、私はふとそんな事を思いついた。場所は博麗神社社務所。事務所兼自宅としているオンボロ小屋の縁側。奴は隣でぐーすかイビキをかいており、帽子は既に吹っ飛んでいる。だらしなく開いた口からは涎も垂らし、何とも暢気なものだ。

だがこれはチャンスだ。私はさっそく帽子の謎を追ってみる事にする。ヒマだからな。

まずは帽子を手取る。すると一瞬だけ白黒が唸ったが、起きる気配は無い様だ。少々ぎこちなくなりながらも探求を続ける。

帽子を手を取った感じは、これは案外軽かった。その古めかしさ、埃っぽさ、野暮ったさから、もう少し重みのあるものだと思っていたが、そうでもないらしい。

お次は帽子の中を覗いてみる。消臭剤の匂いがする。あれはあれで結構気にしている様だ。続ける。

帽子の中はごく普通——当たり前なのだが、ちゃんと底が見えた。突っついてみても反応は無し。そのハイテンションな見た目以外は、何事も無い普通の帽子だ。

しかし、それはおかしいのだ。奴はこの帽子の中から、あんな物からこんな物あらやダそんな物まで出し入れしている。ただの帽子であるはずがない。

私には一つ仮説がある。この帽子には魔術的な何やかんやが仕掛けてあり、奴がそれを作動させる事で帽子の中と別の空間とが繋がるのではないか。つまりワームホールのな仕掛けが施されているのではないか、と思うのだ。

白黒曰く、巫女が扱う術も魔法で扱う術も、根本的には同じものだそう。だから魔術でも巫女の扱う術は使用可能だし、またその逆も然り。結果に至るまでのプロセスが微妙に異なるだけで、その違いは思想の違い、宗教の違いというものだけらしい。しかし、ならば私も奴の術を再現可能はずだ。

私は最大限の巫力を帽子に込める。身に纏うオーラが見えてしまっているのではないかしら、という程。うんうん唸りながら帽子を持つ手に力を入れる。帽子は若干光始める。それを見た私はさらに力を込める。

そしてついに……！

「……テレレッテレーン。なんと帽子の中からバナナが出てきたぞ……って何でだよ！」

バナナだった。いや、進歩なのだが、何この脱力感。しかも皮だけだ。そんなものを必要としているのはドリフとマリオカートくらいなものだ。思わず一人ボケツツコミをしてしまったじゃないか。しかし、私が一人寂しくそんなコントを演じていると。

「う……ん。何やってんだぜ……？」

「げっ、魔理沙」

「あ・それ私の帽子！ 返せよ、勝手に触るな！」

「ごめんごめん」

怒られた。意外に大切にしているらしい。少し軽率な行動だったかもしれない。二秒だけ反省した。

でも、やっぱり気になるので、直接本人に聞いてみる。

「魔理沙。結局この帽子って何なの？」

「いきなりだな。何って普通の帽子だけど？」

「でも、ほら。あんたこの中から色々出せるじゃない」

「ああ、その事か。実はこの帽子の中にはな……」

魔理沙はそう言うと、帽子の中に向かって「ここによここによ」呟き始める。するとその中から青白いモノが出てきて……、

「……………くっくっく。あたしゃここにいるよ……」

「———！———！」

「……………あれ、何だろ？ 今、すごい不吉な物を見たような……………」

気が付くと、私は汗だくになって飛び起きていた。何があつたか思い出せない。あれは夢だったのだろうか？ 何か見てはいけなものを見たような……………。

まあ、思い出せないって事は、大して重要ではないという事だろう。忘れる事にする。

ところで、私は少し気になっている事がある。別に今まで気にならなかった訳ではない。その異変については以前より……………

帽子の中はファンタスティック（後書き）

……ところで、魅魔様のテーマソングが『はっぱ隊』に聞こえてしまつのはワタシだけでしょうか？

花舞う街で（前書き）

皆様、お花見はもう終わりましたか？ もう既に散ってしまったところも多いと思います。もし見逃してしまった方には、ここで春を感じて頂ければ幸いです。

花舞う街で

花びらが舞ったから、私は一度立ち止まった。

キレイなものだ。土手沿いに植えられた桜並木を見て、素直にそう思った。毎年のこととはいえ、桜を見て何も感じない程、貧相な心を持った覚えは無い。空の青を映した水面の上で、風に煽られ静かに揺れる枝垂れ桜の様は、なかなか風情がある。暫く心を奪われ立ち尽くしてしまった。

街の中央には、紅魔湖へと流れる大きな川がある。太古から人々の生活を支えてきた川だ。川は下流にいくにつれて細かく枝分かれし、いくつかは用水路として利用されている。この水路もそうした用水路の一つで、港から直接物資を運送する為に活用されていた。水路では、時折、荷物を山盛り載せた船頭が、櫂かいを漕ぎながら進む光景を目にする。小さな水路の周りには民家が達ち並び、脇には石垣で作られた土手がある。桜はその土手に植えられていた。

周りに人は居なかった。春の陽気と反比例するように静かな並木道。絶景を一人占めだ。私は一人、その並木道を歩いてみることにする。

ゆったりとした時間が流れる。何も大勢で騒ぐだけが花見ではない。一人静かに桜の花を愛でるのも、春の楽しみではないか。そして、のんびりと春の陽気を浴びながらの散歩は、人にちよつとした発見を与えてくれる。

土手沿いの民家の脇には、小さな通路が其処かしこにある。階段や小道からなる通路は、裏路地から表通りまで続いている。土手側から奥を見ると、そこは外と比べ薄暗く、しかしその対比が、春の空気を一層映えさせて見えた。

私は思わず嬉しくなる。いつもの街並みが、だけど少し違う光景が、日常にそつと色を加える。そんな時、私の今日は昨日より少し

だけ輝いて見える。

気を良くした私は、その場でくるりと一回転してみた。そのまま気の向くままに舞を舞う。神楽舞やらで練習しているので、中々様になっている筈だ。

桜吹雪の中で舞う私。普段はガサツだの色気が無いだの散々な酷評を受ける私だが、こうしているとお伽噺のお姫様にでもなった様な気分だ。

しかし、春に浮かれ過ぎていた私の頭は、後ろから無粋な影が迫っていた事に、まだ気付かなかったのだ。

「……何やってるんだ、霊夢」

いきなり後ろから声を掛けられた。聞き覚えのある声。驚きながら振り返ると、そこに居たのは寺子屋で教師をしている慧音だった。

「……いつから？」

「ぐるっと一回転から」

顔が赤くなるのが分かる。ちょっと恥ずかしい。

「……いいでしょ？ 私だって偶には風流するわ」

「くくく。お前が風流を語るか」

「うっさい、黙れ」

慧音はニヤニヤしている。腹の立つ顔だ。私をおちよくりに来たのだろうか。

「帰る。っーか、帰る」

「待て待て、別に悪いとは言っていないよ。ただお前は花より団子の方だろ。近くに旨い店がある。私を持つが、行くか？」

……聞くまでも無い。それは無論だった。

「感じのいい店じゃん。いつ見つけたの？」

案内された店は、小さいが綺麗な店だった。店内は暗いが、外には大きな番傘と長椅子が置いてあり、桜を眺めながら串団子を頬張る事が出来る。

「この前だ。お前と同じだよ。桜を見て風流していたら偶然見つけたのさ」

くっくくくと再び笑いだす慧音。取り敢えず慧音の団子を奪っておく。タレが一杯で実に旨そうだ。

「寺子屋はどうしたの。まだ終わって無いんでしょ？」

団子に食らいつきながら、少し気になったので聞いてみる。タレは少し零れた。

「そうだな、まだやっているだろう。まあ何だ。今日は私はサボりさ。あと擦るな。これで拭け。染みになるぞ」

さすが教師。懷からハンカチを取り出す。大人の女性だ。私はそれを引ったくる。

「でも意外。途中で放っぱり出すの、慧音らしくないと思うけど」

「なーに、他にも教師はいる。それに、私がいつまでも居座っているのは、他の者たちが気を遣うだろう。目の上のこぶは何時だって煩わしい。偶には全部任せてしまうのもいいさ」

慧音は自嘲気味に笑う。だが、どこか嬉しそうでもあった。

「それはそれは、いいご身分ね」

「面倒なご身分だよ」

慧音は団子を一口かじる。それを見た私も、隣で団子をかじった。

「そっちは最近どうだ？ 立派に巫女さんやってるか？」

「ぼちぼちよ。もう少ししたら田植え祭がある」

「ほう、もうそんな時期か。成程、それであんな処で舞の練習をしていた訳か」

「それはもういいっての。……あ・そっいや今年は早苗も手伝ってくれるわ。少しは楽になるかも」

言って私はまた団子をかじる。きな粉も中々美味しい。

「そうか、それは楽しみにしておこう」

「どうぞご期待下さいませ」

ふわりと風が頬を撫でた。私の黒髪が揺れて桜の花びらが舞う。遠くで雀の声もする。

「そう言えば霊夢。今度暇な時に寺子屋に遊びこい。子供たちが“霊夢姉ちゃん”に会いたいそうだ」

「……調子いいな、あいつら。何が“姉ちゃん”だ」

「それだけ懐かれてるってことさ。人気者は大変だな。まあ、何時でも構わん。その内な」

「りょーかい」

そして私たちは、少しの間無言になって、団子の方に集中する。

民家の方で犬の鳴き声が聞こえた。裏道では水を撒いている音もする。引き戸を開け閉めする音に、微かだが部屋の中からラジオの音も聞こえる。それは皆、表通りの活気からは少し離れた、静かで優しい音だった。

「——“優美”」

「……？ 何それ？」

「枝垂れ桜の花言葉だよ。派手さは無いが、穏やかで優しい美しさ。さっきのお前の舞を見て、そう思った」

「……」

慧音は少し微笑んでいた。私は何も返さずただ黙る。ちよつと居心地が悪い。

不意に、木の上に止まっていた一羽の鳥が羽ばたいた。すると、近くで日向ぼっこをしていた小鳥たちも一斉に飛び立ち、今度は一際強い風が吹いた。

「春ねー」

「春だなー」

春に吹かれた私の髪は、今度は強く乱れる。そしてそれに呼応する様に、桜の花びらが花吹雪となって宙を舞った。それは、成程、優美たる春の風景だった。

「ねえ、慧音。……団子、もう一本いい？」

「一本だけだぞ？」

そして私は、とりあえず博麗霊夢は、確かに花より団子だったという事にしておいた。ここの団子は美味しい。あと一本くらいなら

構いやしない。その言葉は、まだ私には早すぎる。今はまだ、立派な優美が咲いているのだから。それでいい様に思った。

幻想郷の春は今、私の前で咲き誇っていた。

花舞う街で（後書き）

枝垂れ桜っていいですね。ただソメイヨシノより風情があると思います。

因みに作者は、桜の下には死体が埋まっているという伝説をお婆ちゃん（お姉ちゃんだったかも）に聞かされて、暫く桜がトラウマになるという経験があったりします。

唸れ！恋の鯉のぼり（前書き）

どうもです。

ゴールデンなウィークに突入して、皆様いかがお過ごしでしょうか。
二度寝ばかりしてはいけませんよ？

ということで、二度寝を妨げる鯉のぼり偏の始まりです（笑）

唸れ！恋の鯉のぼり

「……」

「お嬢ちゃん。買うのかい？ 買わないのかい？」

薄暗い店の中で、店主の親父は面倒くさそうに言った。

「もう少し。もう少しだけ待ってくれ、なんだぜ……」

しかし、また繰り返される私の言葉に、親父は呆れたようにため息を吐いた。

かれこれ一時間近くになるうか。私はショーケースに入った“それ”を、ただひたすら眺め続けていた。店主のぼやきなど、すでに右から左だったのだ。

——実に素晴らしい筈だ。私はここまでの品を、今まで一度も見ることがない。本体は、柄から尾まで滑らかなカーブを描き、穂も、真っ直ぐ安定した癖のない纏まりがある。一見どこにでもありそうな筈だが、それでいて他と一線を画く圧倒的な存在感がある。何より感じる魔力が凄まじい。明らかにニンバスシリーズの上をいく名品だ。これを作ったマエストロは、さぞ高名な魔法使いに違いない。知らず知らずの内に、自前の筈を抱く腕に力が入った。

「でも、買わないのかい？」

「……、買えないんだＺＥ」

店主の態度が一変したのは、直後のことだった。

「ちえっ、あのドケチ野郎め。少し見るくらい良いじゃないか」

盛大に毒を吐きながら商店街を歩く。同じく道行く人が奇異の目で見てくるが、そんな事知ったことではない。

魔法科学アカデミーそのお膝元、魔法学と科学の力で急発展を遂げた幻想郷一の大都市の一角で、私——こと普通の魔法使い霧雨魔

理沙は、大変ご立腹だった。

大体飾つてあるのだから、自由に見学してもいいという事じゃないか。何故追い出されなくてはいけないのか。こうなったら、あの店の悪い噂を流して営業妨害をしてやろうか。

そんなことを思いながら上を見上げてみる。街には多くの鯉のぼりが飾つてあつた。背の高い建物が多いこの辺りでは、建物同士をロープで結び、そこに大小様々な鯉を泳がせている。でも、飾つてあるのだから、それを眺めるのは自由なのだ。

実にどうでもいい事ばかり頭を巡る。しかし、それもあの簞の前では次第に霞んでいく。

「……良い簞だったよなあ……」

とろける様な声だった。それは成る程。恋に近かったのかもしれない。

そして私は次の日も店に向かった。その次の日も、またその次の日も、私は繰り返し店に通うようになった。

何度見ても素晴らしい。こんな一品は教科書にも載っていないかった。これに乗って空を飛んだなら、どんなに気持ちいいだろうか。誰しも驚いて振り返るに決まっている。すごく欲しい。でも、私はそれを買うだけのお金がなかった。

簞はとても高価だった。品が品だ。それも当然だ。だからこそ、私が二の足を踏まされている。こうして足繁く通うより他になかったのだ。

もちろん、高価ゆえにそうそう売れないだろう。だが、金持ちの魔法使いなんかいくらでも居る。いつかは誰かが買っていく。それを思うと、不安で不安で仕方がなかった。

今日はまだある。でも明日はどうだろう？

気付けば私は、四六時中その簞のことばかりを考えるようになっていた。

そんなある日のことだった。

「なあ、オツチャン。そろそろ箒譲ってくれよう」

「なーに言ってるやがる。嬢ちゃんにゃあ、自前の箒があるじゃないか」

親父はもう見向きもしくなくなった。奥の方で新聞を読みながらキセルを吹かしている。相変わらず面倒臭そうな顔をしている。

「でも、最近こいつ調子悪いんだ。今朝だって中々飛ばうとしないもんだから、こっちに来るまでにすごい時間掛かったんだぜ？」

そのお陰で私は、アカデミーであつた魔法実験の立ち会いに遅れてしまった。今日は大事な実験をするという話だったのに。これでも来月までは予約が取れない。

思いだすと憎らしくなる。箒の柄をバシバシと叩いてみる。

「オイオイ何やってんだ。まったく何も分かってねえんだな。いいかい嬢ちゃん。箒ってのは……」

そして親父は、また面倒臭そうな事を言おうとしている。説教なら聞く気は無い。

だが、結果として親父は、次の言葉を続けるタイミングを失った。

「お願い、誰か助けてーっ！！！！」

その前に、店の扉が激しく開かれて、必死の形相をした女が入ってきたのだ。

「おいおいマジかよ。随分アクロバットな鯉のぼりだな」

それは不思議な光景だった。そこにあつたのはゆらゆら泳ぐ鯉のぼり。でも問題はそこじゃない。なんと、鯉のぼりのロープにぶら下がっている子供がいるのだ。支えているのは細い両手だけ。地上まではざつと10メートル以上はある。あんな子供なら、打ち所が悪ければ死ぬ。

「ああ、魔法使いさん！ あの子を助けてください！ あなた空とべるんでしょう？ あの子を助けて！」

やや高圧的な物言いだ。呆れ気味に聞く。

「……何たつてあんな所に行ったんだよ？」

「あの子、鯉のぼりをもつと近くで見たって、屋根を登っていったんです。私は危ないから止めなさいって言ったんですけど……でも、そうしたらあの子が……」

女はそこまで言うつと、両目から涙を流し始めた。どうやらこの女が母親か。子供の窮地にパニックを起こしている。

「オーライ、オーライ。分かったから泣くな。まあ、ここは“大魔法使いの霧雨魔理沙さんに任せときな”

言うつと同時に、手に持つ箒にさっそうと跨った。空を飛ぶのは得意分野だ。

「行くぜ！」

そして私は地面を蹴る。すると私の体は、大空に向かって飛び立つて、

……いかなかった。

「え？ 嘘。何でだよ？」

焦って箒を叩いてみる。だが箒は全く反応しない。

「くそつ、訳分かんねー。何でだ？」

何て事だ。こんな時に限って、箒が馬鹿になりやがった。

そうこうしているつと、子供が持つロープが風に煽られて大きく揺れた。子供の泣き声が大きくなる。もう長くは持たないだろう。気持ちばかりが焦った。

「……分からないか。そりゃあ自業自得って言うんだぜ、嬢ちゃん」
いつの間にか、店の親父は私のすぐ側にいた。親父の目は呆れていると言うより、怒って見える。

「嬢ちゃん、ここんところウチの店の箒ばかり気にかけて、自前の箒を大事にしなかっただろ」

「……？」

分からない。何故今その話を持ち出すのか。全然関係ない様思う。だが親父は、今まで見た事無いほど真面目な顔だった。

「空飛ぶ箒って言っても、もちろん魔法使いが魔力を与えないと飛ぶことは無い。普通の人間にとっちゃ普通の箒でしかない。でも、箒に魔力が無い訳じゃねーんだぜ？」

親父は私の箒の柄をこんこんと叩く。私は親父から目が離せない。「魔力が籠もっちゃまったもんには、どんなものでも意思が宿る。その箒だって例外じゃない。しかもそいつは、毎日毎日嬢ちゃんの魔力を大量に浴びていたはずだ。嬢ちゃんに対する思いはでかい。だと言っのに、自分のご主人様はこの頃違う箒にウツツを抜かしてる。それを見て箒は拗ねちゃったのさ」

親父は言う。視界の隅では、すでに泣く事も忘れた子供がロープにしがみ付いていた。助けを求める母親の叫びもやけに遠くに聞こえる。もう限界は近い。でも私は、親父の言葉に言いようのない衝撃を受けていた。

「……もつと自前の箒を大事にしがれ。そいつは嬢ちゃんの大切な相棒だろ？ あんまり浮気していると、二度と一緒に飛んでくれねーぞ」

親父はそう言い切った。これで話は終わりだと言うように、その場を去っていく。

……箒の思い。そんなこと、考えたこともなかった。でも、そうだ。こいつはいつも私と一緒にいて、何よりも頼りになる相棒だった。いつも私を助けてくれたんだ。それなのに私は……。

「……悪い。私、お前の気持ち、全然分かってなかった。そうだな。今までずっと一緒に飛んできたんだもん。そりゃあ、良い気分じゃないよな」

ゆっくりと自分の相棒に語りかける。相棒は何も言わない。でも今なら、こいつも私と同じように意思があつた事が分かる。

「ごめんな。確かに私が悪かった。もう許してくれとも言わない。でも頼む。あと一度だけでいい。私と飛んでくれ。あの子供を助けていんだ」

柄を握る手に力を込める。私の魔力を注いでいく。頼む、相棒。

もう一度、もう一度だけ力を貸してくれ。

——地面を蹴る。すると、ゆっくり両足が離れていく。そして私は、泣き喚く子供に向かって猛スピードで飛んでいた。

「毎度ありーっ」

そんな快活な声が響く中、私は果物屋の店内を出た。

あれから私は、あの子供の母親とは親しくなり、母親がやっているこの果物屋をちよくちよく利用させてもらっていた。今日も母のバックをフレンドリーな価格で提供してもらっている。今が旬だそうで、片手の買い物袋からは甘い匂いが漂った。家に帰ったら、さっそく頂く事にする。

結局、子供は助かった。ギリギリセーフ。手を滑らせた子供をキヤッチした衝撃で、まだ腕が痛いけど、子供に怪我はなかった。

私の箒も、あれから機嫌を直し、また一緒に飛んでくれている。相変わらず相棒は何も言わないが、でも前より少しだけ心強く感じた。

そのまま商店街を抜ける。ここからは魔法使いのエリアだ。魔法ショップが多く建ち並んでいる。そして、やはりこの辺りも多くの鯉のぼりが飾ってあった。彼らは風を受けてたなびく。その姿は、とても気持ちよさそうだった。

ふと無意識のうちに立ち止まった。脇に目をやると、そこは私が足繁く通っていた魔法ショップだった。ショーケースには、まだあの箒が飾ってある。何度見ても良い箒だと思う。

「……いや、何だ。でもお前の方が全然カッコいいよな」

慌てて言って、こんこんと箒の柄を優しく叩く。すると、一瞬だけ嬉しそうに震えた気がした。

「へへ。今日もよろしく頼むぜ、相棒！」

そして私は、また大空へと飛び立ったのだ。

唸れ！恋の鯉のぼり（後書き）

因みに。

もう分かっている方も多いと思いますが、『ニンバスシリーズ』とは、ハリポタシリーズに出てくるクイディッチ用の箒のことです。本家では主人公のハリーが愛用していましたが、途中、暴れ柳により破壊されてしまいました。無念。

五月病症候群発症中（前書き）

どうもです。世間が連休終わったのに対し、今から休みが始まる反社会的な春風夜風です。とびとび休みだから連休感がまったつく無いよー……。

さて、そんな個人的な事は置いておくとして、幻想奇談、新作更新です。

五月病症候群発症中

偶にどうしようもなく嫌になる時がある。偶にどうしようもなく駄目になる時がある。何故かは分からない。普段忙しく過ごしているとそんなこと考える暇もないのだけど、偶に、ふと一人になった時に。ふと考えてしまった時に。私はどうしようもなく分からなくなる時がある。何故自分がここにいいのか。自分のやっている事に何の意味があるのか。たまらなく不安になる時がある。

そして、そんな時訪れるのはいつもここ。さっちゃん先輩に教えて貰った秘密の隠れ家。紅魔館の時計台の下。少し広めな屋上、その一角。普段は誰もここを通らない。静かでそれでいてどこか安心出来る、そんな場所。ここより上には時計台しかない。後は大きな大きな空があるだけだ。私はそんな空を見上げ、その大きさに身を委ね、この焦燥感を少しだけ紛らわせる。

新人妖精メイドの私が、メイドの仕事をサボったのは今日が初めてだった。

『——今日は行きたくない』

何故だかそう思った。朝目覚めてすぐ、そんなどうしようもない気だるさに襲われた。昨日の一件がまだ尾を引いているのかもしれない。昨日、仕事のミスで怒られたのだ。そして気が付くと私は、朝礼をすっばかしてこんな所に来ていた。

「……また怒られるよなあ」

一人ごちる。ため息に釣られてか、どこからか葉っぱが舞い落ちる。気だるさは募る。ロクでもないことばかりを考えてしまう。

もしかして私は、メイドを辞めたいのかもしれない。そんな考えも頭をよぎった。そして、慌てて首を振ってその考えを追い払う。

しかし、払った傍からまた同じ考えがめぐる。そんな事を何度となく続けた。

でも分かっている。いつまでもこうしては居られない。早く戻らないといけない。しかし、そうは思うも気は重い。まるで鎖で縛りつけられたかのように、身体は言う事を聞いてくれない。早くしなきゃと気ばかり焦る。

そうして、三度目に起き上がるうとして、でも駄目だった時だ。

「いい度胸じゃない。因みに言っておくけど、勤労感謝の日は今日では無いわ」

「……そうでした」

メイド長は時計台を背にしたまま、私を見下ろすように立っていた。背が高いので、私から見える時計台は、すっぱり影に隠れている。メイド長の顔は逆光になっていてよく見えない。もしかしくなくても、すごく怒っていると思う。

「ごめんなさい、メイド長」

「ったく、何なのよ。昨日の事まだ引きずってんの？」

「そうじゃないです。ただ私、なんか分かんなくなっちゃって」

「……引きずってるし。思いっきり引きずってるし」

ふうっ、とメイド長は溜息をこぼす。呆れられているのかもしれない。

「そこ座るよ」

そう言いつつも、メイド長は私の許可を待たずに横に座った。しかし、それ以上は何も言わない。だから私も何も言わない。そのまま時間だけが過ぎていく。

それからしばらくは二人とも無言だった。急にメイド長が煙草を吸い出した事もある。私がメイド長と目を合わそうとしなかった事もある。どちらも言葉を発する事無く、ただ目の前の空を眺める。青い、澄み切った空がある。

……結局、根負けしたのは私の方だった。

「メイド長は、仕事辞めたいって思った事ありますか？」

そして、つい出た言葉はそんな言葉だった。気付けば、独り言の様な声量で、そう呟いていた。

「うん？ 何よ、藪から棒に」

「真面目に答えてください。メイド長は一度も辞めたいって考えた事はないんですか？」

私はメイド長と目を合わせられない。下を向いたまま視線だけを動かし、隣にいる横顔を盗み見る。綺麗な顔だなと思う。

「……あるよ。つーか今も辞めたい」

「ええっ！？ 辞めたいんですか！？」

それは初めて聞いた。メイド長はずっとここに居たいのだと思っていた。

「そんなもんでしょ、皆。辞めたいって思いながら、それでも騙し騙しで何とか続けてる」

「そういうもの、ですか」

「そ。そういうものよ」

メイド長は、何かを探して服の中へこそそそと手を入れた。私は、また煙草でも吸うんだろうかと思っていた。

「じゃーん。こういうものを持っているんだー」

メイド長が懷から取り出したもの。それは文書だった。そしてその手紙の表に書いてある字を私は知っている。私もそれを書くことと思って、調べたことがあるからだ。私の知っている数少ない漢字の一つ。それは――、『辞表』という字だった。

「ちょっと待ってね」

そう言ってメイド長は、開いた辞表を几帳面に折りたたみ始めた。それは段々と何かの形になっていく。……ああ、この形はよく知っている。私も何度か作ったことがある。

メイド長は辞表で紙飛行機を折っていた。

「うっし。じゃあ、これがあの屋根の向こう側まで飛んだら、私はメイドを辞めるって事にしよう」

「はい。……って、ええっ！？ メイド長それ本気で――」

「そうれっ!!」

メイド長は、狼狽する私など一切お構いなしに、紙飛行機を思いっきり投げ飛ばした。それは屋上を吹く風に乗ってまっすぐ飛んでいく。

——どうしよう。メイド長が辞めることになったら私のせいだ。

だが、私の心配は杞憂に終わり、紙飛行機は突然吹いた横風に煽られて失速し、結局届かずに落ちた。

「あちゃー！ 残念、また失敗！」

「……またって、そんな事ずっとやってるんですか？」

私はジト目でメイド長に詰め寄る。まったく、この人は一体何を考えているんだろうか。ふざけているのか、それとも大真面目なのか、私には判断が着かない。

「偶にね。……例えば、今のあんたみたいに何が何だか分かんなくなっちゃった時なんかには、ね」

「……」

「つーかさ、でも結局は無理なのよ。そりゃあ私だって本当に嫌で仕方がないなら、とつくの昔に辞めてる。でもね、たまーに、極稀に、この仕事やっていて良かったなって、そう思える時があるのよ。多分それがあるから、私は続けてるんだと思う」

メイド長は自嘲気味に、でもどこか誇らしげに言った。その瞳にあるのはメイドとしての確かな自信と矜持。今、私が忘れかけているものだった。

「あんたには無かった？ そういう事。メイドやっていて良かったな——って思えた事。それが一つも無いって言うなら私は止めないよ。辞めるなり何なり好きにすればいい」

その顔に見とれていた私は、言われてはつとずる。何を問われていたのか理解するのに少し時間が掛かった。私はその言葉の意味を考える。

「……私は」

私はどうなんだろうか。本当に無かったのだろうか。本当にメイ

ドを辞めたいのだろうか。私は考える。無い頭使って考える。一杯考えて、一杯思って、そして私が思い出したのは、

「……そっか。そうですね」

その言葉は自然と出てきた。それは多分、自分自身に向かって言ったのだろう。私は――、うん。分かっている。私はもう分かっている。……そう、だから、要するに、つまりは、結局、こういう事で。

「しゃーないって、事ですよね」

「……そういうこと」

「ふふふ。しゃーないんですね」

つまり、そういう事なのだ。ホント、しょうがないのだ。それは呆れるくらいに、しょうがない事なのだ。ぐるっと遠回りしてみたけれど、結局そういう事なのだ。

――まったく、メイドなんて疲れるし格好悪いしお休みだってあんまりないし、どうしようもない仕事なのに。嫌で嫌で仕方なかったのに。辞めたくて辞めたくて仕方なかったのに。

でも、それがどうだ。今こうして思い返してみるとそこには、楽しかった記憶しか残っていない。……ううん、それはきつと“楽しい思い出”って奴なんだろう。その楽しい思い出しか、私の頭の中には残ってはいなかったのだ。

「ちえーっ。メイド長のお陰で辞めそびれました」

「それはどう致しまして。まあ、せつかく使えるようになった貴重な戦力を、簡単に手放すのは惜しいわ」

「もうっ、何ですかそれ？」

そして、メイド長に返す私は、多分笑っていた。だからきつと、何だかんだ言って私はここが好きなんだろう。皆がいるこの紅魔館が。ワイワイ騒がしいこの紅魔館が。そこで働ける事が嬉しいのだろう。こんな素敵な上司がいることが誇らしいのだろう。

「今日はどうも有難うございました。――“さっちゃん先輩”」

「……ん。それじゃあ本日も楽しんで参りましょうか。――行くよ、

新人！」

「はいっ！」

だから、また歩き出すことにしたんだ。

五月病症候群発症中（後書き）

失敗しない雨も降らない人生なんて、無い。

……遅刻でもいいから、行こうかな。

（B U N P O F C H I C K E N ホリデー）

……ゴールデンなウィークも終わり、そろそろ例の病が発症している方も居るのかもしれない。まあ、偶には立ち止まって見るのも悪くないかもしれませんが、いつまでも止まったままではいけないからね。バンプの唄でも口ずさみながら、ゆっくり歩いて行きましょう。

綿雲デイズ（前書き）

ちよつと間が空きましたが更新です。今回は、ぱっと思いついてしまった小ネタです。

綿雲デイズ

あの雲が、とても美味しそうに思えたから、頬を張って気を引き締め直した。

——業務報告。本日は晴天なり。西寄りの風に多数の雲が上空を通過中。不審者の気配は無く、紅魔館、門扉共に異常なし。引き続き警備に戻る。以上報告終わり——。

そして眠い。馬鹿に眠い。いや、夜に寝てない訳でもないのだが、門番というのはやはり、待つのが仕事なわけで。来客が来なければ、退屈な訳で。だから、うとうと船を漕ぎたくなるも仕方ない訳で。

別に、やる事がないわけではない。むしろ沢山ある。錆が付きはじめた門扉の柵も綺麗にしてやらなければならないし、溜まりに溜まった業務日誌のまとめ作業もしなければならぬ。そういえば、花壇の水もまだだった。考えれば考える程、やるべき事は山程ある。だがしかし、眠い。駄目なのだ。一度このモードに入ると、中々体は動いてくれない。脳から発せられた『働け』の電気信号は、四肢に届く前にフィードバックを起こす。思考は堂々巡りに陥り、欠伸の一つもしたくなる。ついでに小腹も空いてきた。ならばいっそ、怠惰を極めた遊びでもしてみようか。

例えば、あの雲は綿飴に見える。隣はおにぎりに見える。その上は桃に見え無い訳でもない。——ああ、いいなあ桃。もう少ししたら実が熟して美味しくなるだろう。ちなみにその横を飛んでいるのは氷精チルノだ。あれは美味しそうでは無い。

流れる雲を次々と食べ物に見立てていく。綿飴が多いのは気のせいだろう。おや、今度は羊だ。まさに羊雲。ジンギスカンもなかなか良い。ではその斜め上の雲どうか。

うーん、これは。……いや、そういえば、少しだけ咲夜さんのエプロンに見えなくも無い。

「……」

咲夜さん。今は買い出し中だ。帰ってきたら今度は夕食の準備に取り掛かるのだろう。そして、夜遅くまで何事か仕事に手を付けているのだ。咲夜さんが一体いつ休んでいるのか、私は知らない。今日も、朝も早くから仕事に追われていた。愚痴は多いけど、誰よりも仕事をしている気がする。この館の住人の中で、エプロン姿が一番似合うのは、間違いなく咲夜さんだ。エプロンは咲夜さんの仕事着であり、咲夜さんの象徴みたいなもののなのだ。

「でも、私はエプロン似合わないけどねー」

私がエプロン来て走り回っていた日々が懐かしい。でも、今はもう着れないだろうな。エプロンは咲夜さんに移った。その資格は私には無い。それは頑張っている人だけが着れる特別な物だから。今の私が、着られる筈も無い。

……でも、そうだよ。咲夜さんは頑張っている。咲夜さんも頑張っているんだ。私も頑張らなくちゃ。こんなことしてないで、早く立ち上がろう。

背にしていた紅魔館を振りかえる。大きい。照り返して輝く紅魔館は、どこか神々しくも見える。それに一度だけお辞儀して、私は、空を見上げながら誓うのだ。

「よし、がんば……」

「……それで、何ぼけつとしていたのかしら。美鈴君は」

びくつとして後ろを振り返る。すると、いつの間にか、私の真後ろに、荷物満載の自転車を押す咲夜さんがいた。坂道をで疲れ切ったのか、荒々しく肩で息をしている。

「あ、いえ、咲夜さん?! お、おかえりなさいっ」

「ただいま。……まったく暢気なものね。こっちは汗だくだったのに」

「いえ、違っんですよ咲夜さん。実は今からですね……」

「美鈴。あんた、夕飯抜きね」

ぴしゃりと言いつつ放った。咲夜さんの顔は飛びきりの笑顔だった。

うん。とても楽しそうだ。

「そ、そんな。私は今ですね。かたーい決意を……」
「抜きだから」

咲夜さんは、颯爽と紅魔館へ歩いていく。ああ、格好いいなあ。
とっても素敵です。

「……、本気であの雲、食べられないかな」
そして私は、あの綿飴雲に向かって、静かに呟くのだった。

綿雲デイズ（後書き）

雲から何かの形を連想することってありますよね。しかし、作者の場合は、どれを見ても綿飴にしか見えません。あれ、犬に見えるよねーなんて隣で言われても、どう見ても綿飴じゃないと思ってしまいます。なんて想像力に乏しい脳ミソなんだろう…

琵琶がたずねて三千里（前書き）

最近『東方な日々。』の方が不調です。寝る間も惜しんで（嘘）ネタを書いているんですが、完成の目処が立たないのは何故。こっちの方が書きやすいのかなあ。

琵琶がたずねて三千里

そういえば、琵琶法師なる者には今まで会ったことが無かった。

確かに、そういったものを生業にしている者が居ることは、知識として知っていたが、実際に遭遇したことは無かった。特別、唄に興味がある訳でも無し。会う機会が無かったのだ。

博麗神社の境内に乾いた鈴の音が響いた。すわ、これは一大事だと慌てて出てみれば、それは、今まさに山から降りてきたかの様な一人の琵琶法師だった。

「さ、参拝の方ですね。ようこそお参り下さいました！」

しかしその声は、若干、上擦っている。口調もぎこちない。情けない話、やって来る参拝客には、未だに慣れていない。恵まれぬこの状況に、何とも思わない訳でもない。

「……神社の方ですか？」

「はい。ここ、博麗神社に仕えさせて頂いております、霊夢と申します」

「やや、これは随分お若い。それに綺麗な声だ。早速、御利益がありましたかな？」

「それはもちろん。神は全てを見ておいでですので……」

さて、「冗談が出てくるくらいだから、もう大丈夫だろう。」

法師は四十程の男だった。顎には立派な髭を蓄えている。聞けば、背中に負った琵琶一本で、全国津々浦々を旅して回っているそうだ。唄を歌っては別の地へ。歌ってはまた別の地へ。旅すがら自分が体験した事、人から聞いた話などを新たに唄にして、再び当てのない旅へと出掛けていく。そういう旅を、十年以上も続けているのだそう。

「実は、この神社に来るのも、初めてではないんですよ」

「そうなのですか？」

「ええ、これで二度目になります。感慨深いものですよ。何しろ私

に旅を勧めたのは……」

法師が言い終わる前に、不意に、神社に近付く影があった。小さな足音が、駆け足でこちらに向かってくる。ああ、この影は、私は知っている。

「——霊夢姉ちゃん、遊びに来たよっ！」

それはそれは元気な声が、この、しみつたれた境内に木霊した。

「こらこら。危ないから、一人で来ちゃ駄目だって言ったでしょ？」

「一人じゃないもん。後から来るもん」

「またそんな事ばかり言って……」

やって来たのは、小さな女の子だった。最近よく神社に遊びに来る。この前、慧音の寺子屋を訪ねた際に、妙に懐かれてしまったのだ。会えば何かと、髪を編んでくれと頼んでくる。

「……？ 霊夢姉ちゃん。その人、だあれ？」

「お客さまよ。いいから、あつちで遊んでなさい」

「わあ、おじちゃん、何持つてるの？」

まるで聞く耳持たない。元気なちびっ子は、法師の背負う琵琶を無遠慮に差して言う。法師は苦笑いだ。しかし、そんな法師の姿を見て、私も気になった事があった。

「あの、失礼を承知でお伺いします。間違っていたらすみません。

貴方は、もしかして目が……」

「……ええ、そうです。私の目は、ほとんど見えてはいません」

少し変だなとは思っていた。初対面で声を褒められた事は無い。それに今だって、琵琶を見当外れの方に見せて子供を困惑させている。でも、だとすると、彼は、俗に言う盲目の琵琶法師ということか。

「ねえねえ。おじちゃん、楽器弾いて！」

「ははは。こんな可愛いお嬢ちゃんに言われたちゃ、仕方無いですな。巫女様。宜しいでしょうか」

「ええ、もちろん。平家ですか？」

「いえ、最近は全部自作です。ネタには困らないのでいいですよ」

琵琶を構えた法師が、一度弦を強くはじく。——びいん、という琵琶の音が、境内に響き渡っていく。

「それでは、しばしの間、ご静聴願いまする」

「それは、深い深い森の中のこと——、」

……正直に言つと、少し侮つていた。もつとお堅いものかと思つていた。退屈で寝てしまったという話を聞いた事がある。隣のこの子も、途中で飽きてしまうのではないかと思つていた。

反省する。何故なら、私の前のそれは、耳に聞いていたものとは全く別物だったのだ。思わず身を乗り出して聴きたくなる。裾にしがみつく子供も、大きな瞳を一層広げて、物語に聴き入っている。

法師の琵琶は、不思議な音色を奏でた。一種、心地よさすらも感じる。法師の語りが良かったからか、琵琶を弾くタイミングが絶妙だからか、はたまたその両方か。私たちは、どんどん話にのめり込んでいく。

彼の語る物語は、時に胸躍る冒険譚で面白おかしく、時に涙誘う悲劇で物悲しく、辺りの空気を震わせて物語は響いた。四本の弦がバチで弾かれる度に、一歩ずつ異世界へと引き込まれていく。私はすっかり虜になってしまったのだ。

自分が、まるで違う世界に居る様な錯覚を覚える。確かに体はここにあるが、意識は物語の中に居る様な気がした。いや、確かに私はその物語の中に居たのだ。物語の中で私は、彼であり彼女であり、また生者であり死者でもあった。未知なる世界で生きる私が、そこにはあったのだ。

だから少しだけ、私は不安を感じたのだ。

「……、結構なお手前でした。この子も喜んでいます」

「いえいえ、こちらこそ。それに、巫女様も大層お気に召された様で」

「……バレましたか。お恥ずかしい限りです」

「琵琶法師冥利に尽きるというものですよ」

そして法師は、まるで少年のように笑う。御神木である境内の楠くすの

木も、風に吹かれて木の葉を揺らす。それを見た私は、思わず、笑わずには居られないのだ。

「あの御話は、全部旅の途中でお考えになったのですか？」

「ええ。旅をしていれば、それだけ発見も多い。様々な話を聞き、また実際に経験してきました。私の曲は、旅の中だからこそ生まれたものなのかもしれません」

「旅の唄ですね」

「恥の唄ですよ」

鳥居に止まっていたカラスが、「かあ」と一声鳴いた。これには隣のちびっ子も大笑いだ。

……しかし、彼ならばもしかして。そう思った私は、不安を打ち明ける事にした。

「正直に言うと、私は、貴方のような自由な生き方に少し憧れるんです。私はこの地を離れる事が出来ません。もちろん、博麗の神に仕える事が嫌だとは思いますが、でも貴方の姿が、少し、羨ましく思えます」

私には、誰かに言って聞かせられるような話は無い。毎日毎日、私の生活は神社の中にある。そして、これからずっと、この神社の中にあり続けるのだろう。それに不安が無いと言えば嘘になる。不意に、どこかの誰かさんの顔が浮かんだ。もしかして、あの人も私と同じ気持ちだったのかもしれない。

「そうですね。私はやりたい放題、自由に生きてきた。結果この目を失うも、それでもやりたい事だけをやって来た。いくら周りに迷惑をかけたかも分かりません」

「……未練があると、」

「巫女様。私は、今は貴女の方の様な生き方に憧れているんですよ。誰かの目の中に、確かに自分が生きている。そんな生き方に、恋しささえ覚えるのです」

そう言う法師は、見えない目で、私にしがみつくこの子を見つめていた。それはどこか自嘲めいた、けれども優しい眼だった。

「私には何もありません。根なし草の私には無い、しっかりこの地に根付いて、ほら、貴女を必要としてくれる者が確かに居る。目の見えぬ私にも眩しい程、それは輝いて見えるのです」

「……」

「貴女にとって大切な物は何か。ゆっくり時間をかけて見極めていきなさい。貴女なら、きっと出来る」

ストーンと。法師の言葉は、不思議なほど綺麗に胸の中に落ちていった。

「では、私はまた流れます。私には、どうしてもこの生き方しか出来ないのです」

「では私は、法師様の旅の無事をここで祈らせて頂きましょう」

「それはそれは心強い。安心して旅立てます」

そうして法師は、参道をゆっくりと引き返していく。一步一步、何かを噛みしめながら。そして時折振り返っては、大きく手を振るこの子に笑みを向けるのだ。そこにはやはり、彼なりに未練があるのかもしれない。でも、きっとそれは、私には理解できない感情なのだろう。

鳥居の階段に差しかった時、法師は急に立ち止まった。

「そういえば、さっきの言葉。貴女の母君の言葉ですよ」

「え？」

「失礼します」

風は鳴る。そうして法師は、琵琶の音の余韻だけを残して、もう姿はなくなっていた。

——まさか、こんな所で母の話が出ると思わなかった。暫く見ていないが、どうやら元気でやっているらしい。しかし手紙だけでは不満なようだ。

子供に引きずられ、社務所の方に歩いていく。砂利がこすれる音がする。大きい音と小さい音と。この組み合わせは、以前は逆だった。それを考えると、なるほど私も大きくなったものだ。

前を歩く子供は、とても嬉しそうに歩いていく。期待に応える為

に、私は櫛とリボンを用意しなければならない。ついでだから、菓子もねだってくるだろう。随分やっかいな者に目を付けられてしまったらしい。

最後に一度だけ、彼が去っていった鳥居の方を向いてみる。まだらに雲が遊ぶ空に、懐かしい顔が浮かんた。まったく、我が母ながら面倒臭い真似をする。

「……結局、みんな繋がってるじゃん。法師様」

どこか遠くの空で、琵琶の音が響いた気がした。

琵琶がたずねて三千里（後書き）

マルコーっ！ マルコーっ！ パトラッシュとラスカルがフランダースでアルプス一万尺をメートルと一緒に踊っているわっ！（超ごちやませ）

雨の読書日記（前書き）

梅雨です。じめじめです。でも、雨の日にゆっくり読書っていいですよね。

雨の読書日記

分厚いハードカバーを開いて読んでいた。心地よいリズムを刻みながら走る文字の羅列は、安らぎと少しだけ不安と煽り、頁をめぐめる手を早めていった。ふと、ホールの天窓を見上げてみると、外はまだ、しとしとと雨が降り続けていた。

私は一度、本を置いて伸びをする。

ヴァル図書館には、私以外に誰もいなかった。パチュリー様は、天気が悪くなると体の調子も悪くなるらしく、今日は大人しく自室で本を読んでいる。それに、こんな雨の日に、好きこのんでヴァルに来る者は滅多にいない。対岸からでは湖の荒れようもあるし、裏手の山を越えてくるには、紅魔館は遠すぎる。小一時間前に、レミア様との商談にいられたおお客様が、資料と言って地図を借りに来られたきり、ヴァルは静寂に包まれていた。

まるで、この広いヴァルを一人占めたかのような気分だった。

ぱらり、ぱらり。乾いた紙がめくられる音がする。古くなったインクの匂いに、側に置いたアール 그레이の紅茶が香る。天窓を叩く雨の音をBGMにして、視線をせわしなく動かしていく。僅かに揺れるランプの影は、私を物語の世界に入る事の手助けをしてくれた。私はその心地よさに身を委ね、一層物語の世界に没頭する。

そうして、もう中身の無くなってしまったカップに、思わず二度目の口付けをしていた時、入り口の方から呼び鈴の音が聞こえてきた。

「ようこそ美鈴さん。珍しいですね、こちらに来られるのは」

「ええ、少し野暮用で」

来られたのは門番の美鈴さんだった。私と似た赤のストレートに、サイドの三つ編みが揺れている。

「お客様から地図の御返却に来ました。たった今お帰りになられた

んですけど、門の前になつて『そういえば』、と」

「ギリギリセーフでしたか。しかし、雨なんですから、もう少しゆつくりされたらいいのに」

「いえいえ、頑張つて稼いでいただきましょう。私達のお給料にも関わりますからね」

「まったくです」

私がそう言うと、美鈴さんはカラカラと笑つた。その度に長い赤髪がサラサラと揺れる。美鈴さんは、そのまま二、三言葉を交わした後、また門の方に戻つていった。

二度目に呼び鈴が鳴らされたのは、それからしばらく経つてからだった。

「失礼、開いているか？」

「あら、これは珍しい。いらっしやいませ、上白沢先生。湖は荒れたでしょう？」

「長いこと生きているが、生れて初めて船酔いしたよ」

「ふふ。それはよい経験を積みましたね。お探しの本は何ですか？書棚まで案内しましょう……と、その前にタオルですね」

「すまない。門の方で一応拭いたのだが。どうやら頭の中は、それどころでは無かつたらしい」

「何とまあ物好きな事で」

「お互い様さ」

先生は、私の座つていたテーブルの上に置かれた本の山を見て、皮肉る様に言つた。そうして私たちは、互いに目を合わせて苦笑いを返すしかなかった。

先生は、明日の授業で使う資料を探しているという事だったので、天体に関する書籍を何冊か見繕つておいた。子供たちに月の満ち欠けを説明するのに使いたいそうだ。先生も、その後二、三言葉を交わしただけで、さっそく帰つていった。

また静かになつたヴアルで、今度はペンの走る音が響く。私は、古くなつた魔導書の写本に入っていた。魔導書は強力な物ほど傷み

やすい。まだ止まぬ雨の音の中、大量の羊皮紙と景気付けの紅茶は、あつという間に無くなっていった。

三度目の呼び鈴は、三時の休憩時間前だった。

「チョコレート・トルテ」

「いいですね。頂きます」

やって来た咲夜さんのお盆には、綺麗に三等分に切り分けられた、小柄なケーキが載っていた。丁度小腹が空いていたところだ。遠慮なく頂く事にした。

「最近、マンネリ化してるって」

「……私は好きですけど？」

「お嬢様よ。今まで食べた事のないモノが食べたいって。500年も生きてるのに。どーすりやいいってーの」

「まあまあ、料理のレシピ本もありますから」

「頼むわ。夜になったら借りに来るから」

そう言って、咲夜さんは残っていたトルテを、一気に口の中に放り込む。私もそれに倣い、名残惜しいひとかけを胃袋の中に収めた。

「パチュリー様は？」

「後でお渡ししておきます。自分の飼い主を手なずけられない様じゃ、従者は務まりませんから」

「おお、怖い怖い。じゃあ、後でウチの者に取りに来させるから」

咲夜さんは自分の分と私のものを手早く片付け、早々に持ち場に戻っていった。

そうして、私が作業に戻る為に席に戻ろうとした時、裏口の方から聞きなれた足音が伝わってきた。

「さて、一体誰を手なずけるのかしらね」

「あれ？ 晴れてきましたね。パチュリー様」

冗談交じりに言くと、天窓の外は、確かに小降りになっていた。パチュリー様はそれを苦々しげに睨みつけると、観念したように私に言った。

「ケーキちょうだい」

「はつ。どうぞお召し上がり下さいませ、ご主人様」

「調子いいんだから」

パチユリー様は、どさつと椅子に腰かけると、自室から持ってきた数冊の本の処理に取り掛かった。どこにいてもやる事は同じらしい。それを見て、どこか安心するのを感じながら、私は再びペンを走らせた。

「あら、本当に晴れましたね」

「明日も晴れるそうよ。明日はヴァルに風通して、奥の書棚から日陰干しやつときなさい」

「了解です」

黙々と、二人はそれぞれの作業に没頭する。こんなに近くにいるのに、二人の会話は極端に少ない。しかし私は、それが居心地良くもあつた。

にわかに明るくなった外の景色を見る。

「あ・虹ですよ。虹。ここからでも見えるんだから、相当大きいです
すね」

「そのようね」

「……興味ありません？」

「今、いいところだから」

「……」

らしいと言えらしい。私も人の事は言えない。

ペンを置き、読みかけのハードカバーに手を伸ばす。言われるまでも無く、今の私にとって一番の関心事は、お外の虹よりも先程の本の続きの方だ。せつかくお日様が迎えてくれたのに、そっぽ向いて図書館に閉じこもるとは、私もよっぽど物好きのようだ。

木漏れ日の差しこむヴァルに、二つ、紙の擦れる音が響く。そうして、うららかな午後の日は、ゆっくりと過ぎていくのであつた。

雨の読書日記（後書き）

ちなみに今回、試しに某東方SS投稿サイトに、先に投稿していただきます。でも、こっちの方が落ち着くんですね。

ジューンブライド伝説　くそのブーケは誰の為に　（前書き）

ちょっと間に合わなかったけど、ギリギリセーフで。

ジューンブライド伝説　そのブーケは誰の為に

しかし、ミサトお姉ちゃんが結婚すると聞いたときは驚いた。私の中でお姉ちゃんはお姉ちゃんであり、これからずっとお姉ちゃんのままだと思っていた。結婚という、お姉ちゃんが誰かのお嫁さんになるという事が、いまいち想像できなかったのだ。

そんなことを魔理沙に話したら笑われた。

「じゃあ霊夢は、生涯未婚純血を貫く気か？　そんな大仰なモンでもねーくせに」

なるほど。腹は立つが、道理と言えば道理だった。

外の雨は、未だに降り続けていた。午後になって降り始めた雨は、土砂降りとはまではいかないが、相応に勢いを強めていた。この時期でも雨は冷たい。私は服に跳ねない様に、水溜りを大きく迂回しながら歩いた。

横手の木の枝で水が跳ねた。雨音は次第に強くなっていく。私はそれを憂鬱に思いながら、少しずつ歩を速めていった。傘を持つ手が少し震えたのは、しかし、雨の当たるせいだけは無いだろう。

結局、披露宴の会場となった旅亭には、あつさりと着いてしまった。

「……はあ、まさかこんな事になるとはね」

「あれ？　霊夢さん浮かない顔ですね。どうかしました？」

そんな私の溜息に、隣の席の早苗が覗きこむように言った。耳聡い。これだけ大勢が集まっている言うのに、よく反応出来たものだし。しかし私は、早苗の問いに沈黙で答え、この話を終了とした。早苗は満足していないようで小さく首を傾げている。私はそれになるべく相手にしない様にして、適当にテーブルの料理に手を付けた。だが、どれもこれも同じ様な味がした。

「それにしても素敵ですよねえ。いいなあ、いいなあ」

「早苗、あんた、さっきからそればかり」

「でも、だつて」

「分かったから、少しは落ち着きなさいって」

しかし早苗は、私の言葉が聞こえているのかいないのか、なおも羨望の眼差しで内掛姿のお姉ちゃんを眺め続けていた。私もそれに釣られて、横目でお姉ちゃんを盗み見る。いつもの姿とは全然違う。当たり前だけど、とっても綺麗だった。

早苗とお姉ちゃんとの付き合いは、さほど古くない。早苗がこちらに來たのが最近だから、それは当然なのだけど、でも、二人は姉妹みたいに仲良しだった。早苗だって、何度もお姉ちゃんの花屋に通っていると言っていた。私は付き合いは長いけど、そういえば花屋を訪れたのは数えるほどだったと今更ながらに気付いた。

「ところで、式だけは霊夢のこの神社で挙げたんだって？」

そんな事を考えながら、ぼうつとお姉ちゃんの姿を眺めていると、今まで食べる事だけに集中してた魔理沙が、急に思い出したように話しかけてきた。ちなみに魔理沙は招待されていない。私は軽く頷いて肯定を示した。

「身内だけでね。三三九度もばつちり。白無垢も綺麗だったよ」

「へえ。何もあんな小さな所でやらなくてもいいのにな。まあ、そこは霊夢が居たからなんだろうけど」

「何にしても、神社の評判が上がってくれば何よりよ」

「はは。人が來たら來たで怯えるくせに」

「うるさいっ」

來ないよりは來てもらった方がよい。私のところの神様はいつだってウェルカムだ。

お姉ちゃんたちはお色直しにと、一度会場を抜けていった。高砂が寂しくなつてビデオ上映が始まる。私はそれを見るときもなく眺める。隣の魔理沙と早苗のひそひそ話も、どこか遠くに聞こえていた。これからお姉ちゃんがウェディング・ドレスになる。そう考えると、私は益々複雑な気分になった。

主役の居なくなつた会場に飽きた魔理沙たちは、私とお姉ちゃん

との事を聞いてきた。

「話すって言っても、別に大した話は無いんだけど」

「でも、この中じゃ霊夢が一番付き合いが古いんだろ？ まあ、要は場繋ぎさ。何でもいいから話してくれよ」

「と、言われてもね。うーん。私にとってミサトお姉ちゃんは、やっぱりお姉ちゃんだった訳よ」

そうではなくては、こんなに変な気持ちになっっていない。正直あまり気は進まないが、私とお姉ちゃんとの出会いから、お姉ちゃんが引越していくまでの事を掻い摘んで話す事にした。

まず出会いの形からして気に入らない。それは、か弱い女の子の私には大変似つかわしくないのだ。

それは私が5歳だった時のことだ。私はその時、近所の男の子と喧嘩して、しかし当然勝ってしまって、勢い余ってその子を泣かせてしまっていた。泣きじゃくる男の子を私は呆然と見つめていた。そして、ついには私も訳が分からなくなって一緒に泣き出してしまった。そのような只ならぬ状況の中、男の子の血のつながった姉として現れたのがミサトお姉ちゃんその人だったのだ。

するとお姉ちゃんは、まず、泣きじゃくる私たちに拳骨という鉄拳制裁を下し、世の弱肉強食というルールを教えていった。よく分からないけど私たちはそれで泣き止んだ。満足気に持論を並べ立てるお姉ちゃん。今思えば随分と理不尽だった気もするが、でも当時の私には、あつという間に事件を解決したヒーローに映った。今の私の、口より先に手足が出る性分も、きっとこの時の記憶が影響しているに違いない。

そうして私たちは仲良くなった。私にとってお姉ちゃんの言葉は神の御神託にも等しく、やる事なす事なんでも真似をした。いつも一緒に歩き、本当の姉妹に間違われる事もあった。私はそれが嬉しくて、そうだよ私がお姉ちゃんの妹だよって、嘘を吐いたりもした。私にとってお姉ちゃんは、本当のお姉ちゃんに相違なかったのだ。

しかしお姉ちゃんは引越をした。両親の仕事の都合で仕方な

かつたんだけど、私は泣いた。幻想郷だってそんなに広くない。今考えれば大した距離にはならない。でも、その時の私には絶望的な距離だった。私は嫌だ嫌だと駄々をこねた。周りは困惑し母は平謝りをした。そしたらお姉ちゃんが最後に言っただ。

「女の涙は未来の旦那様の為にとっておきなさい”ってね」

「……。ひゃゝ、格好良いですっ」

「いやいや幾つだよ、そんな時」

「私が7歳だったから、お姉ちゃんは12歳だったかな？」

「多感なお年頃な」

「背伸びしたいお年頃よ」

もつとも、後で聞けば、その台詞は漫画か何かの受け売りだったらしいが。しかし、そんな微妙なお年頃がなせる恥ずかしい台詞でも、やはり私には神様の御神託同様に聞こえていた。以来、私は人前で泣くことを禁じた。そしてその約束は今も続いている。

「で、ところで霊夢さんは誰かいんですか？　そういう未来の旦那様候補みたいなのは」

「……。ノーコメントで」

「くく。何だ、早苗は知らないのか。霊夢はこれで恋多き乙女なんだぜ？　全部悲恋だけだな」

「……。オーケイ、魔理沙。喧嘩ね？　インファイトなのね？　表出るや」

「おつ、そろそろ始まるみたいだぜ」

会場の照明が暗くなつて、辺りが俄に騒がしくなった。どうやらお色直しは終わつたらしい。新郎新婦入場の為の音楽がはじまる。まったく、私はすでに魔理沙の胸ぐらに掴み掛かっているというのに。昔からお姉ちゃんはタイミングが悪いのだ。

「あんだねえ。何で私の式で喧嘩してるかな」

お姉ちゃんは皆に一頻りドレスを披露すると、真っ直ぐに私の元にやって来た。呆れ顔でお小言が始まる。私はそれを右から左に受け流し、天井の方を眺めている。多分、カメラのフラッシュが眩し

すぎてよく見えないのだ。

「……魔理沙が悪いんだって」

「人のせいにしないの。というか、何でこんな格好でお説教しなきゃいけないんだってーの」

「ミサトさん、すっごく綺麗です！ 似合ってますよ！」

「お、早苗来てくれたんだ？ もっと言ってもっと言って！」

はしゃぐ早苗とお姉ちゃんを見て、ああいう事を言えば良いんだなと理解する。私も何か言わなきゃいけない。

だが、口について出たのは違う言葉だった。

「なんか、違う人みたい」

「……ったく、こいつは。あんた今朝からずっとそんな調子じゃん。式の時だって葬式またいな顔してさ。あんたじゃなきゃブン殴ってたよ」

「そんなこと無い、よ」

そんな事ある、と。まさかウェディングドレスで喧嘩が始まるうとした時、向かいのテーブルの誰かがお姉ちゃんを呼んだ。お姉ちゃんは素早い変わり身でトーンを整える。

「今行くーっ、ちょっと待ってて！ ……ま、とにかく。あんたには後で渡すものがあるから。逃げんじやないよ」

しかしお姉ちゃんは、最後に花嫁とは思えないドスの利いた声で私を脅し、彼らのテーブルに駆けていったのだ。

「……」

「どうした、霊夢」

「何でもない」

「ま、大体分かるけどな。言ってるだろ？ そんな大仰なモンじゃねーよ」

分かっている。ちゃんと理解している。そのつもりだったのに。こんな気まずい空気を変えてくれたのは、未だにお姉ちゃんを眺めつつけている早苗だった。

「でも、何だか焦っちゃいますよね。あんな姿見ると」

「……」

「ミサトさん。すつごく綺麗でした。それに比べて私なんかまだまだガキで経験不足で。いつか私も結婚なんて全然想像もつかなくて本当、どうなっちゃうんだろって思います」

早苗の独白は続いた。私は黙ってそれを聞いている。どこか遠いところの話にも聞こえていた。

「私、こんなでいいのになって思いますよ。まだ先だって言い聞かせても。やっぱり、こうゆうのを見ると、私って大丈夫なのかなって考えちゃいます」

「……そうだよな。次は我が身。貰い手があるかどうかは置いておいて、でも、いつかはそんな日が来る。その時私が、今より少しはマシになれてるかかって考えると、正直、自信ないよな」

その話は魔理沙の興味も惹いたらしく、二人の会話は盛り上がっていった。私はそれに参加せず、横で眺めている。魔理沙の弱音は珍しい。ただそんな感想を持っていただけだった。

だから、こんな軽口が叩けるのだ。

「……いいんじゃないの。今は今なんだし。未来がどうなるかなんて分からないよ」

気付けば私はそんなことを口走っていた。それはまるで、自分の言葉じゃないみたいに、するすると口をついて出てきた。

「今の私たちに出来る事とは、今を生きる事だけなんだよ。だから、この一瞬々々を一生懸命に生きていくしか無いんだよ。きっと、それで良いんだよ」

私はそう言っ、飲みかけの水を口に含んだ。喉の奥がチクチクする。口の中がカラカラだった。

「……おお。霊夢が良いこと言ったぞ。そうか、だから今日は雨だったのか」

「レアケースですね。ビデオ録画でもしておきましょうか」

「なっ、何それ！ 酷くない？ 酷くない？」

立ちかかって抗議するも、二人相手では敵わない。どれだけ言っ

たつて逆手に取られるだけなのだ。一気に力が抜けていくのが分かった。だから魔理沙の冗談は嫌いではなかった。

「ま、そういう事なんだよな。今は今に出来る事を。それしかないんだよな——」

それから披露宴のプログラムは順調に消化されていき、無事閉会となった。会場は慌ただしくなり、出入り口が混雑した。私は受付でお姉ちゃんの姿を探したが、まだ忙しそうにしているお姉ちゃんに声をかける機会を失い、そのまま帰ることにした。

外に出てみれば雨は止んで、薄い雲に変わっていた。所々に晴れ間も見える。私は道が逆という早苗たちと別れ、一人帰路に着いた。ゆっくりと、重い足取りを引きずって歩く。溜息の雲がまた空を覆い尽くしていく様な気がした。

……ひどく、疲れた。今日は自分の嫌な面ばかりを見てしまった気がする。情けない自分に腹が立つ。早苗は自分の事をまだガキだと言っていたけど、本当にガキなのは私の方だ。なにせ私は、『おめでとう』の一言も、まだ言っていないのだから。

また一つ溜息が出た。吹く風も生ぬるい。私は、行きと同じ場所にあった水溜りを避けて、まだ抜かるんだ道をぎこちなく歩いた。体が重い。帰って休みたい。そんなことばかり考えていたから、後ろから誰かが追いかけて来ていたなんて、全然想像もしていなかった。

「ちよい待ち、霊夢」

振り返ると、少し離れた道の前にお姉ちゃんが立っていた。私のところとは全然違う青空の下、お姉ちゃんは責めるように此方を睨めつけていた。さすがにドレス姿ではなかったけど、頭のティアラはそのままであった。

「逃げんなって言ったでしょーが」

「……こんなところに居ていいの？ まだやること一杯あるんじゃないの？」

「ししし。旦那に任せてちょっくら抜け出てきた。大事なことだ

からね」

お姉ちゃんは息を整えながら、ゆつくりとこちらに向かって歩きます。その片手には何かを持っていた。

「まったく本当に手間が掛かる。いちいち言わなくても分かっただよね。私だってね、あんたと姉妹に間違えられて嬉しかったんだから」

そう言いながら、お姉ちゃんは徐々に近付いてくる。私はお姉ちゃんに身構えながら、でも動くことが出来ない。そうして、私が逃げ出すまであと数歩といった所で、お姉ちゃんは急に立ち止まって笑った。くくくと。楽しそうに笑った。

「霊夢。アンタにはまだ早いかもだけど、今日は朝からずっと酷い顔だったから、最後にプレゼントをあげるわ」

するとお姉ちゃんは、片手に持っていた花束を私の前に突き出した。それは花嫁のブーケ。ウェディング・ブーケ。そういえば、披露宴ではブーケトスはやらなかったのを思い出した。

「さあ受け取れ、私の妹っ！」

そうして、お姉ちゃんの放ったブーケはくると宙を舞っていく。私は、泥を付けてはならないと慌てて走りだす。途中、青かったはずの空が滲んでいくのが分かった。

「……っ」

——だから結局、お姉ちゃんとの約束は、今日だけは忘れてもらう事にしたんだ。

ジューンプライド伝説 くそのブーケは誰の為に (後書き)

実は、今回ちょっと5000字オーバーしました。許してちょーだい (笑)

遠き山に日は落ちて

——さよなら。私はその言葉が嫌いだ。だってそれは、冷たく、寂しく響くから。

お日様がお疲れ様を言つて、あの山の向こうに沈もうとする時、私は広場の隅でオカリーナを吹いていた。夕焼けの色は少しずつ薄くなり、天上の青は濃さを増していく。どこか侘しく、切なく、置いてきてしまった何かを思い出すような空の色。そんな空にぴったりのあの曲を、私は吹いていた。

田んぼを抜けるあぜ道に二匹のトンボが飛んでいた。それらはまるでダンスでも踊るかの様に、ぐるぐると円を描いて回っている。

「大ちゃん見ててね」と言つたきり、トンボを追いかけたチルノちゃんは、逆にトンボにあしらわれて目を回していた。楽しそうに走るチルノちゃんの横顔は、夕日を受けて薄っすら赤く見える。私はそれを見ながら、こうしてオカリーナを吹くのが好きだった。素朴なオカリーナの音が、夕日に染まる広場に広がっていく。

——どさりという音がした。驚いて振り向くと、私の隣に誰かが座っていた。

「……懐かしいね、それ。私も好きだった」

「咲夜さん？」

「買い物帰り。5時からお肉の特売だったからね。何とか間に合ったわ」

そう言つて、給仕姿の咲夜さんは、荷物が大量に詰め込まれた買い物袋を、軽く掲げて見せてみた。お肉のパッケージには、「3割引」のシールが貼つてある。私は「おいしそうですね」とだけ返し、またオカリーナを吹いた。何の気なしに天上を見上げてみると、空の青はいよいよ濃さを増し、ポツンと一番星が顔を出していた。確

か、宵の明星、金星と言った。私はそれを見つけると、堪らなく不安な気持ちになった。

「ドヴォルザーク交響曲第九番二楽章、家路。確かにこんなアンニユイな午後にはピッタリな曲だわ」

「……？ 何ですか、それ」

「ん。知らないで吹いてたの」

「えーっと、違う名前覚えてました」

「ああ、成る程ね。それもそれで正しいよ。まあ、あんたにやそっちの方が似合ってるかも」

咲夜さんは何か納得がいったのか、二、三頷きながらそう言っと、ふっとチルノちゃんの居る方に顔を向けた。チルノちゃんは相変わらず、トンボを追いかけて回っている。今になって気付けば、既に沢山のトンボが飛び回っていた。

「元気だねー、あれ。体力は申し分ないね。あれで頭の中が豆腐じやなかったら、是非ともウチに欲しい人材なんだけど」

「チルノちゃんにメイド服は似合いませんよ」

「だろうね。あれは泥だらけになっている方がらしいわ」

確かにと、思わず苦笑いを返すと、咲夜さんも同じく苦笑いを返し、そうして二人の間に心地よい沈黙が降りた。チルノちゃんは駆ける。私はオカリーナを吹く。咲夜さんは、……何を考えているか分からない。優しい、ゆったりとした時間が流れた。まるで時間が止まったよう。このままこの時が、ずっと続けばいいのにと思った。しかし、それでも時間は決して止まる事無く、夜は少しずつ近付いてくるのだ。

「……」

民家の方から美味しそうな匂いがした。さっきまで一緒に遊んでいた子供たちは、きつとこれからそのご飯を食べるのだろう。泥だらけのお小言を母親に言われながら、温かい夜を迎えていくのだろう。私はそれを煩わしそうにも思ひ、また、少し羨ましくも思う。

屋台の看板にぼつぼつと灯が点った。そうして、時間切れを告げ

るサイレンの音が響いていった。

「おっと、すっかり長居しちゃった。これから晩ご飯作らなきゃいけないのよ、私」

「もう帰られます?」

「そうするわ。『カラスが鳴いたら帰りましょ』ってね。ウチには七つの子供みたいなのが居るから。あんたらも程々で切り上げて帰りなよ」

咲夜さんはそう言って、さっと身軽に体を起こすと、そのままどこかへと歩いていった。咲夜さんの後姿は逆光に隠れてよく見えない。結局、一度も振りかえることは無かったと思う。

温い風が吹くと、足元の名も無い草花が揺れた。まるで別れを惜しむように、草むらで鳴く虫たちの声が、私の後ろ髪をしっかりと捕まえて放さない。私は、言葉にするまでに何度も躊躇いがあった。

「……チルノちゃん。もう帰ろ」

「うんっ」

チルノちゃんは元気に頷くと、私の方に向かって走って来た。そうして私達は、自分たちの住処に帰る事にした。

「……」

「……」

二人は薄暗い紅魔湖の上空をゆっくりと飛んでいく。言葉は無く、ただ黙々と互いの住処を目指す。もう少しで別れが来る。そう思うとこの空の色さえ憎い。それでも私は、無言でチルノちゃんのあとに続いていた。

山の向こうの夕日が沈む。すると、辺りは一気に夜の空気に変わって、私たちを追い出そうと寒気を帯びてきた。二人は急かされるようにして先を急ぐ。とうとう来てしまった。一日が楽しければ楽しい程、この時間が苦痛になる。私は、いつの日か考えたどうしようも無い事を、また考え始めていた。

……どうして、別れはあるのだろっ。はじめから『さよなら』が決まっているなら、どうして私たちは出会っただろっ。どうしてそ

れを繰り返してしまうのだろう。

そんな、安っぽい決まり文句の様な感傷。だが、私にとって永遠のテーマでもあった。答えは無い。恐らくこれから先も、ずっとずっと答えなんか無い。この寂しい気持ちは、どこまで行っても続いていくんだろう。

一番星は輝く。それをぼんやり眺めていると、チルノちゃんは急に飛行を中断した。ゆっくりと振りかえってチルノちゃんは笑う。ああ、これでさよならだ。でも、チルノちゃんは最後に、とっておきの呪文を覚えてくれた。

「ねえ、大ちゃん。——“またねっ”」

「……」

「ん？ どうしたの？」

「うっん、何でもない。チルノちゃん。——“またねっ”」

……成程。最後にこんな素敵な言葉が続くなら、『さよなら』もそう悪くないのかもしれない。

遠き山に日は落ちて（後書き）

元ネタは皆様ご存じのあの曲です。ガッコの帰り道とか、よく流れていましたよね。早く帰れ！みたいな合図で。思い出深いし、とても好きな曲ですね。

また、似たような使われ方で、シューマンのトロイメライとかもあります。ワタシは、こっちは何故か病院のイメージなんですよね（笑）

十四・六光年の天体観測（前書き）

天体観測ってしたことあります？

十四・六光年の天体観測

雨が、
降って来た。

嫌な雲が出てきたなと思えば、ぽつりぽついりと、弱々しい霧雨は、いつの間にか大粒の豪雨となつて、地表に降り始めた。夏とはいえ、こんな真夜中に水を被れば、風邪くらい引く。私は、用意していた機材を手早く仕舞い、どこか雨宿りが出来る場所を探した。夜の草原。不気味に並ぶ杉林の手前。そこに、人の気の無い小さな小屋がある。一先ず、そこに避難することにした。

小屋は廃屋だった。あちらこちらに蜘蛛の巣が巢食い、窓の割れた室内は、すっかり風化して、荒れ放題の様相となっている。……
 気味が悪い。私は、そんな室内の様子を眺めながら、軒下の僅かなスペースに陣をとった。廃屋とはいえ、さすがに堂々と中に入るのは躊躇われる——……いや。それはただの言い訳だ。私は、まだ諦め切れていなかったのだ。

霊夢は、あいつは結局来なかった。こんな雨だ。来ない方が正解に違いない。

だが、私は、やはり待つ事を止めれずに居た。背負っていたリュックを下ろし、その中に手を入れると、一枚の写真がある。若い少女が二人。お互い、もう少女と呼べる歳はとうに過ぎてしまったが、私の中の霊夢は、いつもこの霊夢のままだった。

十四年。私と霊夢が、あの寂れた神社で馬鹿話をしていた頃からもう十四年以上の月日が流れた。時間の経過は様々な変化を与えていく。霊夢にも、全く会っていない訳では無い。立派な神主様になった霊夢も知っているし、その霊夢が見習い巫女の指導をしている事も知っている。ただ、私はまだ、それを上手く認識出来ずにいた。時間の流れに置いて行かれような。私が今も思い出すのは、まだ頼りなかった霊夢の横顔だった。

雨音が酷くなった。腕時計を見ると、針は午前二時を差している。屋根の向こうを覗くと、空は暗く、深く、星は何処にも見えなかった。

「ねえ、織姫星ってどれのこと？」

柔らかい、どこか抜けたような霊夢の声だった。私は、その声が嫌いでは無かった。

「違う違う。それじゃない。もっと高いところ——あれが織姫星。んで、天の川の反対側の岸にいるのが彦星だ」

私は、まだ頼りなかった霊夢の手を取り、月の沈んだ夜空に手をかざした。織姫と彦星は、天の川を挟んだ両岸にある。私の説明に、霊夢は暫く困った様に宙を眺めていたが、ようやく理解したのか、ああと頷き納得の意を表した。

「へえ、さすがに詳しいじゃん」

「まあな。一応、星に関しちゃプロだ。星の魔法使いと呼んでくれ。ついでに言うと、彦星のアルタイルと織姫のベガ、それでもう一つ白鳥座のデネブを結ぶと、大きな三角形が出る。夏の大三角だ。聞いたことくらいあるだろう」

宙に大きな三角形を描く。流れる指の動きを、霊夢は、小さな子供の様に繁々と眺めていた。

「……デネブって、何？」

「ベガとアルタイルの間にある星さ。ほら天の川の中州の方にある、そう、あの星のことだ」

再び、霊夢の腕を持ってデネブの位置を示す。しかし霊夢は、それがどれなのか、イマイチ分っていない風だ。どれもこれも同じに

見える。八の字眉毛は、そう悠然と物語っている。しかし、そうこ
うすると、霊夢は、若干トーンを間違えた声で了解を示した。

……絶対分かってない。この分じゃ、織姫も彦星も危ういかもし
れない。

「織姫様と彦星様は三角関係だったんだ……」

「言われてみるとそうだな」

「修羅場？」

「かもな。まあ、問答はいいから、取り敢えず仰向けになれよ。星
が一番よく見える方法さ」

私はそう言つて、その場に倒れ込むように横になった。これがい
い。持ってきた望遠鏡には悪いが、これが正しい天体観測だ。そう
して、そのまま星を眺めていると、向こうの杉林の隙間を抜けて
冷たい夜風が髪を撫でた。乱れた金髪が舞う。目と口と。ついでに
鼻と。くすぐったくなつて、私はクシヤミをした。それに笑う霊夢
を見ると、霊夢は霊夢で、まるで明後日の方角を眺めながら、必死
にデネブを探していた。ついに何か見つけたのか口元が笑ったが、
残念。デネブはそこに無い。

また、少し風が吹いた。今度は弱い風だった。その風を起こした
霊夢は、私の隣で、同じように仰向けになつて星を見ている。二人
の眺める夜空は、まるで吸い込まれるように蒼く、散らばる無数の
星々たちが、少しだけ眩しかった。

「綺麗ね」

「そうだな」

町中から遠く離れた山の奥。わざわざこんな場所まで来て正解だ
った。人の灯りがある場所じゃあ、こうはいかないだろう。

綺麗だった。この夜空の中で、数えきれない星が生まれ、輝き、
そして消える。とても綺麗で、眩しくて。それは泣きたくなる様な
夜空だった。

「……なあ。霊夢知ってるか、織姫から彦星までの距離。十四・六
光年だ。この世で最も速い光の早さでも、それだけの年月が掛かる

んだ。織姫も彦星も、七夕のたった一日与えられたくらいじゃ、会えやしないんだよ」

ついこの前だ。裏通りの古本屋、立ち読みしたカビ臭い革表紙の本に、そんな事が書かれてあった。

——遠い。そう思った。しかし考えてみれば当然のことだ。なのに私は、その距離を知って、二人の絶望を思っ、とても悲しくなったのだ。

「天帝様もひでーことするよな。絶対に会わせる気なんか無いんだよ。光速で一四年と半分。互いが同時に出発したとても七年と少し。絶望的な距離だ」

だから悲しいのだろうか。遠いから悲しいのか。願いが叶わないから悲しいのか。しかし、そのどれとも違う気がした。

「……へえ、そうなんだ。そんなに離れている風には見えないけどなあ」

「そりやあな。地球から織姫星までは二十五光年、彦星だって十七光年離れているんだ。確かに地球から見れば、ただの一日の間かもしれない。だけど、実際はとんでもない距離が間にあるんだ」

離れていればどうなるのだろうか。離れていればどうなるのだろうか？

私はその答えを知っていた。知りすぎるほど知っていて、嫌と言うほど思い知って、知っているから怖かった。

「……もう、忘れちまうよな」

距離は。時間は。人間の頭は、それに対応出来る様に作られちゃいない。だから忘れる。思い出は劣化する。愛情は薄れてゆく。実の娘だった者でさえ、日常から外れた途端、過去の存在になる。実の親でさえ、自分の価値観から外れてしまえば、「だった」の存在になる。それが現実。どうしようもない程、自然な現実。私も霊夢も、誰もその現実から逃れられない。

……天の川だ。まるで天の川だった。幾千、幾万、数え切れないほどの時間が流れる大河だった。織姫だろうが彦星だろうが、一度

離れてしまえば、渡って行くには遠過ぎた。

「でもさ。案外二人は寂しくないのかもよ？」

霊夢の声だった。今まで私の話を聞いていたのか居ないのか、ぽかんと星を眺めていた霊夢は、呟くようにそう言った。

「だってほら。地球からでもこんなに綺麗に見えるんだもん。二人とも、お互いのこと良く見えてるんじゃないかな」

「……」

「だから二人は全然寂しくなんか無いんだよ。うん。そうだよ。きつとそうだよ」

その頃の霊夢は本当に頼りなかった。言っている事は出鱈目ばかり、次の日には平気で違う事を話していた。縁側に座ってお茶ばかり呑んで、そうやってぼけっとしてばかりいるから。お気楽で能天気で、ちゃんと考えているのか考えていないのか、それすらよく分からなかった。

「大切な思い出は、ずっと無くならないよ」

だからそれは安っぽくて、頼りなくて、そんな霊夢の言葉だから、そんな風に思っていたから、

「……そんなに、簡単な話じゃないさ」

後になって後悔する羽目になるんだ。

……危うく首から落ちそうになって、私の意識は覚醒した。少し呆けていたようだ。目を擦ると、視界に映る雨は次第に弱まってきた、雨の向こうに杉林が浮かんで見えた。しかし、ざあざあという雨音で、私の耳は馬鹿になったらしく、入ってくる音は酷く不自然に聞こえる。

『星を見に行こう』

手紙には、それだけ書いた。名前も、場所も、何も書かなかった。或いは、書けなかった。

私はその手紙を、社務所の机の上に投げてきた。神社は相変わらずシンとして、ただ、境内の裏で箒の掃く音が聞こえていたから、誰かしら居たのだろう。もしかしたら霊夢だったのかもしれない。だけど私は会わなかった。誰にも会わない様に、逃げるようにしてその場を去った。

時の流れは果てしなく残酷で、私は何時しか臆病になっていた。世間を知れば知る程、自分の小ささを思い知った。考えれば考える程、私の口は重くなった。ただ会いたい。その一言でさえ、私はついに言えなくなった。

慌ただしく毎日を過ごしていた。その日その日に追われて、何時の間にか私は、霊夢と疎遠になっていた。会おうと思えば会えない事も無かった。ただ、会いに行くだけの理由も無い。些細な事だと思っていた。そうして気付いた時には、もう言葉が見つからない。話したい事は山ほどあるのに、何と言えば良いのか分からない。私たちはもう、過去の、「だった」の存在になっていた。

だから、最後にもう一度だけ賭けてみた。今更なのは分かっている。こんな私が何を言うかと思われるかもしれない。でも、それ以外に思いつかなかった。今度はちゃんと信じるから、もう一度だけあの言葉が聞きたかった。

でも、霊夢は来なかった。当然だった。全部私がしてきたこと。何もかも遅過ぎたんだ。

ずっとずっと探していた。たった一つのものを。ずっとずっと探し続けていた。私は、私の思う中にこそ、私の探しているものはあると思っていた。魔法使い。魔法研究。その中に、このままずっと真っ直ぐ進んで行けば、私はそれを手に入れられると思っていた。

でも違った。そこには何も無かった。私が本当に欲しかったものは、目に見えるものじゃ無かった。私がずっと欲しかったものは、もう既に手に入れていた。大切なものは、あまりにも近くにあった。近くにあり過ぎて、気付かなかったんだ。

雨が晴れた。ただの通り雨だったのか、今では雲の隙間から夜空の星々が窺えた。月は無い。ぬるい夜風が抜けると、私の髪はばたばたと暴れまわった。

——さあ、そろそろ始めようか。私の、私だけの天体観測を。

馬鹿かもしれない。間抜けだったかもしれない。手遅れなのも知っている。だけど、せめて嘘にはしたくなかった。私が恋焦がれるあの日々は、確かに私の中にあつたのだと。私はその中で、精一杯駆けて来たのだと。それだけは認めてやりたかった。

後悔してばかりだった。いつも後悔していた。家を出た。一人になつて、魔法使いを目指した。そうして夢を叶えたけど、私が本当に欲しかったものは、既に失っていた。本当、後悔してばかりだ。でも、あいつに会えたのは、あいつと友達になれた事は、ずっとずっと忘れない。今ならそう思える。少なくとも、この事だけは後悔しなくても良い。なら、十分だった。

雲が完全に晴れ、満点の夜空が姿を露わした。織姫も彦星も、二人の距離は微塵も変わる事無く、私をただ見降ろしている。天の川が、相変わらず二人の間を隔てている。でも、今なら正面から見据える事が出来ると思った。

望遠鏡の準備をしていると、どこか遠くで水溜りが跳ねる音がした。耳を澄ますと、ずぶずぶと重そうな足音が近づいて来ている。胸の鼓動がどんどん速くなっていった。

「——魔理沙っ」

声が聞こえた。

その時にはもう、私は駆け出していた。

十四・六光年の天体観測（後書き）

はい。もう説明不要のあの曲からでした。BUMP好きとしてはこの曲は外せないのです。多分、十代二十代なら知らない人はいないでしょう。でも、アレンジで取り入れた七夕のネタは、少し時期を外し過ぎた感もあつたり。

因みに作者は、天体観測では無くて、宇宙人との交信を試みた事な
らあります（笑）

茂平の舟（前書き）

まずはじめに。

今回、自分ルールだった五千字以内に収めるは、大幅に超えてしまいました。スミマセン。このくらの話になると、五千字じゃあ描けないんですね。勉強になりました。

そんなこんなで、本文の方、どうぞごゆっくりお楽しみ下さいませ。

茂平の舟

その男、茂平^{もへい}と言った。元々は紅魔湖で漁業を生業としていた漁師である。茂平は漁師としての腕は一人前であつたが、組合や網元との関係には上手く馴染めずにいた。その為、今では漁を辞め、漁業の合間に続けていた渡し舟の仕事を、自らの天職としていた。湖の岸を行ったり来たり。儲けは少ないが、所詮は独り身である。自由気まま、のんびりと舟を浮かべる茂平は、自身の生活に満足していた。

夏の午後である。茂平は、自身が駆る舟の上で白河夜船、ぐつすり^{ぐつすり}と眠り込んでいた。天は青。時折温い風が岸に向かって吹きつけ、浅瀬を見れば、水鳥たちが水浴びをして涼んでいる。清々しい夏の湖である。女は、棧橋からその光景を眺めていた。

若い女だつた。遠目に見ても美しいと呼べるその女は、長く蒼い髪を風に遊ばせながら、舟の主、茂平の元に、真つ直ぐ歩いてゆく。近づく足音に、茂平は些かも気付き心配を見せない。そして、鼻で舟を漕ぐ茂平の額に、すっと、白い女の手が落ちた。

「おい茂平。起きているか。それとも土左衛門になつていいのか」
ぞんざいな言い分である。声に驚いた茂平は、跳ねるように飛び起きると、瞼をはたと叩き、声の主、その女の姿を確認した
「相変わらずのんびりやつているな茂平。少し前なら、あつという間に妖怪に食われていたぞ」

今度は物騒な話である。しかし茂平は「ご無沙汰してております、慧音先生」とだけ返し、己のするべき事を理解した。全長5メートル弱といった小さな舟の後方、ご自慢の改造エンジンを起動させた茂平は、悠々と舟を発進させた。

「——ああ、暑い。暑いな茂平。こんなに照り返しがキツイとは思

わなかった。夏場の舟も楽しじゃないな」

走り出した舟の上で、慧音は恨めしそうに呟いた。見れば、力なく舟の淵に寄りかかり、目は閉じたまま吐く息は荒かった。顔もどこか熱っぽく見える。しかし、慧音の独り言ともとれるその言葉に、茂平はただ苦笑いで返した。額に汗を浮かべる慧音とは対照的に、茂平は幾分慣れている様子で、あまり堪えていない様にも見える。そんな茂平を見た慧音は、ますます眉根の皺を深くしていったが、しばらくの後、ふと何か思い出したような顔になった。

「そうだ。今、町の方でちょっとした騒ぎが起きているんだ。どうせ噂話には疎いんだろう。話ついでに聞いていけ」

「またもぞんざいな言い分である。しかし、茂平が何か言う前に、慧音は既に話を始めていた。察すれば、この話がしたくて、茂平の舟を選んだようにも見える。慧音は揚揚と、時々愚痴も織り交ぜながら、町で起きた怪異を語った。慧音の居る町を、一夜にして大騒ぎにした事件。その内容は以下の通りだ。」

その町に、ある金持ちの屋敷があった。木造二階建て、敷地面積は300坪ほどもある。家よりも庭を広く取った造りで、この郷では豪邸と呼べる上品な屋敷だった。家の主は末吉。家は立派だが、しかし末吉の屋敷には一つ特徴があった。何故か傾斜の厳しい丘の上に建てられているのだ。すぐ側を川が流れる小山の上、そこが末吉の豪邸であった。今回問題となるのは、その屋敷の庭である。

庭には小さな池があった。その豪邸が擁するにはやや手狭な池だったが、よく手入れされ、中には大きな鯉も泳いでいた。銀に黒の斑模様。末吉も大層気に入っていたそう。事件はこの池で発生する。早朝、末吉が池の様子を見に行くと、なんと池の水が全部干上がっていた。前日までは確かにあったのだから、事件は昨晚の内である。一晩で池の水が消えた。この怪異が大騒ぎを起こしているのだ。

「……妖怪の仕業じゃないか、とも言われている。真相は分かんないが、とにかく末吉の落ち込みようが酷い。蔵に籠ったきり出て来な

いそうだ」

それは何とも穏やかではない。茂平は大いに心配の顔をしていたが、不意にあることに気付いた。池であるなら排水設備くらい設けてあるだろう。誰かが水を抜いたのではないか。気になった茂平は慧音に尋ねてみた。

「それは私もすぐに思ったよ。聞けば、近くの川に繋がる排水管が地中を通っていたそうだ。だがな、その排水バルブには鍵が掛かっていた。この辺は、ロクでもないことを仕出かす妖精も多いだろう。そういう奴らに悪戯されない様に、バルブは厳重に鍵が掛かっていた。だが鍵は今もそのまま、少しも壊れていなかった。そんな器用な真似、妖精にはとても出来ない」

成程。鍵を外してまた掛ける。妖精なら、そんな面倒な事はしないだろう。あれは悪戯がしたいのであって、嘘が吐きたい訳ではない。犯人は妖精ではない。しかし、ならば人間の可能性は無いだろうか。

「そうであった方が私も楽なんだがな。だが、事態はもつと悪い方向に進んでいる。後になって末吉の話を聞けば、その晩、岩を砕く音と、何かを引きずるような、転がす様な、妙な音が聞こえていたそうだ。それは地の底から響く魔物の呻きにも似ていた。そんな音が暫く続き、末吉も気になっていたそうだが、怖くてとても見に行ける様な状態じゃ無かった。そうして朝になって見てみれば、池の水が綺麗さっぱり無くなっていた」

ふむ。それが怪異の全容か。不思議なこともあったものだ。茂平は話を聞いて、その程度の感想を持つだけだった。呑気と言えば呑気だが、あまりに無頓着過ぎる。それに気付いた慧音は、無駄と思いつつも一応忠告を入れる。

「……大鬼が来て全部飲んだんじゃないかという話も出てる。何にしる妙な事になっているのは確かだ。お前も気を付けろよ。何があるか分からん。この湖の女神様は気まぐれだ。自慢の舟でも、駄目になる時は駄目なんだ」

慧音は、殊更きつい口調をするでも無く淡々と言った。対する茂平は、そうですねとだけ答える。あまり気にしていない風に見える。危機感も何もない態度に、慧音はやれやれとこの話を終わらせた。

「……暑いな、茂平。まだ着かないか」

もう見えてきましたよ、茂平はそう言つて舟の舵を切った。大らかな笑みを浮かべている。その視線の先には、よく整備された港と、大小様々な倉があつた。さらに山の上に視線を持っていくと、紅い、巨大な屋敷がある。吸血鬼の住む館、紅魔館である。

舟は進む。掛かる水を高く上げ、茂平の舟はただ進む。暑い、夏の湖の上を、難なく渡航していく。飛沫を上げる船首から、けたたましく唸るエンジンまで。茂平の舟は万事快調だった。

「へえ。そんな事があつたんですか」

透き通る、鈴の音の様な声だった。良い声である。茂平は、今度は背の高い女の客を乗せていた。客の名は紅美鈴。吸血鬼が住む屋敷で働く門兵だと言った。茂平は彼女を乗せるのは初めてだった。

「私も、今日買ひ物の帰り道にそのお屋敷の近くを通つたんですよ。何か様子が変わだなーとは思つてたんですよ。制服の人が何人もいて。しかも、それに見とれてたら、持つてた荷物落つことしちゃつたんですよ。もう、ころころころゝつて。あそこの坂つて急じゃないですか。危うく川の中にドボンする所でしたよ」

美鈴は一方的に話し立てる。表情豊かで、彼女が微笑むと紅い髪もゆらゆら揺れた。茂平は先程から一言も挟めずにいる。ただ、よく喋る人だなと思つていた。

「うーん、犯人は妖怪ですか。確かに妖怪なら、一晩で池の水を飲んじゃう人もいるかも知れませんか。でも、嫌だなあ。そんな事件があつたら、妖怪に対する偏見がまた広がるんじゃないですか。せ

つかく今は共生の時代だつていうのに。あ・そういう私も妖怪なんですよ。そうは見え無いつてよく言われるんですけどね。今日も買い物したお店の人にそんなこと言われちゃいまして。でも、でもですよ？　よく考えてみれば、今の妖怪は殆ど人の形してるじゃないですか。簡単に区別が出来る方が珍しいですよ。だからお店のおじさんには『その考え方はもう古い！』って言い返してやりましたよ。とにかくそうなんです。偏見は駄目です。そんな考え方してたら……いや、話が逸れましたね。池の話です」

茂平は前方の雲を眺めていた。目的地の斜め前方に大きな雲がある。あれは入道雲だ。だが、風向きは逆だから雨が降ることは無いだろう。

「でも、もし妖怪だつて言うなら、一人だけ心当たりがありますよ。その人は小つさいくせに、大きくなったり、もやもやしたり出来る変な人なんです。鬼の人なんですけどね。しかも大酒呑みで。だから、酔っぱらつて池の水をごくくんとやったのかもしれない。何たつて鬼ですからね。信用してはいけません。鬼にロクな人は居ないんです。きつと池の鯉ごと、ごくくんごくくん……、あれ。鯉居たんでしたっけ？　ああ、居たんですね。だから、池に居た可哀想な鯉ごと、一気に飲み込んだじゃつたに違いありません。極悪非道ですね。鯉には何の罪もないのに。信じられません」

そういえば鬼には会ったことが無いな、と茂平は思っていた。何にしても酷い言われようである。茂平は、雲の先に怒れる鬼の姿を見た気がした。

「そうそう鯉といえば。実はですねー、聞いて下さいよ。ウチの港の荷捌き場の隅に、小さな浜があるんですけどね。私、今朝そこを見周りにいたんですが、何と、浜に鯉が打ち上がっているのを見つけたんです。鯉ですよ、鯉。紅魔湖の鯉は泥臭さがあまり無くて美味しいんですよ。……いやいや。そりゃあ、私も初めは怪しいと思いますよ。でも私を見くびつてもらっちゃ困ります。“氣”を見て、それが正常かどうか分かるんですよ。鯉は正常過ぎるくらい

正常でした。打ち上がったばかりなのか、新鮮そのものだったんですよ」

美鈴は上機嫌である。そこにあるのは食への熱いこだわりか。茂平は昼に食べたおにぎりの梅を思い出していた。

「ふふん。だから今日は咲夜さんに褒められたんですよ。『でかした美鈴！ 偶には役に立つじゃない』って。だから私それが嬉しくて。居ても立つても居られなくて、今日は鯉料理に合いそうな食材を、こうして町まで買いに来ていたんですよ。私ったら、また咲夜さんに褒められちゃいますよー」

大した熱の入りようである。しかし、そこまで聞いて茂平はあることに気付く。今、門には誰が居るのだろう。自分が門兵だと言っていた。代わりが居るのだろうか。茂平は、美鈴に職へのこだわりはどうか尋ねてみた。

「……へ？」

上手く伝わらなかった様である。茂平は、今一度、ゆっくり、一字一句丁寧に尋ねてみた。

「……」

門兵は固まった。口をぽかんと空け、白痴の様にも見える。茂平は何も言わず、エンジンの出力を調整した。

「……大急ぎでお願い出来ますか」

言わずもがな。舟は徐々に速度を上げてゆき、真っ直ぐ紅魔館に向かっていた。

「ふうん。それで慧音の奴は急いでいたのか。紅魔館に行ったんだろ。ありゃあ、パチエを疑ってるな」

茂平の舟は波をかき分け走る。今度も珍しい客を乗せていた。黒のトンがり帽子を被った、魔女の霧雨魔理沙といった。捌けた性格

なのか、少女然とした外観にそぐわない、ボーイッシュな口調である。足はあぐらをかき、組んだ両腕は頭の下に敷いていた。彼女は、聞いた訳でもないのに、滔々と己が推理を語る。

「紅魔館にはな、パチュリーっていう口くでもない魔女が居るんだよ。よく面倒事を起こしてる。部屋に籠って本ばかり読んでいるから、リアルとフィクションの違いが時に曖昧になるんだ。何だか訳分かんない化け物を召還して、そのまま野に放ったに違いはないね。信じらんねーことするぜ、まったく」

いやはや横暴な推理である。それに残念ながら、慧音は吸血鬼の方に話があると言っていた。何でも、夏祭りの時の収益を巡って商会と町役場とが揉めているらしい。そんな説明をすると、彼女は途端につまらなそうになる。どちらかという面倒を期待していた顔だった。茂平は黙って舟を進める。

「そうか。まあ、どうでもいいんだけどな。私に損さえ無きや何し たって構わないさ。それより聞いてくれよ。つまんねー事になったんだよ」

そして彼女は、自分の脇にある箒に目配せして、大いに溜息を吐いた。苦い顔である。すると、やはり聞いても居ないのに、今度は自分の愚痴を語り始めた。聞くに、自分の相棒たる箒と喧嘩して、空を飛べなくなったらしい。

「いやー、参ったぜ。うんともすんとも言ってくれないんだもんな。今日までに本返せってパチエの奴がうるさいんだよ。さもなくば悪魔大隊を派兵してお前の家を包围するぞって言うてる。それは冗談でも、焼き討ちくらい仕掛けてきたかもな。早く行かないとローストにされちまうぜ」

またも物騒な話である。何時の間に世は戦国の時代になったのか。ただ、彼女の冗談めいた笑みから、単なる皮肉であることが容易に窺えた。言外に、箒が使えればこんな舟には乗らないのに、という本音が見え隠れしなくもない。しかし、そんな皮肉に、茂平は分かっているのかいないのか、曖昧な相槌を打つのみだった。茂平は喧

嘩の理由を聞いてみた。

「そりゃあ夏だろ。暑いだろ。で、じゃあ涼しくならないかと思つて、氷で何か作ろうと思つたんだ。河原の、何とかって言う橋の下だ。氷は水から出来る。私は、川の水をたっぷり使つて氷製のベッドを作つた。初めは良かったんだぜ？　冷んやりして涼しいし。夢心地の気分だつた。……まあ、本当に夢だつただけだな。氷の上でうっかり寝ちまつたんだよ。そこで、目を覚まして気付けば、湖の上にぶかぶか漂流してたつて訳さ」

茂平は、その光景を想像してみる。湖にぽつりと浮かぶ薄氷の上で、右往左往と魔女が走る。茂平は、その想像を考えなかつた事にした。

「氷だし、そろそろ融け始めてたのかもな。とにかくバランス崩して、私は氷ごと川に流された。氷つて重くても浮くんだよな。当たり前だけど。今更ながらにそんなことに気付かされたよ。で、しょうがないから泳いで帰つて。でも、橋の下まで戻つたら私の箒がどこにも無いのに気付いたんだ。……そりゃあ、箒の機嫌も悪くなるよな。氷詰めのまま島流しにされてんだから」

そこでようやく話が箒に繋がつた。話を遠回しで語るのは、彼女の癖なのかもしれない。それにしても、自分のご主人様に氷漬けにされた挙句、ぶかぶかと湖に放られた箒とは……。茂平は、その箒の柄をそつと撫でてやつた。

「ったく。とんだ災難……。いやいや拗ねるなよ。パチエンとこ着いたら綺麗にブラッシングしてやるからさ」

今度は彼女の手が箒の中腹を撫でた。一瞬震えた様な気がする。

茂平は慌てて柄から手を放した。

「まあ、そんな訳だから事件のことは知らなかつたな。大方、美鈴の線であつてと思うぜ。あの鬼は単純馬鹿の酒狂いだからな。よくあることさ。気にすんな。それより、おっさんもこいつの機嫌直す方法を考えてくれよ。相棒が飛んでくれないと、私、すっげー格好悪いぜ？」

そうして、それから暫くの間、茂平と魔女は、慣れない筈の説得に興じるのだった。

そして、茂平の舟は快調に湖面を滑る。今度の行先は迷いの竹林その沿岸。茂平は、今度も珍しい客を乗せていた。

「わーっ。私、舟に乗るのなんて初めてですっ」

小さな子供である。可愛らしい幼女が二人。これで人間であれば、茂平は人攫いに見えるに違いない。しかし彼女らは、それぞれ背中に妙な羽を負っており、それが人では無い事を示していた。二人は、この湖を縄張りとしている妖精である。その妖精の頭、大妖精は、しばらく舟の風を満喫した後、友人の氷精チルノをちらりと振り返って言った。

「チルノちゃん、まだ良くない？」

「ううう。アタイったら衰弱ね……」

「どうしちゃったのかなあ。やっぱり夜のあれかなあ。体温もこんなに低く……いつも低かった気がするけど、とにかくこんなに低くなっちゃってるし」

大妖精はチルノの手を握る。氷精は氷を操る妖精だ。気がするでなく、常に体温が低い。逆に言えば、どのくらい下がったら危険なのか分かりにくいという事でもある。茂平は、どんな事情があつたのかを聞いてみた。

「チルノちゃん。昨日の夜、暑くて寝苦しいからって、池の中で寝ちゃったんですよ。しばらくは涼しくて良かったみたいなんですけど、私が心配になつて見に行くと、池が凍ってチルノちゃんが埋まっていたんです。だから私、頑張つて氷を割って、チルノちゃんを救出したんですよ。妖精仲間にも手伝ってもらつて。それで、ようやくチルノちゃんを発掘したんですけど、チルノちゃんすっごくグッ

タリしていて……」

「ううう。アタイったら窮境ね……」

見れば、氷の妖精チルノは、力なく舟の淵に寄りかかっていた。目は閉じたままで、吐く息は荒い。顔はどこか熱っぽくも見える。

……何よりチルノが難しい言葉を使っている。大いに窮境きふきようであるのは間違いない。

「だから、竹の向こうにあるっていう永遠亭で、チルノちゃんを治療して貰おうと思ったんです。病気？　っていうのかな。よく分かんないけど、そんなのかなって思っ。けど、私、行き方が分からないし。なるべく急ぎでお願いしたいんですけど……」

大妖精は、友の危機にさぞ心配の色をしている。茂平は、彼女の大きな瞳にゆっくり頷いて応えようと、自分の舟をさらに早く走らせた。舟は進む。風は横に流れていく。この辺りの水は渦を巻いて、紅魔館方面へと流れている。流れを慎重に読みながら舟を走らせる。

茂平はある事に気付いた。

「え？　鯉ですか？　さあ、居たかなあ。必死だったから覚えてないですけど。チルノちゃん覚えてる？」

「錦鯉がいたね。銀に斑の黒。観賞用だよ。市に持っていけば高く売れたかも知れない」

「……あ、あれえ？　もしかして治さなくていいのかも」

「うわーん、頭が痛いよう」

「……」

その時、茂平と大妖精とは、恐らく同じ気持ちだったのだろう。チルノの処遇をどうするか、本気で悩んでいた。すると、チルノはすかさず抗議を入れる。大妖精がからかうと、余計ムキになって反論する。茂平は思った。これだけ元氣があるのなら大丈夫だろう。そんな大事には為っていない筈だ。案外、岸に着く頃には全快しているかもしれない。

……茂平は、全て理解した。事件は茂平の頭の中で完結した。しかし、だから何だと言っのだ。空には青があり、白い雲があり、空

の青が落ちたこの湖で、茂平は客を乗せて舟を走らせる。いつもの景色だ。どこまでも素朴で平和な日常だ。後ろで、客二人の笑い声が聞こえた。

掛かる水を高く上げ、茂平の舟はただ進む。暑い、夏の湖の上を、難なく渡航していく。飛沫を上げる船主から、けたたましく唸るエンジンまで。茂平の舟は、本日も万事快調であった。

茂平の舟（後書き）

本格的な三人称視点に挑戦です。違和感ある〜！ てな感じですが、一人称も三人称も使えるに越したことは無いので、三人称でいった方が良いと判断すれば、どんどん挑戦していきたいですね。

ちなみにワタシは淡水魚は苦手だったり。鮎とかも、あんまり美味しくない（自主規制）

月の兎（前書き）

雨が上がった後のお月さまって綺麗ですよね。

月の兎

一、

それはある晩の事でございます。私は、深い竹林たけはやしの中を、一人で彷徨い歩いて居りました。どこから来たかも知れません。ただ、逃げる野兎を追って居たところ、つい深追いしてしまったのでございます。

もう、十分な数は獲って居りました。ですが私は、兎を追わずには居られなかったのでございます。

獵師を続けて二十余年。兎取りの名手とまで呼ばれるようになった私でも、このような失敗は初めての事でございました。

竹林は暗闇でございました。宵の月さえ見えません。背の高い竹の間から、僅かにその欠片が覗くばかりでございます。霧の様な、靄の様な、妖しい月の輝きでございました。

そうして、その明りに見入って居りますと、私は、もしや妖に化かされたのでは、という気持ちになりました。歩けど歩けど出口の見えぬこの竹林。何か悪い者に憑けられたのだとすれば、不思議と納得いく様に思われます。されども家に妻子待つ身なれば、いつまでもこうしては居られません。どうにかこうにか、この袋小路より抜け出ようと、必死に歩いて居たのでございます。

——少女でございました。十かそこら。或いは、私の娘と同年でございましょうか。ふと気配に目を遣れば、白い洋服を着た少女が、木々の陰から此方を見つめて居たのでございます。少女の頭の上には、白い兎の耳のような髪飾り。深く黒い、全てを飲み込んでしまいそうな、不思議な瞳をしておりました。

私は急に、身動き一つ出来なくなりました。少女の不思議な瞳に

見つめられ、その黒い丸の中に閉じ込められた私の姿を見つけて、私は、まるで自分がこの世のものでは無くなったかのような、酷く不安定な気持ちに駆られたのでございます。胃がきりきりと痛み、意識は朦朧としてまいります。もしや物の化の類では無かるうか。私がそう訝って居りますと、一時の間の後、少女はまさしく少女の様な、無邪気な笑みを此方に寄越し、背を向けて歩き始めたのでございます。

……私は、もう訳が分からなくなりました。その時には既に、私は妖術にでも掛けられた様な気で居ましたから、一步も動けず、ただぼうつと立ち尽くして居ました。そうして、小さな少女の背を、ひたすら無心で眺めて居たのでございます。

少女から声がします。こちらに來いと言って居ります。のみならず、少女は私に向き直り、細い指で私の腕の辺りを差しますと、まだ気付いていなかったのか、とカラカラ笑うのです。私は、不審に思いながらも自らの右腕に目を遣りますと、何と私の腕に、大きな切り傷が出来て居たのを発見しました。

……私はもう、恥ずかしいやら悔しいやらで、終いには、どうにでもなれと彼女に付いて向かうしか無かったのでございます。

道すがら教わりました。彼女は「てゐ」という名前のようです。

二、

辿り着いたのは、大きなお屋敷でございました。不気味な竹林の暗黒を進みますと、辺りが仄か明るくなって、その向こうに巨大お屋敷が浮かんで居たのでございます。美しいお屋敷です。それはまるで、帝の住まう宮の様に広く清く、浮き世離れたその様は、古き神々の住まう社の様でもありました。

……夢の中に出てくる様な絢爛なお屋敷でございます。それが、私の縄張りであつたこの竹林の奥に、人知れず佇んで居たのでござ

います。

てゐはそのお屋敷の中へ、まるで物怖じせずに進みました。私は言葉も無く彼女に着いて行きます。てゐが早足に進むものですから私もそれに倣って、歩みを早めていくのですが、しかし、どうしてか中々追いつく事が出来ません。

それもそのはず。しばらく歩いて気が付きましたが、この屋敷の廊下、どこまで行っても終わりがないのでございます。延々と、まるで、どこまでもどこまでも続いている様に思われました。私はその廊下を、ただ下を向いて進んだのでございます。

そうして進むと、ある小さな部屋に辿り着きました。狭い部屋でございます。脇には大小の棚が備え付けられ、中には妖しげな薬品の数々が、所狭しと並んでございます。

てゐは、近くにあつた椅子に私を座らせ、そのまま待つように言つて奥に引込みました。私はもう、何が何だか分からない物でありますから、言われた通り椅子に座つて、てゐが戻つて来るのを待ちました。

……しかし、こうして一人で居ると、段々と気味が悪くなつてきます。私はこれからどうなつてしまうのでしょうか。そんな得も知れぬ不安に駆られていたのでございます。

少しすると、小箱を抱えたてゐが戻つてまいりました。傷を負つた右腕を出すように言いますと、その傷口に薬品を数滴垂らし、そのまま包帯を巻き始めます。その仕草から、どうやら手慣れているようにも思えました。ただ、私はいつと、有り難いやら不思議やらで、何も申す事が出来ず、そのてゐの姿を、静かに眺めていたのでございます。

そしててゐは、今度は私を広間の方に招きました。長い廊下を更に行き、金箔の施された引き戸の向こうに案内されますと、そこは、何十人と入れそうな大きな広間になっていました。華やかな広間か

らは、香ばしい匂いが漂ってきます。

しかし、机の上に目を遣りますと、私は更に仰天する事になりました。何と、そこには、食べきれない程の御馳走が並べられていたのでございます。色取り取りの山菜や、猪の肉などの料理、今まで見たことも無い様な物ばかりがありました。

これが噂に聞く宮廷料理なるものか、そう思つて居りますと、何時の間にか傍らに寄つたてゐが、私の杯になみなみと酒を注ぎ、飲めよ飲めよと勧めてきます。私が迷うのを見たてゐは、次は自分の杯に溢れるほど注ぎ入れ、そのまま一気に飲み干しました。

上機嫌になつたてゐは更に酒を継ぎ足していきます。その飲みっぷりがあまりにも豪快だったものですから、その熱に当てられた私は、負けじと酒をがぶがぶ飲みました。それから先は大宴会でございます。

……楽しい宴でございました。壇上では、てゐによく似た顔の少女たちが、舞いを踊り、雅楽を奏で、私はそれ見ながら酒を飲み、豪華な料理に手を付けました。てゐが、自分が獲ったのだと猪肉の話をしますと、私も負けじと、一日に十羽の兎を獲った時の事などの話をします。楽しい宴に夜は更け、時間が過ぎるのも忘れて、私はこの世の極楽を見た気分でございました。

三、

すっかり時間を過ぎてしまいました。もう夜も明けて居る頃かもしれません。誠に楽しい宴、しかし、私には家で待つ者が居ることを思い出したのでございます。このまま帰らぬでは皆も心配しているでしょう。私は、何時までもここに居る訳にはいかぬのでした。私がその事をてゐに告げると、彼女はあい分かつたと、すぐに私を門の所まで案内してくれました。宴会を盛り上げてくれた少年少女たちも、わざわざ見送りに来ています。他人の家に客人として招

かれたことは数あれど、このような仰々な対応は、私は初めてのことでございました。

そうして、いよいよてゐとの別れとなった時、彼女は私にお守りだと言って首飾りを掛けてくれました。夜の闇で姿こそ見えませんが、幸運のお守りだそうで、帰り道に迷わぬようにとの事でした。すっかり忘れて居ましたが、そもそも私は、道に迷ってここまで来ているのです。何も無いまま外に出て、また迷うだけ。私はてゐの氣遣いに、深い感謝を覚えたのでございます。

私は竹林を歩きます。深い闇と竹林は人を欺き惑わせて、すでにお屋敷の方角も忘れてしまいました。この様に同じような景色が延々と続きますと、自分が進んでいるのか、または戻っているのか、その境界が非常に曖昧になります。故に常であれば、あまり奥には入り込まないようにして居たのですが、しかし今の私には、恐らくお守りの力なのでございましょう。自分がどこへ向かうべきか、不思議と見える様な気がしていました。

そうして私は半刻ほど歩き、ついに竹藪の切れ目に会いました。見覚えにある家屋が見えます。ようやく帰って来れたことに安堵を覚えます。しかし、それも束の間。私は、目に映る景色に異変を感じたのでございます。

妙な事に気が付きました。外がまだ暗いままで。夜が明けて居ないでございます。それどころか、月の位置さえ、最後に見たままと同じ場所にあるのです。私がてゐに招かれて、覚えている限りでも相当な時間を過ごしたと思われます。ですが、それ以外、屋敷の外側では、全く時間が過ぎて居なかったのです。

……ふと、首から下げたお守りを見てみます。ゆっくりと月の光にお守りを重ねてみます。それは、動物のお守りでございました。私はそれをよく知って居ります。よくよく見慣れたものでございました。それ故に、驚きを隠せなかったのでございます。

てゐが私にくれたもの。それは――、『兎の足』でございました。

そう。私が今まで首にぶら提げていた物、それは兎のお守りだったのでございます。今まで散々糧にしてきた兎に、今宵、私は守られたのでございました。

私はようやく得心がいきます。あの黒髪の少女は、てゐは、おそらく兎の神様だったのでございましょう。もしかして、はじめは私を喰らう積りだったのかも知れませんが。しかし神は、私の傷を癒し、英気を養い、邪悪から守って下さったのです。――いいえ。それだけではありません。私はずっとずっと以前から、神に生かされていたのでございます。兎の神様は、大いなる御心を持って、ずっと私を見守って居て下さったのでございました。

恐らく、私は二度とてゐに会う事は出来ないのでしょう。たった一度の神様の気紛れ。神と人との、一夜限りの夢の出来事。それでも構わない様に思いました。何故なら、宵には必ず月が昇ります。この月が在る限り、私が忘れる事はありません。そう思われました。

……いつの間にか、私は月に向かって手を合わせていました。大いなる自然の恵みと、その慈悲に。私はただひれ伏して、感謝の祈りを奉げたのです。月はそんな私を見下ろして、優しく微笑んで居られました。そしてそれは、てゐが笑っている姿にも、見えたのでございます。

月の兎（後書き）

聞いた話によると月には兎が居るそうです。そうは見えないんですけど、昔の人はあの模様を見て兎を思っただんですね。

何かと忙しいこの現代。偶には月を見上げて兎を思っ余裕くらい、いつまでも持っていたいものです。

或る日の博麗靈夢嬢の一日

人生とは、往々にして、思い通りにはいかないものである。何かを成そうと思えば決まって邪魔が入り、逆に何もせぬと決め込んでいても、思わぬ幸運が転がり込んでくることもある。

ここに一人の少女がいる。名は、博麗靈夢。神社の一人娘として生まれ、現在は留守にしている両親に代わり、神主代行を務める巫女である。今日は、その巫女の一日を追ってみようと思う。

その日、巫女は一大決心をしていた。

「——決めた。今日は私は部屋の掃除をする。うん。決めた」

巫女は、別に誰も居らぬと言うのに、一人声を上げて宣言した。場所は見慣れた自室。ジャージ姿のまま、腰に手を当て鋭い眼で周りを見渡す巫女は、部屋の有様に思わず溜息が漏らした。その部屋は、あまりに煩惱で溢れ過ぎていた。

「よし、やるぞ。絶対、やるぞ」

何度も言わずともよろしい。だが、心意気は立派である。確かに酷い部屋なのだ。目に入るは、雑誌、菓子ガラ、洗ったのか洗って無いのか定かでない下着、鍋蓋、etc. etc. . .

巫女として以前に、年頃の乙女として許し難い惨状である。宣言したくとも無理の無いように思えた。

「よつと……」

そうして巫女は、おもむろに押入れを開けた。曰く押入れの中は宇宙。全ての解決は、この向こうにこそ存在する。巫女はそう断言していた。

しかし、現実には悲しいかな。巫女は絶望する。宇宙はすでに、他を寄せ付けぬ大結界を張り巡らせていた。何でもかんでも入れ込んだ、日頃の行いの結実である。

「何よこれ、入らないじゃない！」

全て自業自得である。巫女は、だんだんと足踏みしながら、理不尽な怒りを哀れな畳に向かって発散した。まだ諦めがつかない。そうして巫女は、押入れを整理すればいいのだと思い至る。少しずつ本義から外れつつあるが、巫女はそれに気付かない。

一番手前にあった大きな段ボール箱を開いた。

「あつ、これ懐かしいなあ。昔好きだった」

早速作業は中断された。見つめるは箱の中の漫画である。かつて巫女が好きだった漫画の数々が、所狭しと敷き詰められていた。その中の一冊に、そつと手を伸ばす。

「……」

訪れたのは沈黙。作業は始まる前に終わりを迎えた。ページを手繰る度に、往年の懐かしき日々が蘇る。ぱらり、ぱらりと、時間だけが無為に過ぎていく。

「……」

紙とインクから成る幻想世界に、巫女は完全に没頭していた。巫女の集中力は、ここぞとばかりに発揮される。普段は中々お目にかかれない、巫女の真面目な横顔は、靈妙なる悟りの境地の如くであった。読破した漫画の山は、どんどん高くなっていた。

——……柱時計が、十二時を告げる鐘を鳴らした。

「……って、こんな事やつてる場合じゃないんだって、私」

巫女は慌てて顔を上げる。だが、今更思い出しても遅い。過ぎてしまった時間は戻らない。ついでお腹も空いてきた。巫女は、無駄な時間を過ごした罪悪感からか、漫画を箱に詰め直し、固く固く封をした。巫女は昼食を取る事にした。

そうして午後、境内のあれこれを済ませ、巫女は、再び戦場に舞い戻って来た。再度、押入れに潜む妖怪たちとの死闘を演じる。巫女の決意は、「今度こそ」という強い信念を持ってして、大量に発見されたぶちぶちの甘美なる誘惑にも、些かも動じる事は無い。このまま順調にに作業が進むかに思えた。

廊下の向こうで電話のベルが鳴った。

「まあ、せっかく調子出てきたのに……」

巫女はいそいそと電話口に向かう。微かに漏れる声から察するに、どうやら古い友人からの様だ。二、三、言葉を交わす。すると、巫女は案外早く戻って来た。気を取り直して作業に掛かる。

「よつと……」

——かと思つたら、そのまま素通りして、台所から椅子を持ってきた。椅子を電話の所まで運ぶ。長期戦らしい。巫女は、結局一時間近く話し込んでから、部屋に戻って来た。

「ふう、つい話しこんじゃった。元氣そうだったよ」

それは何よりである。巫女は、ようやく現場に戻って来た。長電話による疲れも見えるが、しかし、本日の目的は、依然として何も成されていない。若干ペースダウンしながらも、巫女は目標に向かって邁進する。失くしていたブレスレットが出てくるが氣にもしない。

境内からの鈴の音が届いた。

「わ、やば。私ジャージだよ。……ちよつと待って下さあい！」

どうやら参拝客の様である。巫女、——否。ジャージ娘はつかけ履いて走り出した。見苦しい姿を披露するくらいなら、居留守でも使えば良いものを。この巫女は、参拝客の扱いに慣れていないのである。巫女はすぐに戻って来た。

「や。や。美人さんって言われちゃったよ」

お世辞に決まっている。巫女はニヤニヤしながら戻って来た。締りの無い顔である。どんな会話があったかは知らないが、ご機嫌な巫女は、浮かれ気分で作業に取り掛かった。ペースはアップする。

しばらく順調な作業が続けていると、今度は聞き慣れた少女の声がした。境内から大声で猛るは、偶に遊びに来る近所の子供である。「大変大変！ 霊夢姉ちゃん！」

「何よ、そんなに急いで。月が落ちてくる訳じゃあるまいし」

「下にサーカスが来てる！ ライオンも居るよ！」

「ええっ？ 本当？ すぐ行く！」

サーカス＋ライオン >> 本日のミッション

既にサーカスの事しか考えられなくなった巫女は、素早く私服に着替えると、嬉々として山を下りていったのだった。

ついに巫女が戻って来たのは、夕暮れ時になってからだった。

「……やだ。夕飯買ってくるの忘れた」

一人、陰鬱なこの部屋で、ぼそりと巫女が呟いた。なんと巫女は、サーカスのライオンに夢中で、夕食の買い物さえ忘れてしまったのである。己の軽薄さが今更悔やまれるが、巫女の頭は、未来志向型建設的思考にシフトする。

正直、また山を下りて買って来るのは面倒臭い。買って来たとしても、今度は作るのが面倒臭い。いやいや、かと言って外食を堪能出来るほど、贅沢な身分でも無い。巫女は、割と深刻に頭を悩ませていた。

何か思い付いたのか、またもや電話口に向かっていった。

「そうです。上白沢先生をお願いします。ええ、はい。……………あー、慧音？ ものは相談なんだけどさ——」

電話の先は己が恩師、上白沢慧音。里で教師を務める半妖である。どうやら、夕食を奢ってもらおうという魂胆らしい。浅ましい限りの墮落である。是非に入念な楔が必要である。

しばらく交渉した後、巫女は、明らかに不機嫌な足取りで戻って来た。

「何さ、何さ。ほんっつと間が悪い。お偉いさんとの会食と私と飲

みに行くの、どっちが大事なのよ」

間違いないお偉いさんとの会食である。巫女は、実に理不尽な我儘をのたまわりながら、未練がましく文句を言い続けた。

日が暮れる。夜が近づく。ふくれっ面をしながら、窓越しに外を眺めていると、ふと、窓を叩く風があった。

「あれはもしかして……」

巫女は慌てて外に出る。案の定、そこには、簾に跨った白黒魔法使いの姿があった。簾から降りようとする魔女に、巫女は早速交渉を持ちかける。筋の通らない理屈を散々述べて、自分を里まで連れて行けと熱弁する。まさに執念の巫女だったが、魔女の方も中々譲らない。交渉は難航する。

そうして、醜い言い合いが境内で繰り広げられた後、結局、巫女は無事に本懐を遂げることになる。逃げるように飛び立つ魔女の簾に、強引に乗っかってしまったのだ。言い争う巫女と魔女の姿が、空中でどんどん小さくなっていった。

……そうして夜は更ける。巫女が帰って来たのは、もう草木も寝静まる深夜になってからだった。ガラリと入口の引き戸を開けて、何人かの足音が近付いてきた。

「——まったく、何を飲ませたらこうなるんだ。偶々私が通りかかったから良かったものの……」

「マジ助かったぜ慧音。霊夢ったら情けねーもんな。すぐ酔いつぶれちゃった。はっはっはっ」

現れたのは例の魔女と、上白沢慧音女史だった。どうやら巫女は、酒にノックアウトされたらしい。健やかな顔で寝息をたてる巫女を、両脇の二人が支えている。

巫女の自室の扉を開けると、二人は驚愕した。

「……な、何だこれは。汚すぎるぞ霊夢！ どこに寝かせればいいんだ！」

慧音女史は、呆れをそのまま声に出した。そこには、今朝より一層混沌とした巫女の部屋があつた。……まったくもって面目ない。巫女は気にせず眠りこける。

「うっわ。本当にひでーな、こりや。私のとこといい勝負だ」

「お前の所もこうなのか！ 本当に、最近の若い者は……」

「まあまあ。そうかつかすんなよ慧音。はっはっは（笑）」

「お前もちよつとおかしいぞ?!」

どうやら魔女は笑い上戸らしい。そうして慧音女史と、ただ笑い続けるだけの魔女は、巫女の就寝スペースを確保する為に、投げっ放しの後始末を始めた。さすが教師と言うべきか、的確かつ素早い作業で、部屋はどんどん清潔を取り戻していく。そして、主に慧音女史の努力により、まるで無秩序だった巫女の部屋は、あつという間に、小奇麗な乙女の部屋へと変貌を遂げた。

巫女を寝かせた後、二人は、なおも言い争いながら帰っていく。

——…すでに、二人が去った後の巫女の部屋。

音も無く、灯りも無く、時が止まったかの様な静寂に包まれる。外からの柔らかな夜風が流れ込み、薄いカーテンを音もなく揺らす。静まり返った室内に、月の明かりが優しく降り注ぎ、はだけた巫女の首筋をそつと照ら出した。

「明日こそ……。明日こそ……。むにゃ」

そうして、巫女の一日は過ぎていくのであつた。

或る日の博麗霊夢嬢の一日（後書き）

上手くいったり、いかなかったり。それでも日々は続いていきます。

m e m o r i e s | メモリーズ | (前書き)

秋深し、隣は何をする人ぞ。

memories―メモリーズ―

「……空。すっかり高くなっちゃったなあ」

仰向けのまま流れる雲を見た。夏のそれより随分高い。真つ青なキャンパスの上に、まだらに浮かぶ白い雲。私は、ここから見える空が好きだった。

河川敷の広場では、明日の準備が着々と進められていた。明日、寺子屋の子供たちの体育会があるのだ。慧音率いる教師陣は、時間に追わながら走り回り、その横を沢山の子供たちが駆けていた。

子供たちの笑い声が聞こえる。

広場には沢山の子供たちが居た。人間の子。妖精の子。それから妖怪の子。何を隔てられることもなく、皆、一緒に、明日の体育会に心を弾ませている。私はその光景を、土手の木陰から眺めていた。「霊夢ーっ！ テント建てるから手を貸してくれー！」

慧音の声がした。昨晚、電話で助っ人の依頼をしてきた慧音が、今度はテントの設営に大声を出している。私は、温くなった水筒に一度口を付けると、いそいそと慧音の元に走って行った。

午後からは、偶然近くを通っただけの早苗も、手伝いに借り出された。私と共に、明日の入場門に置く看板を制作する事になったのだ。形振り構わず頼む慧音も慧音だが、引き受ける早苗も早苗だ。絵には心得があると張り切っていた早苗だったが、今は足りなくなったペンキの買い出しに行っている。私は一人、教室の中で頼杖ついて、早苗の帰りを待っていた。

薄暗い教室の窓から、一際明るい陽光が差し込む。外では行進の練習をしているらしい。私はそれを、何とも無しに眺めていた。

早苗は、たつぷり二時間かけて戻ってきた。

「遅いつてーの。終わんないじゃん、これ」

「すみません。途中で知り合いのお婆ちゃんに出会いました……」

「まあ、そんな事だろうとは思ってたけど。とにかく始めよう。日が暮れる前に帰りたい」

「同感です」

そして、私と早苗は、狭い教室の中で、再び作業に取りかかる。結局それが完成したのは、完全に日が暮れてからだった。

「はう。結構時間かかりましたね。くたくたです」

「でも間に合って良かったよ。これで『出来ませんでした』なんて言ったら、慧音に頭突きされる」

「慧音先生、気合い入ってましたもんね」

「いつもそうなんだよ」

私は、すっかり暗くなった窓の外を見てみた。暗闇の中で、慧音がごそごと何かをやっている。多分、小石を拾っているのだと思う。昼間に一度拾ったのに、慧音は心配性なのだ。

「ふふふ。そうみたいですねえ」

「興奮しすぎて角出さなきやいいけど」

「明日が節分ならそれも良いんですけどね。……ああ、そういえば私、実は他にもいろいろ買ってきてるんです。どうですか、帰る前に少し休憩しませんか？」

早苗はそう言うと、部屋の隅に置いてあった紙袋を開きにかかった。袋からは、ピーナッツやらお菓子の数々が取り出される。中には缶ビールもあった。丁度いい。お腹が空いていた所だった。

「やるじゃん、早苗」

「私の二時間も、ただ無駄な訳じゃ無かったんですよ」

「私のは無駄だったけど」

「……返す言葉もございません」

そうして私たちは、ささやかな前日祭を開く事にした。疲れた体に、ほんのりとアルコールが染み渡っていく。それなりに飲むと、私は気が緩んでいた。

「……何かさ、妙な気分だね。よく見慣れた教室なのにさ。全然知らない所みたい」

ほろよい気分の頭は、何とも無しに口を開いた。早苗はちびちびとビールを飲み続けている。

「私は、本当に知らない場所なんですけどね。でもその気持ちは分かれますよ。よく知っている場所でも、その時と状況が違つとまるで別物に見える。多分、景色つてそんな物なんでしょう」

そうして私も一口。飲む為でなく、忘れる為でなく、会話の為のお酒は、私を安らかな気持ちにしてくれる。

——ふと、昔の記憶を思い出した。

「そういえば、昔は悪い事もしなあ。慧音のお弁当箱から、エビフライだけこっそり戴いた事があつてね。エビフライがどうつていうよりは、度胸試してみたいなもので。でも、提案した子も含めて誰も名乗り出ないから、じゃあ私がやるつて言つてさ」

慧音は怖かった。だからこそ、その慧音から一本取ればヒーローになれた。お昼休み、慧音が少し目を離れた隙に、私はこっそりエビフライに手を掛けた。それは成功して、私は天下を取った気でいた。

「結局すぐにバレて、ものすつごい怒られた。皆はそれを見て笑つてんの。あれは恥ずかしかったなあ」

「へえ。霊夢さんはその頃からお転婆だったんですね……」

「失礼な。私は今も昔も『瀟洒』なつもりよ」

「『勝者』ではなく？」

「もうっ」

あの時慧音は、目を真っ赤にして怒っていた。今度はもっと上手く……なんて思つてたら頭突きもされた。私は慧音の頭突きがどうしても苦手で、思えば、私が勝てなかったのは慧音だけだった気が

する。結局、私の天下は、三日どころか五分も持たなかった。

エビフライ事件をきっかけに、私は、あの頃の事を思い出していた。楽しい思い出が蘇る。みんながいて。私がいて。それは普通のことだと思っていた。

「あの頃は楽しかったな。何でもかんでも新鮮で。毎日が冒険で。あの頃の私は、そんな日が、これからもずーっと続くものだと思ってた」

何の根拠も無く、何の確証も無く。私が大人になるなんて、信じられなかった。

「でも、そうじゃないんだよね。時間はずっと流れ続けていて。楽しい事ほど長く続かなくて。いつの間にか、また“つまらない日常”に満足している。別に、だから何って感じだけどさ。でも、“あの頃”に戻りたいって思う事が、無い訳じゃないんだよ」

今日、あの木陰で見たものは。教室の窓から見たものは。かつては私が居た場所、いつか見た景色だった。

ただ、立ち位置だけが変わっていた。圧倒的に違っていた。どんなに手を伸ばそうとも、届くことは無い。それが、少しだけ寂しかった。

「……霊夢さん。過ぎ去った過去は戻ってきません。どんなに羨ましく見えたって、もう終わったことです」

「……」

「だから、今を大事にするしかないんですよ。今は“今”しかないんですから」

「……わかってる。わかってるよ、早苗」

自嘲っぽく笑って、また一口お酒を含んだ。途端に、“今”に戻ってしまった気がした。

「それじゃあ、霊夢さん。子供の頃には出来なかった、今ならではの思い出を作りましようかつ」

すると早苗は、どこから引つ張ってきたのか、また別の紙袋を探り始めた。両手を使ってそれを取り出す。じゃーんと、早苗が嬉

しそうに取り出したもの。それはまたお酒だった。今度は大瓶だ。いったい幾つ買ってきたのだろう。

「へっへっへ。子供にはもつたいたない大人の味ですからねえ」

「どうしたの、それ。すごく高そうだけど」

「それはですねえ……」

ニタリと笑いながら、早苗は隣の部屋に視線をやった。瞬間、慧音の大声が聞こえた。

「んがーっ！ 無い、無いぞ！ 私のとっておきが無い！

おお、誰か。ここに置いてあった吟醸を知らないか？！」

聞こえてきたのは、怒りとも、嘆きともとれる、慧音の絶叫だった。叫びは隣室の窓ガラスをも震わせる。

……早苗の顔を見た。別段、悪気も無さそう。口笛吹く真似なんかしてる。

「早苗……」

「しーっ、今日の労働に対する報酬ってやつですよ。隠れて飲むお酒は格別なんですよ？」

「蜜の味、ってね」

私は早苗からのグラスを受け取った。これで私もヒーローと共犯だ。とくとかとお酒が注がれていく。ほんのりと甘い香りがした。

——カッソ。

「それでは、明日晴れることを祈って」

「じゃあ、これはお供え代わりってことで」

そうして私たちは、これから始まる今を、新たな メモリーズ 思い出として刻んでいくのだった。

m e m o r i e s ― メモリーズ ― (後書き)

人は今にしか生きられず、今はその瞬間には過去になっている。

どうか、今を愛してやって下さい。

結果、結界決壊（前書き）

その壁は、さては誰が作りしものぞ。

結果、結界決壊

大体、根本的に苦手なのだ。あいつの不敵な笑みも、人を食ったような態度も、得体の知れない存在感も。言い知れない嫌悪感がある。なにか、根っこの方で拒絶しているのだ。

「霊夢。神社の北東側で結界が緩んでいるわ。今夜、引き直しするから準備しておきなさい」

……妖怪の賢者、八雲紫が、この博麗神社を訪ねてきたのは、まだ夜明け前の事だった。

私は、昔から紫が苦手だった。嫌い、と言い換えてもいいかもしれない。とにかく紫が目の前にいるだけで、胸の奥がもぞもぞし、どうとも言えない居心地の悪さを感じた。

私はその原因も知っていた。

あれは、初雪の降る或る日。私がまだ幼かった頃。私は母に手を引かれ、八雲紫のいるマヨヒガに出向いた事がある。

当時の事はよく覚えている。

まず、道中にある狐の像が怖かった。延々と続く紅い鳥居も、目眩がするような気味の悪さを感じた。そんな不気味な森を抜けて、ようやく辿りついた八雲の屋敷は、何か窮屈な、息が詰まる様な圧迫を感じた。

その屋敷の一番奥、寒気を感じる様な薄暗い部屋で、八雲紫は待っていた。

「いらつしゃい。ようこそマヨヒガへ」

……恐怖した。

戦慄した。

吐き気を催す悪寒を感じた。

どう表して良いか分からない。だって、まるで違うのだ。あらゆる意味で違う。決定的に違う。人の形をしていて、その実、人とは全く異なっていた。

——これが八雲紫。妖怪の賢者。太古より存在する生きた歴史。幻想郷の影の支配者。女帝・八雲。

私は、ろくに言葉を発することが出来なかった。何か聞かれていた気もするが、最早それどころでは無い。とにかく逃げたい。離れたい。そればかりを考えていた。しかし紫は、怯える私を嘲笑うかのように言っただ。

「その子が霊夢？　可愛いわね。食べちゃいたいくらい」

——私は、泣きたくなるほど怖かった。

いやいやいや。分かっている。みなまで言うな。そんな事、私だって重々承知している。

確かに、下らない理由かも知れない。もし紫が妖怪で無かったら、私だって気にする事は無かった。事実、近所のおばさんに、同じ事を言われた時は、寧ろ良い気分だったのだ。

だが、ここに至るまでの経緯、紫の不気味な笑顔、その全てが、紫の言葉を真実のものにしている気がして、私は、ただ母の後ろに隠れて怯えたのだ。

袖に掴まって震える私を、しかし、母は笑っていた。さも簡単そうに受け流し、大して気にかけた様子もない。当然だ。もちろん紫だって、本気で言っただ訳では無いだろう。それきり話題にもならなかったし、覚えているかさえ怪しい。ただ、私だけが真面目に怯え、恐怖していたのだ。

それ以来、私はずっと紫が苦手だった——否、違う。『苦手な紫』に出会ったのだ。始めから苦手なまま、それがずっと続いていた。小さい頃は、紫の姿を見ただけで逃げ出した。時が経ち、一人で神社を任されるようになって、なるべく会わないように努めた。ただ怖い。逃げ出したい。私は幼い私のまま、紫に怯え、震えて

いたのだ。

別に、紫が直接何かする訳では無かった。今までそんなことは一度も無いし、それどころか、祭りの時には、色々世話をして貰ったりで、正直助かっている。そもそも、うちの家と、八雲紫とでは、大昔から繋がりがあるそうなので、私と紫が敵対する意味は、全く無い。

だから、頭では分かっていた。無意味な事だって。何度も何度も自分に言い聞かせた。でも、どうしても駄目だった。

……ようやく、重い腰を上げ、私は、今日の神事に必要な諸々の準備を始める事にした。揃えなきゃいけない物も沢山あるし、私自身も、楔をして身を清めないといけない。やることは沢山ある。

山の向こうの朝日が昇った。冷たくなった秋の風とは裏腹に、全身で感じる陽光は、穏やかで気持ちいい。

空を見上げる。すると、そこに雲はなく、清々しい青空が広がっていた。今日はいい天気になるだろう。ただ、この憂鬱な気持ちだけは、ついに晴れることはなかった。

。 。 。

「何よこれ。まるで駄目ね。初めからやり直した方が良さそう」

静かに、夜の風と共に、八雲紫はやって来た。

すっかり夜も暮れた、博麗神社の境内。御神木である楠木の前で、私は、これから行われる神事の準備をしていた。いきなり現れた紫は、そんな私に、容赦の無い駄目出しを与える。曰く、結界の四方を囲む竹と、張り巡らされた注連縄の位置がずれているらしい。この位置がずれると、結界の力が弱まり、神事に影響が出る。実は、私の背丈では、竹を支える手が届かなかったので、仕方無かったりするんだけど、しかし紫は、私の言い訳を聞く気など全く無い。長身の紫は、意図も容易く修正を加えていった。

……私だって、結界が、完全である方が良いのは、よく分かっている。手を抜いたつもりだって無い。ただ、少しの誤差があっただけ。人間なら仕方がない、ほんの少しの誤差。それは、何事も完璧主義である、紫らしい行動だった。

（でも、だったら、初めから一緒に手伝ってくれてもいいのに……）
結局、紫は全部一人で終わらせてしまった。つまらなくなった私は、着替えの為に、早々に引込んだ。

ところで、神事など、こういった行事では、『形』というものが重要だ。伝統や歴史などもあるし、それなりの格好をすることで、私自身、気が引き締まる。

私は、千早^{ちはや}を羽織り、付け髪を留めた。清浄な衣と、靈力を補う長い黒髪。これで私は、すっかり気持ちが入れ替わる。更に、神事で使う、かずらの葉を頭に乘せると、いよいよ緊張してくるが分かった。

外に出ると、既に、法衣姿の紫が待っていた。全身を白で覆った紫は、かがり火に明りを灯しながら、まるで私の存在に気付かない。私はその光景を、ただ、ぼうつと眺めていた。

夜が燃える。にわかにも明るくなった闇夜の境内は、見慣れた我が家では無く、神の社である本来の姿を蘇らせていた。

近く、でも遠く。そんな当然の神社の神秘に、私は、改めて自分が、こちら側の人間なのだと思います。

紫の長い金髪は、炎の影になりながら、妖しげに揺れていた。女の私から見ても、惚れ惚れする長髪だ。黒では無いが、その髪には、さぞ、強い靈力が宿っているのだろう。

美しく、それでいて不気味な紫の後ろ姿。私は知らず知らずの内に、溜息を吐いていた。

「まったく、先が思いやられるわね。心の迷いはそのまま伝わる。もう一度、楔を行なった方が良いんじゃない？」

「余計なお世話。妖怪の紫には言われたくないよ」

「ごもつとも。でも、そんな私の力を借りなければ務めを果たせない、あなた自身の未熟さも、よく考えてみるからね」

「うるさいんだよ。紫は」

拗ねてそっぽを向く私に、紫は肩を竦めて呆れを表した。成る程。それは、大いに先が思いやられる二人だった。

しばらくの後、二人だけの神事が始まった。

私達は、御神木を囲って向かい合う。これを依り木に、博麗の神をお招きし、神の尊きお力をお借りして、結界修復とするのが神事の目的だ。

周りには、この神事の為に用意した、様々な品が並べてある。

勾玉と鏡を御神木にかけ、その下には青や白のきれを吊り下げた横には榊立てに鶏の羽。お供物としては、秋野菜に今朝揚げたばかりの生魚、そして重かった御神酒おみきがある。全部、私が今日一日で準備してきたものだ。これだけの物を一人で集めてきたのだから、私の頑張りも、もう少し評価して良いと思う。

「霊夢。準備はいいわね。始めるわ」

そんな、どうしようもない事を考えていると、紫からの合図があった。互いに祝詞を奏上し、神事が始まる。シンとした境内に、かがり火の跳ねる音と、祝詞の声とだけが響く。私は、どうにか紫の前で間違えない様にと、それだけを考えていた。

……結局、今夜が寒かったのと、緊張していたのとで、私は、終わる頃にはすっかり記憶が無くなっていった。

ほっとして、気が抜けていた私に、紫は言った。

「二度、詰まったわね。もう少しちゃんと出来ないかしら」

刺々しい言い方だ。でも、言われている事はもつともなので、私は、目を逸らしてしまう。

「ごめん」

「あの子は、あなたと同じ年で、十分務めを果たしていた。しっかり

精進なさい」

『あの子』とは、私の母親の事だ。紫は、何かと私と母とを比べたがる。そうして必ず、母の方が出来が良いと、私に嫌味を言うのだ。私は、紫のそういう所も嫌いだった。

少し休憩を挟んだ後、神事は第二段階に移った。

これから、神楽舞の奉納をする。動きの激しい、私の苦手なやつだ。例祭などの定期的な神事では、町の神楽団に来て頂いたり、屋台が出店していたりで、見物の人も多くいるのだが、今は紫と二人つきりだ。どちらが良いかと言うと、難しい質問になる。大勢の前で失敗するのも恥ずかしいし、紫の前で下手を打つのも悔しい。

私は、何度もシミュレートした段取りを、もう一度頭の中で確認した。

和太鼓の音も、龍笛の音も聞こえないまま、二人の神楽舞は始まった。

舞は、三部構成からなっている。基本となる動きに、その逆のパターン。そして、その二動作の合間に入る回転。これをずっと繰り返して、神木の周りを三周ほど回る。やる事自体は簡単で、覚えやすい動きだ。

しかし、やはりというか、頭の中で舞うのと、実際に舞うのとでは、訳が違うのであつて。特にこの舞は、天の岩屋伝説の、アメノウズメ天宇受女命ノミコトの舞をもじっているだけあり、動きが激しい。胸乳露わに――、とまではいなくても、それ相応に大変だ。

早いテンポの舞を舞う。暑い。体の水分が沸騰してしまいそう。祝詞の時は寒かったのに、今は額に汗が浮かぶ。もつれて倒れてしまいそうな、覚束ない動きの私は、悔し紛れに紫を見てみた。

「……」

やっぱり紫は凄い。足の運び、両手の振り付け、全てがスムーズで、私のとはまるで違う。動きに無駄な力が無く、優雅に、強烈に、

舞のお手本の様な、完璧な紫の舞。紫は、暑さなど微塵も感じていないのだろう。

私は、また頭が茫然としてきた。今度はミス出来ない。次の動き、一つ一つ、それだけしか考えられなかった。

紫の異変に気付いたのは、そんな薄れる意識の中でだった。

私と紫の動きが違う。そんな筈は無い。互いが全く同じ、鏡映しの舞の筈。私は怖くなる。何を間違えたのか。でも、どうしてもそれが分からない。

(……紫が、順番を間違えている)

自分に何度も問いかけた後、私はそれに気付いた。嘘だと思った。でも、頭の中でシミュレートした舞に、今の紫の動きは無かった。

私はついに、舞うのを止めた。

「紫、駄目。それ違う」

「……え」

「もう一度初めから。仕切り直そう」

私は確かに見た。その時、紫の唇が、微かに震えていた。

。 。 。

全てが終わった後、結界は無事に引き直され、幻想郷はいつもの幻想郷のままだった。

酷く疲れた。何度も間違えて叱られた。私自身それに気付いているから、叱られた事実より、何度も同じ間違いをする自分に腹が立った。言われるまでも無い。精進が必要だなと、しみじみ思った。

後片付けに精を出す私に、紫がそつと耳打ちしてきた。

「……霊夢。お願いだから、その、今日の事は誰にも言わないでくれるかしら？」

ヘンな事を言う。

「紫？」

「天下の八雲紫よ。私は失敗しない事になっているの」

「……」

ナルホド。

私は紫の顔を見た。不思議な顔だった。少し頬を赤らめて、目を合わせようとしない。奇妙な気分だ。私はそんな紫を、苦手に感じなかったし、まして嫌いとも思わなかったのだ。

「……そうだよねえ。何たってあの八雲紫が、こおんな小娘に、間違いを指摘される訳無いもんねえ？」

「霊夢。打ち上げは何にしましょうか」

「焼き肉。牛ロース、特上で」

「容赦無いわね……」

私は、さっと紫の手を取ってみた。初めて触れた紫の手は、化け物の手では無い、人間と同じ温かな手だった。もう、わだかまりは消えていた。

「さあ行こう！ ほら、紫！」

「はいはい。そんなに走らないの」

私と紫が並んで歩く。紫の方が、頭一つ分くらい大きい。今はまだ、肩を並べるとはいかないが、しかし、いつかそんな日が来るのかも知れない。そんな日が、早く来たらいいなと思った。

そうして、私と紫との間に合った『結界』は、音も無く崩れていったのだ。

結果、結界決壊（後書き）

見えぬ線。越え難き壁。

勇気を出して踏み出してみれば、案外、愉快な何かが待っているのかも。

萌芽（前書き）

萌芽 ほうが

「スル」

- 1 草木の芽のもえ出ること。またその芽。
- 2 新しい物事が起こりはじめること。また、その兆し。

萌芽

晴れだった。

雲はあるが影は無い。教室の中に降り注ぐ陽光は、ガラスの反射で白く散り、遠目からでも眩い程だった。

カーテンの隙間から、外を見る。厚い布の隙間から覗いた空は、青天を絵に描いた様な晴れ模様だった。

冬の空は澄んでいた。私は、空の青を観察してみる事にした。

湿気を含まない空は、純粹な青を見せていた。薄いグリーンを帯びたライトブルー。青はどこまでも遠く、広く、宇宙の果てまで広がって見えた。

何者にも邪魔されない、私だけの世界。私はその青の上に、空想の絵筆を走らせた。

初めに羊を描いた。小さく丸い羊だ。羊は、ふらふらと頼りなく漂っていたが、横風に吹かれて形を変え、次には一隻の船となった。白く大きな蒸気船。船は空の海をぶかぶかと浮いている。すると、船にワカサギがやって来た。船は彼と親しげに話をしていたが、やがて、自由に飛べる鳥が羨ましくなって、今度は、飛行機へと形を変えた。白い線を引きながら、大きな飛行機が飛び回った。

私は、その後も様々なものを描いた。カモメ、鯨、西瓜、連凧、セコイアの木。取り留めも無く、頭に浮かんだものを次々と描いていく。ふと、私は、そのどれも実物を知らないのだと気付いて、妙におかしな気分になった。

——鳥だった。

青のカンヴァスの隅、寂しくなったケヤキの梢に、白い鳥が留まっていた。

小さな鳥だ。多分、セキレイか何かだろう。その鳥は枝から枝へ、枝から地表へ、しばらくの間、世話もなく飛び回っていたが、やが

て疲れたのか、目の前にある枝に留まった。

鳥と目が合う。その目はまるで、心の奥を見透かしているかの様な目だった。

「——フランちゃん！」

隣の席の大妖精が、私の袖を引っ張った。

私は、慌てて黒板に向き直った。

。 。 。

寺子屋の裏手の山には、頂へと至る山道がある。獣が通って出来た様な、何もない道だ。入り口は背の高い藪に隠れて見えにくく、場所を知っている者も少ない。鍵の壊れた鉄柵がぼつんと在るのみだが、これが、山頂への唯一の道だった。私はこの道を、寺子屋の住職に教わった。

それは低い山だった。湖の南に延びる山脈群には太刀打ち出来ない様な、可愛らしい山だ。これと言って名物も採れず、希少な生き物が住んでいる訳でも無い。だが、山頂からの景色には一見の価値があり、寺子屋にある鐘つき堂の瓦屋根から、遠く湖の向こう側の紅魔館まで広く見渡せた。

私は一目でこの場所が好きになった。

面白いことを考え付いたのだ。

私は、持ってきたスケッチブックを開いた。F6号荒目の水彩紙。パチユリーの図書館から、くすねて来た物だ。中には描きかけの絵がある。鞆から、鉛筆と練りゴムを取り出すと、早速作業に取り掛かった。

ところで、風景画の描き方にはコツがある。初めから細かく描き込まない事だ。切り取る範囲を決めると、長く持った鉛筆で大胆に全体を収めていく。そうして雰囲気を作られると、今度は、細かな

線で形を追うのだ。奥から手前へ。手前から奥へ。何度も行き来を繰り返し、山の稜線、揺れる水面、手前にある瓦屋根の質感、その景色の持つ「空気」を、小さなスケッチブックの中に収めていく。私は、何度もこの場所を訪れて、何度もその繰り返しを行なっていた。描いては消して、描いては消して。夢中になって腕を動かした。続けた。

……私は、幻想郷を描こうと思った。

私の幻想郷を“創ろう”と思ったのだ。

帰り道、壊れた錠を柵に掛けていると、後ろから呼ぶ声があった。「フランちゃん。何やってたのー？ 一緒に帰ろーよ」

日傘を傾けて、その誰かを見た。呼びとめたのは大妖精だった。

小川に掛かる橋の上から、彼女が大きく手を振っている。何故か彼女は、やたらと私に気を掛ける。

「ごめん。私、用事があるから」

「そっか。じゃあ、またね」

うん。それだけ言うと、私はそのまま歩き出した。大妖精は、もう一度私の名前を呼んだが、私は聞こえない振りをした。横目で少し振り返ってみると、遠めにも分かるくらい落胆している様だった。直後、居残りから解放されたチルノが、大妖精の元に走って来るのが見えた。話しかけられた大妖精は、チルノの言葉に頷いて笑っていた。

私は、それ以上見ない様にして、早足で、鐘つき堂の角を曲がった。

。 。 。

舟着き場に着くと、のんびりと揺れる船の上で、美鈴自身も舟を漕いでいた。頬を突いて起こすと「遅いから心配したんですよ」な

どと言った。私は「はいはい」と答えておいた。

美鈴は分が悪いと思ったのか、舟を出す準備を始めた。係留用のロープを外し、アンカーを引き上げる。手慣れた動きで櫂かいを漕ぎ始めると、ゆっくりと舟は動き出した。

「次からは、ちゃんとやって下さいね」

動き出した舟の上で、私はもう一度美鈴に諫められた。心配はもちろんだが、自分にも仕事がある。本業の門番も疎かには出来ない。そんな事を言っていた。私は美鈴の忠告を黙って聞き流し、幌の中で足を抱えた。それを見た美鈴は、小さく溜息を吐いたが、以後、その事については何も言わなかった。普段と変わらない、何時も通りの美鈴の声。鼻唄を歌いながら、櫂を漕ぐ美鈴を見て、私は少し調子が悪かった。

船はゆっくりと揺れながら進んでいく――。

「……ねえ。何で私は駄目なんだろう」

暫く経って、私は誰にでも無しに呟いた。それを聞いていた美鈴は、意図が分からずポカンとしていたが、私が外の景色を見ているのに気付くと、困った顔をしながら言った。

「恐らく、長い間地下に居られましたので体の方が慣れていないのでしょう。パチュリー様はそう仰っていました」

「そう」

「大丈夫ですよ。きっと、直ぐに他の子たちとも遊べる様になりますよ」

……そんな言葉が聞きたかったのでは無いのに。私は、面白くなかったので話題を変えた。

「大体、お姉ちゃんも意味が分かんないよ。あんなレベルの低い所に行っても、学ぶ事なんか何も無いのに」

私は話に困ると、いつも姉の愚痴を言った。姉はいい。とても役に立つ。それさえ言っていれば、勝手に時間が流れていく。

「フランドール様は、お屋敷でも、よくご本を読んで居られますもんね」美鈴が言った。

「図書館で本を読んでいる方が、絶対勉強になるよ」

「でも、本を読むだけが勉強ではありませんし——」

……それから私は、取り留めの無い愚痴を美鈴に漏した。姉のこと。寺子屋のこと。また姉のこと。途中から、何に対して腹が立っているのか分からなくなったが、美鈴は、曖昧に頷きながら最後まで聞いてくれた。私は、言うだけ言つと、少しだけ楽になった。

紅魔館の船着き場が見えてきた頃に、ふと、美鈴が思い出したように言つた。

「そういえば、完成したら私にも見させて下さいね。——絵」

「……嘘」

「帰りが遅かったもので、失礼とは思いましたが、“氣”を調べさせて頂きました。余計な事でしたか？」

「……」

美鈴にはそういう能力があつた。生きとし生ける者全て、何らかの形で“氣”を発しているらしい。それを探知出来るのも美鈴の能力だった。

「……お姉ちゃんには言つちゃ駄目だよ？」

「はい。二人だけの秘密と言う事で」

そして波の擦れる音がした。

。 。 。

次の日の朝、私は寺子屋を遅刻した。私が遅刻したのは初めてだったが、誰も不審には思わなかった。そもそもロクに教員の揃わない幻想郷では、寺子屋の開校は不定期だ。教員の都合により有ったり無かったりする為、子供の遅刻や早退も日常茶飯事だった。その為、私の遅刻も深く問い質される事は無く、唯一、勘の良い慧音だけが首を捻っていたが、それも気にしない事に決めた様だった。

私を呼びに来てくれたのは大妖精だった。

私は、それまでずっと、スケッチブックに向かっていたのだ。

早朝、美鈴の船で送られた私は、直ぐにあの山を目指した。昨日の事が在ったからかも知れない。早く絵を完成させたいと思ったのだ。私は、夢中で鉛筆を動かし、もし誰かが呼びに来てくれなければ、一日中そこに居たかも知れない。私は、走って来た大妖精の顔を見て、驚きと、ほんの少し安堵を感じていた。

……何故、彼女が私の居場所を知っていたかは分からない。ただ彼女は、その後も、いつも通り私に接した。

午後の授業は中止になった。午後からの担当が、法要に出掛けてしまったのだ。子供たちは浮かれ騒ぎ、私は気兼ね無く山に向かう事にした。

（今日は大妖精からの声が無かった……）

私は、教室を出て思いだした。いつもは一声掛けていたので妙に思ったが、あまり気にしない事にした。彼女も浮かれていたに違い無い。遊びの約束でもしていたのだろう。

靴を履き替えて、傘立てで日傘を探していると、私の横を子供たちが走り抜けた。見ると、橋の上で、数人の男の子たちがじゃれ合っていた。彼らも、これから遊びに出掛けるのだろうか。それとも親の手伝いがある子も居るのかも知れない。いずれにせよ、子供たちの顔は明るかった。太陽の祝福を受けて、花の様に輝いていた。

——私は思う。

太陽が私を嫌っているのか。それとも、私が太陽を嫌っているのか。

恥ずかしくなった私は、その顔を背にして藪の中へ逃げた。

……そんな気持ちで来たからか、最初は異変に気付かなかった。ぶら下がるそれが鼻を掠めて、私は初めて存在に気付いた。柵には

何か掛けてある。よく見ると、それは造花の首飾りだった。首飾りには手紙が付いている。

頭上の枝に、白い鳥が留まった。あの時の鳥だ。鳥は真っ直ぐに私を見据え、まるで私を、非難しているかの様だった。

手紙を握り締めた。私は、跳ねる様に山道を駆け上がった。

萌芽（後書き）

新しい年であります。今年も宜しくお願いします。

ばとんたうち（前書き）

ほら、受け取って。

ばとんたっち

掘り出し物であった。

神社の裏の倉庫で見つけた。私が使っていたモノより長い。手に取ってみると、ずっしりとした重みがある。かなり使い込まれていたらしく、握りの部分には、手垢の跡が残っていた。

——竹馬である。

今日空前の竹馬ブーム、という訳ではないが、子供が遊んでいるのを見ると、無性にやりたくなった。この、あまりに単純な己の思考回路には、自分自身呆れてしまいそうだが、やりたくなったものは仕方がない。博麗の看板にはひとまず留守にしてもらい、倉庫の中を引っかき回していた次第であった。久しぶりの竹馬の感触に、私は少し舞い上がっていた。

私が竹馬ライフを謳歌していたのは、もう何年も前の話である……。

ある日のことだ。私の町に、竹馬名人なる謎の男が現れた。レオタードにシルクハットという怪しい出で立ちの男だったが、面白いものを見せてやるからと、私を含む近所の子供たちはホイホイとついていった。男は当時遊び場に使っていた空き地に皆を呼び寄せるとおもむろに竹馬を取り出した。そして、見事な芸を披露してくれたのである。

……私たちは感動した。

名人の竹馬は、それそのものが生き物のようであった。まるで、馬が走るが如く駆け、鳥が飛ぶ如く跳ねた。見守る私たちは、名人の一挙手一投足に釘付けになり、惜しみなない拍手と喝采を以て、名

人の妙技を賞賛した。実は、後で知ったのだが、名人は昔、どこその雑技団に席を置いていたらしい。それ故この程度の芸は朝飯前だったのだが、それを知らない私たちの目には、竹馬名人が、宇宙からやって来たヒーローのように映った。

その後、名人は名も名乗らず、風のように去って行った。私たちはその影を、羨望の眼差しで追いかけた。非常にエキサイティングで有意義な時間であった。私たちは、意気揚々と、それぞれの家路に着いたのである。その後の子供の思考など、あえて言うまでもないだろう。

対する母の行動も早かった。すぐさま先手を打ち、竹馬禁止令を発令したのである。家族会議の議決を得ずしての独断の制定であった。いわく、『品行方正、純情可憐な乙女たる巫女が、竹馬だなんて破廉恥な』との事であった。簡潔に言えば、スカートの中の問題であった。

それ以後、母は持論を熱心に説き、何とか私と竹馬を離れさせようと苦心した。母は、天土あまつち開けし神代かみよの時代の歴史から、敬神崇祖けいしんすうその尊き教え、果ては目玉焼きにかけるソースと醤油の使い分けに至るまで、ありとあらゆる角度を以て『巫女＋竹馬』の不道德さを語り明かした。迎え撃つ私も、母の話を熱心に聞き、時に相槌をうち、時に異論を唱え、私たち母子おやこは、竹馬から、人生の哲学を語り合ったのである。

そして私は竹馬が大好きになった。

付け加えるならそれは“嗜む程度”ではなかった。

“極めんが如く”であった。

……久しぶりに立ってみると、目の前の景色が変わった。昔のことだが、体は覚えているものだ。視線が高くなって、いつもより遠くを見渡せる。瓦屋根の向こうで、郵便屋さんの自転車が見えた。

遠くに屹立^{きつじつ}する銭湯の煙突も、湖の上で氷精が飛んでいるのも、私にはよく見えていた。

（まるで、自分が違う世界から幻想郷を眺めているみたい）

私は、この景色が大好きだった。

脇の小道から、こちらに走ってくる子供がいた。よく神社に遊びに来る女の子である。女の子は、そのまま石段を駆け上がり始める途中で顔を上げると、少し背の高くなった私に気付いた。一瞬驚いたが、すぐ、嬉しそうな顔をして手を振る。私は、思わず苦笑いで返した。

……参った。あの子のことだ。こんな私の姿を見たら、ぜひ自分も乗らせるとうるさいだろう。そして、一度言い出したら聞かないのだ。私としては、あの子はそそっかしくて不器用だから、なるべくなら使わせたくない。さて、どうしたものか。

そんなことを考えている内に、女の子はすでに、足元で待ち構えていた。その満面の笑みに押され、私は渋々竹馬から降りる。せめて、スカートの中には気を付けるように、そう言い聞かせようと思っ

ふと、手元の刻印に目がいった。

……今、気付いた。

竹馬の握りには、よく知る名前が彫られてあった。

ばとんたち（後書き）

引き継ぎ完了。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8653j/>

平成幻想奇談掌編録

2011年3月3日19時40分発行